

# MFG/PRO eB2 インストール ガイド

## Oracle データベース



78-0583B  
MFG/PRO eB2  
2003 年 1 月

本書には、著作権によって保護された知的財産に関わる情報が記載されています。本書のいかなる部分も、QAD Inc. から事前に文書による承諾を得ることなく、複写、翻訳、または改変してはなりません。本書に記載されている情報は、予告なく変更されることがあります。

弊社は本資料を「現状のままで」提供し、明示、黙示を問わず、商品性および特定の目的に対する適合性を含むいかなる保証もいたしません。弊社は、保証、契約、またはその他の法的見解の範囲内外にかかわらず、本資料の提供、性能、または使用に関し、本書に含まれるエラー、付随的損害または間接的損害（利益の損失を含む）に対して一切責任を負いません。

MFG/PRO は QAD Inc.、QAD、および QAD eQ の登録商標です。QAD のロゴは QAD Inc. の商標です。

通常、他社がその製品を識別するために使用している表示は、商標として権利が主張されます。本書では、製品名は頭文字を大文字にするか、または全体を大文字にして表示してあります。商標または登録商標に関する詳細については、該当する各会社にお問い合わせください。

Copyright © 2003 by QAD Inc.  
78-0583B

**QAD Inc.**  
6450 Via Real  
Carpinteria, California 93013  
Phone (805) 684-6614  
Fax (805) 684-1890  
<http://www.qad.com>

# 目次

<b>このガイドについて</b> .....	<b>1</b>
このガイドの内容 .....	2
対象読者 .....	2
インストールドキュメンテーション .....	3
関連の MFG/PRO インストールドキュメント .....	3
表記規則 .....	4
UNIX および Windows へのインストール .....	4
時間の表記方法 .....	4
QAD サポート サービス .....	5
インストール中のサポート .....	5
<b>第 1 章 MFG/PRO Oracle インストールの計画</b> .....	<b>7</b>
インストールの計画 .....	8
サービス パックのインストール .....	8
ネットワーク、ディスク、およびクライアントのレイアウト .....	9
導入 .....	9
データベース サーバーのインストール .....	11
ファイル サーバーのインストール .....	12
リモート クライアントのインストール .....	13
多言語 .....	13
基本言語の制限事項 .....	14
複数言語のインストール .....	14
インストール作業のまとめ .....	14
クライアント CD の内容 .....	14
インストール前の注意事項 .....	15
サーバー インストールのまとめ .....	15
ホスト クライアント インストールのまとめ .....	19
リモート Windows のインストールのまとめ .....	20

複数言語のインストールのまとめ	21
追加データベース インストールのまとめ	21

## 第 2 章 システムの必要条件 .....23

全般的な必要条件	24
システムの必要条件	24
データベース サーバー	24
ファイル サーバー	25
リモート クライアント	25
ネットワーク	26

## 第 3 章 データベース サーバーのインストール .....27

準備手順	28
UNIX 上での Progress Probuild の実行	28
非西欧言語のセットアップ	32
Windows インストール セットアップ (Windows のみ)	32
インストール ユーザーおよびグループの作成 (Unix のみ)	33
各種許可	34
サーバー ファイルのインストール	34
CD-ROM のマウント (UNIX のみ)	34
テープ メディアのロード (UNIX のみ)	35
データベース サーバーのインストール	36
言語ファイルのインストール	38
MFG/UTIL クライアントのセットアップ (Windows のみ)	39
スキーマ ホルダの作成	40
スキーマ ホルダの作成	40
MFG/PRO スキーマのロード	41
イメージ前ファイルの切り捨て	43
SQL スクリプトの作成	43
SQL スクリプト情報の入力	44
MFG/UTIL の終了および SQL スクリプトの確認	47
SQL スクリプトの実行	49
MFG/PRO データのロード	52
MFG/UTIL Guided Setup の起動	52
システム データのロード	53
インデックス SQL スクリプトの実行	55
スキーマ ホルダのコピー	56
更新前イメージ ファイルの切り捨て	58

## 第 4 章 ファイル サーバーおよびホスト クライアントのインストール .....59

概要 .....	60
UNIX ホスト クライアントのインストール .....	61
UNIX クライアントの追加 .....	62
Windows ファイル サーバーのインストール .....	62
準備手順 .....	62
インストール手順 .....	62
progress.svg の編集 .....	64
Progress スキーマ ホルダの作成 .....	64
スキーマ ホルダの作成 .....	65

## 第 5 章 データベースのセットアップとアプリケーションのコンパイル .....69

データベース セットの設定 .....	70
多言語コンパイル セットの準備 .....	70
データベース セット設定画面 .....	71
Production データベース セットの設定 .....	71
Compile データベース セットの設定 .....	74
アプリケーション コードのコンパイル .....	74
マルチスレッド コンパイル .....	75
コンパイル .....	75
追加言語のコンパイル .....	79
スクリプトおよびショートカットの生成 .....	80
UNIX スクリプトの編集 .....	81
特定言語の Windows ショートカットの作成 .....	82
Windows 起動パラメータの変更 .....	83
クライアント環境のテスト .....	83
データベースのバックアップ .....	83
リモート クライアントのエクスプレス セットアップ .....	84
リモート クライアントのセットアップ条件 .....	84
エクスプレス セットアップの使用 .....	85
エクスプレス セットアップ設定の変更 .....	85
ロケールの作成 .....	86
Progress 初期化ファイル .....	86
初期化ファイルのエントリ .....	87

<b>第 6 章 MFG/PRO のセットアップ</b> .....	<b>89</b>
起動および登録 MFG/PRO .....	90
最初のユーザーの設定 .....	92
国コードの設定 .....	92
時間帯のロード .....	93
アクセス ロケーション コードの設定 .....	93
ユーザーの定義 .....	94
オンライン ヘルプのロード .....	95
言語のインストール状態のテスト .....	96
MFG/PRO の終了 .....	97
<b>第 7 章 追加データベースのインストール</b> .....	<b>99</b>
まとめ .....	100
推奨する構成 .....	100
追加構成 .....	101
スキーマ ホルダの作成 .....	103
空のスキーマ ホルダのコピー .....	103
データベース所有者の変更 .....	104
SQL スクリプトの変更 .....	105
MFG/PRO スキーマ スクリプトの変更 .....	105
MFG/PRO データベース ビルド スクリプトの変更 .....	107
SQL スクリプトの実行 .....	109
MFG/PRO データのロード .....	109
データベース専用データ .....	109
インデックス SQL スクリプトの実行 .....	109
データベース セットの設定 .....	110
起動スクリプトの生成 .....	110
Windows クライアントのセットアップ .....	110
<b>第 8 章 追加のセットアップ</b> .....	<b>111</b>
Oracle データベースの変更 .....	112
カスタム Progress データベースから Oracle への移行 .....	112
インストール スクリプト コマンドの変更 .....	114
シーケンス シノニム スクリプトの使用 .....	115
クライアント PROPATH の変更 .....	116
SQL スクリプトの検証 .....	117
予期しないエラーの特定 .....	117
Oracle エラー ORA-12805 の解決方法 .....	118

<b>用語集</b> .....	<b>119</b>
<b>索引</b> .....	<b>123</b>





# このガイドについて

このガイドの内容 2

インストールドキュメンテーション 3

表記規則 4

QAD サポート サービス 5

## このガイドの内容

このガイドでは、以下を実行する手順を説明します。

- Unix サーバーまたは Windows サーバー上への MFG/PRO on Oracle のインストール
- MFG/PRO キャラクタ クライアント ソフトウェアのインストール
- MFG/PRO Windows クライアント ソフトウェアのインストール
- キャラクタ クライアントおよび Windows クライアントを含む標準的な MFG/PRO 環境の設定

インストールされたシステムは、eB2 のサービス パックの現バージョンをカバーしています。サービス パックを利用して既存の eB2 環境をアップグレードする場合には、サービス パックの CD に付属のインストール手順説明書を参照してください。

このガイドを使用すると、実務用データベースだけでなく、トレーニング用、デモ用、および他の目的のための MFG/PRO データベースをインストールすることができます。さらに、複数のユーザー言語を使用できるように、これらのデータベースをインストールすることもできます。

### 対象読者

このガイドの手順は、MFG/PRO データベースをインストールする MFG/PRO システム管理者を対象としています。また、このガイドでは、UNIX オペレーティング システム、Oracle データベース環境、Microsoft Windows、Progress ソフトウェア、および今回のインストールに必要なネットワークングについて十分ご理解されていることを前提としています。

## インストール ドキュメンテーション

このドキュメントは、次の QAD グローバル サポートの Web サイトでご覧いただけます。

<http://support.qad.com/documentation/>

インストール作業を始める前に、このドキュメントの最新版（項目番号 78-0583B）がお手元にあることをご確認ください。

このドキュメントでは、次の CD のインストール方法を説明します。

- データベース サーバー
- データベース サーバー言語ファイル
- キャラクタ クライアント
- GUI クライアント

**注意** CD のアイテム番号はご購入の構成によって異なります。

今回のインストールを変換の一環として実行される場合は、以下も必要です。

78-0571A、MFG/PRO eB2 Conversion Guide (MFG/PRO eB2 変換ガイド)

### 関連の MFG/PRO インストールドキュメント

MFG/PRO on Oracle をインストールすると、実務用およびサポート用のデータベースだけでなく、トレーニング用、デモ用、またはパイロット用に必要なすべてのデータベースも作成されます。

- 今回のバージョンの MFG/PRO をインストールし、旧バージョンから変換する場合は、『MFG/PRO eB2 Conversion Guide』（MFG/PRO eB2 変換ガイド）を参照してください。
- QAD Desktop をインストールするには、『Installation Guide: QAD Desktop』を参照してください。
- Q/LinQ のインストール手順は、『External Interface Guide: Q/LinQ』（外部インタフェースガイド：Q/LinQ）を参照してください。

他の全ドキュメントのリストについては、QAD の Web サイトをご覧ください。

## 表記規則

このガイドでは、次の表記規則を使用しています。

項目	説明
monospaced text	コマンド、ファイル名、またはパス。
<i>italicized monospaced text</i>	オペレーティング システム コマンドの一部として入力する値の変数名。例： <code>cdrom</code> 。
indented command line	1 行に入力したが、テキストでは 2 行であるように見える長いコマンド。
<b>注意</b>	例外または特殊な状況。
<b>重要</b>	大切な情報。
<b>警告</b>	その指示に従わなければ、データを上書きしたり、破損させたりするおそれのある状況。

## UNIX および Windows へのインストール

本書は、UNIX と Windows プラットフォームへの MFG/PRO のインストールについて解説しています。本書の手順では、キャラクタ画面、UNIX ファイルおよびパスの規定を使用します。2 種類の手順が提供されている場合には、どちらのオペレーティング システムの手順にあてはまるかを、見出しと本文に明示しています。

## 時間の表記方法

● 時間 00:02:30

処理が説明されている箇所の余白に、おおよその時間値が示されています。この段落の余白の例は、2 分 30 秒となっています。5 分未満の時間値はすべて、次の 30 秒に端数を切り上げられています。5 分を超える場合、値は次の分に端数を切り上げられています。これらの時間は、各処理にかかる相対的な時間を見積もることができるように与えられています。

このドキュメントで使われる時間値は、次の条件の Hewlett Packard K580 から得たものです。

- 4 個の 240Mhz CPU
- 1 GB の RAM
- 72GB のディスク容量 (20 個の物理ドライブに分散) (インストールには 2 ドライブを使用)
- 平均 75 人の同時使用ユーザー

## QAD サポート サービス

MFG/PRO のインストールには、幅広い構成の可能性、高い拡張性、およびカスタマイズの容易さがあります。このガイドでは基本的なインストール情報を提供しますが、可能なコンピューティング環境または構成のすべてをカバーすることはできません。

特定環境で MFG/PRO のフレキシビリティと機能性を最大限に活用するには、QAD サポートまで、QAD の提供するインストール情報やカスタマイズ情報についてお問い合わせください。これらのカスタマイズ用製品には、パフォーマンス強化、技術および管理面でのトレーニングを行うものがあります。

### インストール中のサポート

このガイド以外にも、問題が発生した場合のリソースがあります。

### インストール前の段階での QAD サポートへのお問い合わせ

MFG/PRO をインストールする予定であることを QAD サポートにお伝えください。問題が発生した場合に連絡できる人物を指定してください。その人とハードウェア、ディスク容量、および設置計画について話し合ってください。

### QAD Knowledgebase の利用

QAD の Web サイトでは、QAD の広範囲な knowledgebase にアクセスすることができます。ご質問を数通りの方法で尋ねてみて、現在抱えている問題に近い回答が得られるか試してみてください。


### Web から利用できるその他のリソース

Progress の問題については、次の Web サイトで Progress knowledgebase を使用してください。

<http://www.progress.com/support/kb/index.htm>

OS に関連した問題については、製造元のサポートを使用するか、Web 上のほかの検索エンジンを利用してください。

## 6 MFG/PRO eB2 インストール ガイド - Oracle データベース



## 第 1 章

# MFG/PRO Oracle インストールの計画

この章では、MFG/PRO on Oracle をインストールまたは変換する場合、この作業を始める前に理解しておかなければならない基本的な事項について説明します。

インストールの計画 8

多言語 13

インストール作業のまとめ 14

**重要** 旧バージョンで MFG/PRO のインストールを経験なさいていれば、今回のバージョンからインストール作業が大幅に効率化されていることにお気付きになると思います。インストールを始める前にまずこの章をお読みになってから、インストラクションをお読みください。

## インストールの計画

インストールには次の 3 通りの場合があります：

- 新規インストール
- サービス パックを含む新規インストール
- 旧バージョンの MFG/PRO から今回のバージョンへの変換をサポートするインストール

旧バージョンの MFG/PRO から移行する場合は、『MFG/PRO eB2 *Conversion Guide* (item 78-0571A)』（MFG/PRO eB2 変換ガイド）で計画を始めてください。このガイドに記載のインストール手順は、これよりも大きな変換プロセスのなかのひとつの手順として扱われています。

このガイドでは、サーバー、UNIX ホスト クライアント、Windows リモート クライアントに、コア データベースをインストールする場合の手順について解説します。

### ヒント

QAD で新しい用語や用法が異なる用語が出てきた場合、119 ページの用語集で定義を確認してください。

新規インストールでも、変換の場合でも、ソフトウェア コンポーネントに関して次の事項を計画する必要があります。

- システム環境のアドレス指定：
  - パイロット用データベースと実務用データベース
  - トレーニング用データベース
  - 開発用データベース
- 使用する言語
- 補助テーブルの設定 (MFG/PRO 管理データベース、ヘルプ データベース、カスタム データベースなど)
- 最終的なネットワーク、ディスク、クライアントのレイアウト

## サービス パックのインストール

サービス パックも含めて eB2 をインストールまたは変換される場合は、必要なすべての手順がこのガイドに説明されています。既存の eB2 のインストールをサポートするサービス パックをインストールする場合は、サービス パックメディアに付属の手順に従ってください。

## ネットワーク、ディスク、およびクライアントのレイアウト

マシンレベルでは、MFG/PRO on Oracle を1台のデータベースサーバーに導入し、キャラクタクライアントをメインサーバーにインストールして管理プロセスやバッチプロセスを行わせることをお勧めしています。UNIXでは、このキャラクタクライアントが、データベースへの追加ターミナル接続をサポートしています。

Windowsクライアント(GUIまたはキャラクタ)の使用を計画している場合は、データベースサーバーとは別のファイルサーバーに、クライアントファイルをインストールすることをお勧めします。

この他のデータベース(トレーニング用、開発用、デモ用)は、実務用のMFG/PRO on Oracle データベースのために作成されたOracleインスタンスを共有する場合、オーバーヘッドは少なくてすみます。

## 導入

キャラクタ /GUIクライアントが接続されたWindowsサーバーやUNIXサーバーにMFG/PRO eB2をインストールすることができます。MFG/PROは3種類のコンポーネントから構成されています。

- データベースサーバー
- ファイルサーバー
- リモートクライアント

## データベースサーバー

データベースサーバーはMFG/PROデータベースからなります。インストールの一環として、これらのデータベースを構築します。すべてのクライアントは、ファイルサーバーを経由してこれらのデータベースに接続されます。

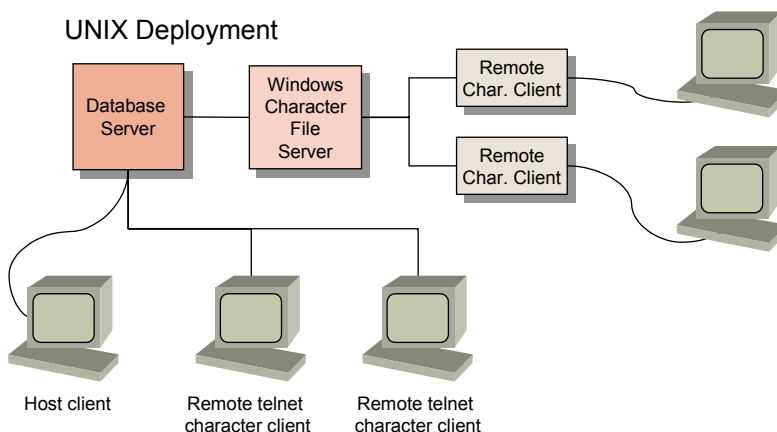
## ファイルサーバー

ファイルサーバーは、特にこのマシンのためにコンパイルされたMFG/PROソースコードの格納先です。生成された.rコードは、接続されているクライアントによって実行されます。

ファイルサーバーが図 1.1 のようにUNIXマシンである場合は、リモートキャラクタクライアントはtelnetによってこのマシンに接続できます。リモートクライアントは、ホストクライアントのために生成された起動スクリプトを使ってMFG/PROを実行します。リモートクライアントのセットアップは必要ありません。

図 1.2 のようにファイル サーバーがキャラクタ クライアントまたは GUI クライアントを使用する Windows マシンである場合や、図 1.1 のように UNIX ファイルサーバーに対して GUI クライアントを実行したい場合は、クライアント PC ごとにリモートクライアントのセットアップが必要です。

図 1.1  
UNIX への導入

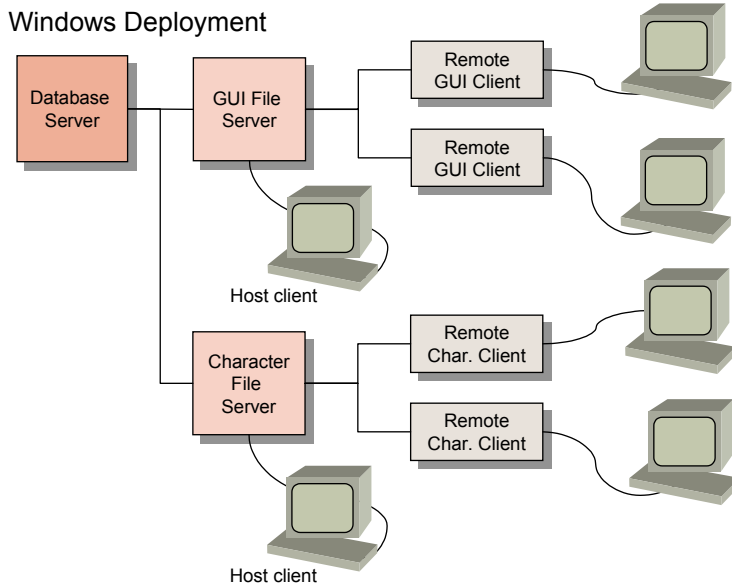


## リモート クライアント

詳細については、「MFG/UTIL」(16 ページ)を参照。

Windows ファイル サーバーに接続されるすべての GUI クライアントとすべてのキャラクタ クライアントには、リモートクライアントのセットアップが必要です。リモートクライアントをセットアップすると、クライアント PC 上に MFG/UTIL のコピーが作成されます。次に、ファイルサーバーに接続されているクライアント上で MFG/UTIL を実行すると、ローカルの起動スクリプトを生成することができます。このクライアントはファイルサーバー上でソースコードを実行し、データベースサーバーのデータベースにアクセスします。

図 1.2  
Windows への導入



## データベース サーバーのインストール

Oracle 上の実稼動の MFG/PRO データベースの作成には、3 段階の手順が必要になります。まず Progress スキーマ ホルダを作成し、次に QAD が提供する SQL スクリプトを使用して Oracle データベースを構築します。最後にデータをロードします。

## データベースのサイジングとレイアウト

MFG/PRO on Oracle のインストールの最も重要な必要条件のひとつに、データベースをサーバー上の複数のディスクにどのようにレイアウトするかということがあります。変換作業を行おうとしている場合は、すでに既存のデータベースをもっているため、このプロセスはそれほど難しくありません。しかし、MFG/PRO on Oracle を初めてインストールしようとする場合は、予測を立てながら、テーブルスペースを複数のディスクにレイアウトしたりこれらのテーブルスペースのサイズを決定したりする必要があります。

デフォルトのテーブルスペースと、それぞれに割り当てられる MFG/PRO テーブルについては、.sql スクリプトに詳しく説明されています。これらのファイルを変更して、テーブルスペースの場所とそれらのサイズを決定してください。

「SQL スクリプトの実行」(49 ページ)を参照。

## ファイル サーバーのインストール

一般的にはファイル サーバーはデータベース サーバーと同じマシンにインストールしますが、必ずしもそうしなくてもかまいません。ファイル サーバーは次の手順で作成されます。

- MFG/PRO ソース コードのインストール
- ホスト クライアント コードのインストール
- データベース セットの設定
- ソース コードのコンパイル
- ホスト クライアント（およびリモート UNIX クライアント）のための起動スクリプトの生成

ファイル サーバー、キャラクタ サーバーまたは GUI サーバーのいずれでもかまいません。両方使用することもできます。キャラクタ ファイル サーバーはキャラクタ クライアント CD からインストールし、GUI ファイル サーバーは GUI クライアント CD からインストールします。両方のタイプのクライアントを使う場合は、ファイル サーバーが両方とも必要になります。

## データベース セット

データベース セットは、起動スクリプトで起動、シャットダウン スクリプトによって停止される、複数データベースのグループです。Oracle では、データベース セットは Oracle データベースと Progress スキーマ ホルダから成ります。これらのデータベースはデータベース セットに含まれ、起動 / シャットダウン スクリプトはそれぞれに対して生成されます。インストールの一環として、データベース セットを定義します。一般的なセットは次のようになっています。

- Demo
- Train*N*（各生徒ごとに 1 つ）
- Development
- Production
- コンパイル

データベース セットを作成したら、各セット内のデータベースを起動する起動スクリプト、および停止するシャットダウン スクリプトを生成します。

## リモートクライアントのインストール

Windows キャラクタ /GUI クライアントのリモートクライアントをインストールするには、まず専用のインタフェースのファイルサーバーをインストールしておく必要があります。ファイルサーバーに接続して、リモートマシン上でクライアントのインストール手順を実行することにより、リモートクライアントをインストールすることができます。

## 多言語

MFG/PRO は、データベースごとに複数の言語をサポートしています。複数の言語をインストールする場合は、基本言語のインストール CD のほかに、追加言語ごとの言語 CD が必要です。

表 1.1 に、MFG/PRO の上位 13 言語の言語コードを示します。言語コードは、お手持ちの製品メディアのラベルにも記載されています。非西欧言語には、いくつかの追加手段が必要となります。

言語	コード	言語	コード
中国語、簡体 *	CH	イタリア語	IT
中国語、繁体 *	TW	日本語 *	JP
チェコ語 *	CZ	ポーランド語 *	PL
オランダ語	DU	ポルトガル語	PO
英語	US	スペイン語、中南米	LS
フランス語	FR	スペイン語、標準語	CS
ドイツ語	GE		

\* 非西欧言語

MFG/PRO データベースは言語に依存しないので、一般に1つのデータベースに複数の言語をインストールできます。各ユーザーはデータベースにログインしたときにデフォルト言語が割り当てられ、メニュー、メッセージ、ラベルはすべてその言語で表示されます。ユーザーが言語を変更したい場合は、[ユーザー登録 / 変更] (36.3.18) で新しい言語を選択できます。一般的には、システム管理者に変更を依頼し、MFG/PRO を終了し、再起動して新しい言語で仕事を始めるという方法をとります。

### ヒント

MFG/PRO の各リリースで必ずしもすべての言語が用意されているとは限りません。

表 1.1

MFG/PRO の主な言語コード

## 基本言語の制限事項

基本言語とは、MFG/PRO サーバーにインストールする最初の言語です。基本言語がシングルバイトのデータベースにダブルバイト言語（例えば日本語）をインストールして使用することはできないので、必要な場合はダブルバイト言語を先にインストールしてください。基本言語がダブルバイト言語の場合は、同一データベースにシングルバイト言語をインストールして使用することは *可能* です。

## 複数言語のインストール

●「複数言語のインストールのまとめ」(21 ページ)を参照。

1つのデータベースに複数の言語をインストールする場合は、インストールしたい言語ごとに一連の手順を繰り返すことになります。後で言語間でコードページの矛盾が発生しないようにするために、未定義のコードページに対してご使用の多言語プログラムをコンパイルすることも行います。これらの手順の説明はすべてこのガイドに記載されています。

## インストール作業のまとめ

MFG/PRO のインストールでは、サーバーのインストールと設定、およびクライアントのインストールが必要となります。

## クライアント CD の内容

すべてのお客様は、印刷されたリリース メディア レポートを出荷製品の一部としてお受け取りになります。これは重要なドキュメントです。このドキュメントはリリース メディアには入っていないので、紛失しないように安全な場所に保管してください。

リリース メディア レポートには、MFG/PRO で実行されるモジュールのライセンスについて示されています。モジュールのソース コードを注文された場合には、レポートの Src 列に X が付いています。

リリース メディアの中には、mfgpro/dist/1st のディレクトリに、.1st の拡張子の付いたファイルがあります。これらのファイルには、各モジュール内でライセンスのあるそれぞれのプログラムが書かれています。例えば、有効な Purchase Order モジュール プログラムは po.1st に記載されています。インストール作業をすると、これらのプログラムの一覧がお使いのディスクの *MFGPROInstallDir/dist/1st* に格納されます。

.rp ファイルには、各モジュールのレポートおよび照会の一覧があります。iv.1st ファイルは共有インクルード ファイルの一覧です。

あるプログラムを実行しようとし、それを実行するライセンスがないというメッセージが出た場合は、まずリリース メディア レポートを見て、そのモジュールのライセンスがあることを確認してください。次に、モジュールの一覧を見て、そのプログラムが予期したモジュールにあるかどうか確認してください。

## インストール前の注意事項

MFG/PRO をインストールする前に、次の作業を行ってください。

- ネットワークをセットアップする。
- ご使用になっているオペレーティング システムの最新パッチをインストールする。必要な OS パッチについては、『*Oracle Installation Guide*』と『*Progress Availability Guide*』の両方を参照してください。
- Oracle をインストールする。
- Oracle 最新パッチをインストールする。これらのパッチは以下から入手できます。

[metalink.oracle.com/](http://metalink.oracle.com/)

- MFG/PRO サーバー用の Progress ソフトウェアをインストールする。
- MFG/PRO クライアント用の Progress ソフトウェアをインストールする。
- Progress の最新パッチをインストールする。これらのパッチは以下から入手できます。

<http://www.progress.com/support>

## サーバー インストールのまとめ

MFG/PRO on Oracle サーバーをインストールすると Oracle インスタンスと実務用データベースがいくつか作成されます。トレーニング用、開発用、およびその他のデータベースについては、「追加データベース インストールのまとめ」(21 ページ) を参照してください。

- 1 サーバーにいくつかのファイルをインストールします。
- 2 空の Progress スキーマ ホルダを作成し、MFG/PRO スキーマをロードします。
- 3 Oracle インスタンスとデータ オブジェクトを生成する SQL スクリプトを作成します。
- 4 SQL スクリプトを実行します。
- 5 言語依存データおよび言語非依存データをロードします。

- 6 SQL スクリプトを実行してインデックスを作成します。
- 7 空のスキーマ ホルダを、新規の実務用スキーマ ホルダにコピーします。

## MFG/UTIL

すべてのインストール作業は MFG/PRO ユーティリティ MFG/UTIL を使用します。これは、データベースへの接続、切り捨て、ダンプ、ロード、コピー、およびその他さまざまな機能をもつデータベース管理ツールです。各インストール作業は、半自動の MFG/UTIL Guided Setup を使って実行します。

MFG/UTIL のキーボード コマンドを表 1.2 に示します。

**表 1.2**  
MFG/UTIL のキャラクタ インタフェース コマンド

キーボード入力	コマンド名	説明
F1	Go	次のフレームに移動、またはプログラムを実行します。
F2	Help	コンテキストセンシティブ ヘルプを表示 (すべての機能のヘルプが表示されるわけではないことに注意)
F3	Menu Bar	メニューバーを表示します。
F4	End	フレーム、プログラム、メニューなどを終了します。
スペースバー	Select	チェックボックスやオン / オフ オプションを選択します。
Enter または Tab	Tab	次のフィールドまたはコマンドに移動します。
Shift+Tab または Control+U	Back Tab	前のフィールドまたはコマンドに移動します。

**注意** キャラクタ インタフェースでは、ボタン コマンドは山カッコで囲まれています。<OK> ボタンを選択するには、タブを押してそのボタンに移動し、Enter を押します。

## Guided Setup

Guided Setup は初期化ファイルを使用して、インストール手順とその順序を管理しています。このファイルにより、スキーマホルダの作成、SQL スクリプトの作成と実行、データのロード、およびコンパイルが、順序だてて実行されます。このインストールガイドでは、Guided Setup 初期化ファイルで定義されているインストール方法にそって説明します。

- データベース サーバー - wkodbsrv.ini
- キャラクタ クライアント - wkprcc.ini
- Windows クライアント - wkprgc.ini

MFG/UTIL は手順がどこまで進んだかを記憶するので、インストールを途中で止めて後で再開できます。各手順グループごとに、次のようなステータスを作成するためのテキストトークンが初期化ファイルに書き込まれます：Not Run、Started、Error、および Done。

**重要** 最後に実行した手順グループを再実行したい場合、Guided Setup は、先頭の入力画面に戻ってセットアップ データを再入力できるようにはしてくれない場合があります。この場合は、適当なテキスト エディタを使って、初期化ファイル内でその手順グループに付いているトークンを「Not Run」に変更してください。

## 多言語用 MFG/UTIL の編集

多言語を使用する場合には、データベースの設定を開始する前に初期化ファイルを変更してください。変更点は次の通りです。

- 特定言語のデータ ロードを wkodbsrv.ini に追加します。
- 翻訳ラベルを wkprcc.ini または wkprgc.ini にロードします。

### 特定言語のデータ ロードの追加

実務用データおよび管理用データのデータ ロードは、wkodbsrv.ini において特定言語ロードと言語独立ロードに分かれます。特定言語ロードが実行される wkodbsrv.ini の各ロケーションに、使用する言語のセクションを追加してください。

図 1.3 には、実務データ用フランス語データ ロードの追加方法を示します。

図 1.3  
特定言語ロード

```
[LoadData]
Status=Not Run
Program=raploadd.p
DataDir=./us/mfg
DBName=./db/oraempty.db
LDBName=
;
```

```
[LoadData]
Status=Not Run
Program=raploadd.p
DataDir=./fr/mfg
DBName=./db/oraempty.db
LDBName=
```

フランス語データ ロード セクションの例

```
;
```

```
[LoadData]
Status=Not Run
Program=raploadd.p
DataDir=./mfg
DBName=./db/oraempty.db
LDBName=
;
```

### 翻訳ラベルのロード

翻訳されるのは次の 2 種類のラベルです。確認メッセージおよびロジカルフィールド値。確認メッセージは、無効なデータが確認フィールド（スキーマ制御フォーマットのフィールド）に入力されたときに表示されます。ロジカルデータ値は、ロジカルフィールド（[Active] または [Key] 項目）に表示される [Yes] または [No] です。

1 つのデータベースに複数の言語を導入する場合は、翻訳ラベルを空のデータベースにロードし、言語ごとに順にコンパイルする必要があります。例えば、米英語、フランス語、中南米用スペイン語を 1 つのデータベースで使用する場合は、処理は次のような流れになります。

- 1 英語のプログラムをコンパイルします。
- 2 フランス語の翻訳ラベルをロードします。
- 3 フランス語のプログラムをコンパイルします。
- 4 スペイン語の翻訳ラベルをロードします。
- 5 スペイン語のプログラムをコンパイルします。

フランス語のロードの場合、wkprcc.ini または wkprgc.ini のセクションは次のようになります。

```
[LoadXlat]
Status=Not Run
Program=rapldlbl.p
DBName=./db/mfgprod.db
Language=fr
```

**重要** Guided Setup 初期化ファイル内のパスは、Windows プログラムのために編集する必要はありません。MFG/UTIL が自動的に UNIX パス ステートメント (./db) を Windows パス (c:\mfgsvr\db) に変換してくれます。

## ホスト クライアント インストールのまとめ

UNIX の場合は、少なくとも 1 つのクライアントをサーバーにインストールします。このクライアントは、追加の UNIX telnet またはエミュレータ セッションのためのホスト接続として機能し、バッチ 処理のスケジューリングや初期化を実行します。Windows の場合は、キャラクタ クライアントをインストールするかどうかは任意です。

- 1 環境をセットアップするための準備手順を行います。
- 2 サーバーにいくつかのクライアント ファイルをインストールします。
- 3 いくつかのデータベース セットを設定します。
- 4 サーバーの起動スクリプトとシャットダウン スクリプトを生成します。
- 5 プログラムをコンパイルします。
- 6 データベースのバックアップを取ります。
- 7 MFG/PRO を起動し、登録します。
- 8 ユーザーを定義します。
- 9 ヘルプ データをロードします。

## データベース セット

データベース セットは、スキーマ ホルダと Oracle データベースの両方を同時に起動または停止するための起動スクリプトとシャットダウン スクリプトを生成するための、MFG/UTIL で使われている概念です。一般的には次のようなセットを定義します。

- コンパイル
- Demo
- Development
- Production
- Train*N*（各生徒ごとに 1 つ）

## オンライン ヘルプのオプション

ヘルプでは次の 2 種類のフォーマットを使用することができます。Windows WinHelp ファイルとヘルプ データベース

- WinHelp はコンパイル済みのファイルなので、更新したり翻訳したりすることはできません。利用できるのは GUI クライアント上でだけです。
- ヘルプ データベースは、クライアントをインストールするとロードされます。このデータベースの [フィールドヘルプ登録 / 変更] (36.4.13) でユーザー定義ヘルプを追加できます。追加言語を注文したときは、翻訳された形式のデータベース ヘルプが支給されます。これは、GUI、キャラクタ、Desktop、いずれのクライアントでも利用できます。

## リモート Windows のインストールのまとめ

● 第 4 章  
「Windows ファイル サーバーのインストール」  
( 62 ページ ) を参照。

IWindows クライアントのインストールは、つぎの 2 つの点を除き、UNIX キャラクタ クライアントのインストールと同じです。共有のスキーマ ホルダに接続するか各クライアントごとにスキーマ ホルダを作成する必要があるという点と、最初のクライアントの構成ファイルを保存することで以降のクライアントでのセットアップを簡略化できるという点です。この最後のオプションのことを、エクスプレスセットアップと呼ぶことにします。

- 1 環境をセットアップするための準備手順を行います。
- 2 ファイル サーバーにいくつかのクライアント ファイルをインストールします。
- 3 Windows クライアント メディアをインストールします。
- 4 クライアント スキーマ ホルダに接続またはそれを作成します。
- 5 いくつかのデータベース セットを設定します。

- 6 クライアントの起動スクリプトとシャットダウン スクリプトを生成します。
- 7 エクスプレス セットアップを使って、追加の Windows クライアントをインストールします。

## 複数言語のインストールのまとめ

- 1 MFG/PRO データベース サーバーと言語メディアをインストールします。
- 2 空の Progress スキーマ ホルダを作成し、MFG/PRO スキーマをロードします。
- 3 Oracle インスタンスとデータ オブジェクトを生成する SQL スクリプトを作成します。
- 4 SQL スクリプトを実行します。
- 5 言語依存データおよび言語非依存データをロードします。
- 6 SQL スクリプトを実行してインデックスを作成します。
- 7 空のスキーマ ホルダを、新規の実務用スキーマ ホルダにコピーします。
- 8 空のスキーマ ホルダを変更して未定義のコード ページを使用します。
- 9 空のデータベースに対して米英語をコンパイルします。
- 10 1 つの追加言語について空のスキーマ ホルダに翻訳ラベルをロードします (ロジカル データ値および確認メッセージを更新します)。
- 11 空のスキーマ ホルダに対してその言語をコンパイルします。
- 12 追加する全言語について最後の 2 つの手順を繰り返します。

## 追加データベース インストールのまとめ

追加データベースの作成は、最初にサーバー上で Oracle インスタンスとデータベースを作成したときと同じ手順をすべて繰り返すか、あるいは新規にデータ所有者を作成して関連データ ファイルを既存のインスタントにロードすることで行えます。

1 番目の方法は、オフサイトのトレーニング環境での場合など、新規のサーバーにインスタンスをインストールする場合に必要となります。2 番目の方法は、ファイルを共有するので、システムリソースが少なくてすみます。

このガイドでは、1 番目の方法についてはとくに説明していません。サーバーインストールのための手順を繰り返すだけです。SQL スクリプトの変更や正しいデータのロードについては、第 7 章「追加データベースのインストール」(99 ページ)を参照してください。

2 番目の方法（以下にまとめを示してあります）については、第 6 章で詳しく説明します。

- 1 空の Progress スキーマ ホルダを、新規のスキーマ ホルダにコピーします。
- 2 Progress プログラムを実行してデータベース所有者を変更します。
- 3 SQL ビルド スクリプトを変更します。
- 4 SQL スクリプトを実行します。
- 5 言語依存データおよび言語非依存データをロードします。
- 6 SQL スクリプトを実行してインデックスを作成します。
- 7 いくつかのデータベース セットを設定します。
- 8 起動スクリプトを生成します。
- 9 GUI クライアントをセットアップします。

### データベース

一般的に作成されるデータベースには次のものがあります。

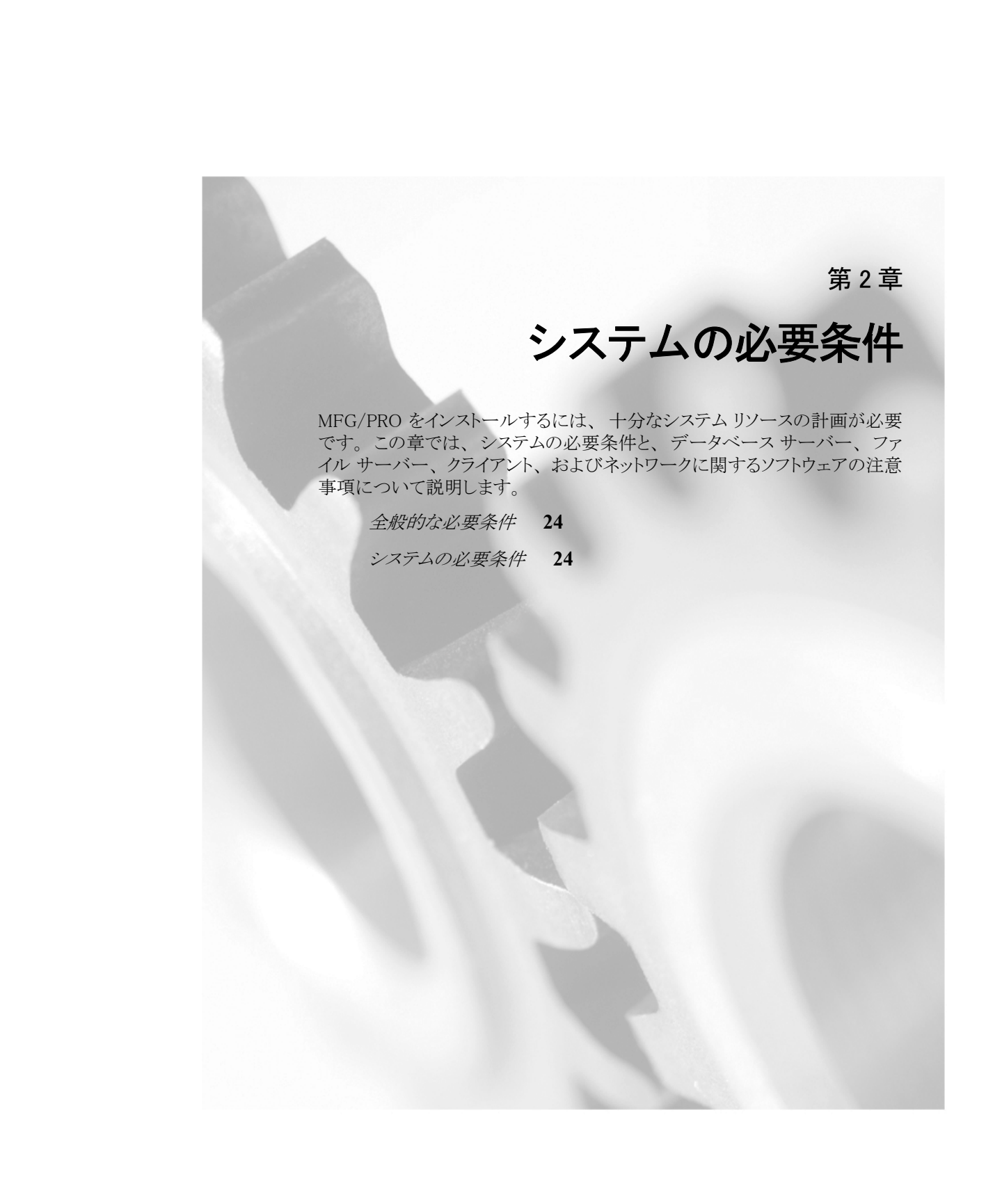
***mfgprod***。これはメインの実務用データベースで、サーバー インストール時に作成されます。実務データを入れたこのデータベースのコピーは、開発用のテスト データベースとして使用できます。

***mfgdemo***。任意。これは、会議室パイロット用データベースです。QAD から *mfgdemo* 用の稼動データが支給されるので、パイロット用に使用したり、開発テスト用に使用したりできます。

***mfgtrain***。トレーニング環境用は独自のデータとともに支給され、各ユーザーごとにデータベースが必要となります。

***tritrain***。*tritrain* は間接為替レート換算（マルチ通貨、ユーロ対応）のためのトレーニングに使用できます。これにも独自のデータが入っています。*mfgtrain* の場合と同様に、各生徒ごとにコピーを 1 つ作成してください。

***seattle*, *chicago*, *newyork***。これらのデータベースは、マルチサイト環境用トレーニングのために使用します。*mfgtrain* や *tritrain* と同様に、これらのデータベースも独自のデータが入っており、トレーニングセッションでの生徒数に応じて必要な数だけコピーする必要があります。

A background image showing several interlocking gears of different sizes, rendered in a light, semi-transparent style. The gears are arranged in a way that suggests a complex mechanical system or a process of integration.

## 第2章

# システムの必要条件

MFG/PRO をインストールするには、十分なシステム リソースの計画が必要です。この章では、システムの必要条件と、データベース サーバー、ファイル サーバー、クライアント、およびネットワークに関するソフトウェアの注意事項について説明します。

全般的な必要条件 24

システムの必要条件 24

## 全般的な必要条件

システム管理者は、1、2年の経験を持つ認定 Oracle データベース管理者で、Progress クライアントプロセスの管理方法を知っている必要があります。

MFG/PRO をインストールする前に、Oracle および Progress の両製品をそれぞれのインストール ガイドに沿ってインストールしなければなりません。Oracle for 8i には、UNIX カーネルの変更およびパッチを含む、各プラットフォーム用のインストール ガイドがあります。

## システムの必要条件

MFG/PRO on Oracle システムは、データベース サーバー、キャラクタ クライアント、オプションのファイル サーバー (リモート Windows クライアント用)、リモート クライアント、および適切なネットワークからなります。

### データベース サーバー

データベース サーバーは、MFG/PRO、Progress サーバー ソフトウェア、および Oracle データベース内の実務用データが設置される場所です。インストールを始める前に、実務用データベースの最終的なサイズと、データベースの各種コンポーネントに関する要求を十分に理解することにより、ディスクを適切にレイアウトすることができます。

### ハードウェアの必要条件

- 1.5 GB の空きディスク容量 (Progress および MFG/PRO を格納)。
  - 追加する言語ごとに 700 MB
  - テープからインストールする場合は 100MB の一時ディスク容量
- 約 10GB のディスク容量 (データ構造のため3台以上のディスクにまたがったディスク容量)。これは実務用データベースを 5GB から 7GB とした場合の概算です。
- 100Mbps の高速ネットワーク カード。
- ISO9660 CD-ROM またはテープ ドライブ。
- 最低 2 つのディスク コントローラ チャンネル。
- 200個のシステム ファイル ハンドル (MFG/PRO の同時処理1回当たり)。

## ソフトウェアの必要条件

- オペレーティング システムのパッチ必要な OS パッチについては、『Oracle Installation Guide』と『Progress Availability Guide』の両方を確認してください。
- Oracle バージョン 8.1.7 (Oracle8i)  
**注意** 一般的な Oracle インストール作業では、必要なものがすべてインストールされます。カスタム インストールをする場合は、SQL\*Plus、Net8、および PRO\*C がお手元にあるようにしてください。
- Progress 9.1D+ 4GL (1 人分のライセンスが必要)
- Oracle 用 Progress 9.1D02、サービス パック 2、DataServer、サーバー およびクライアント (または QAD から入手可能な HP-UX 32 および AIX 用の 9.1D0101 修正プログラム)
- マルチ言語インストールの場合、各言語の Progress リリース
- MFG/PRO データベース サーバー メディア
- オプションで、Web ブラウザ (Netscape もしくは Internet Explorer) - HTML 形式の MFG/UTIL ヘルプ ファイルを表示したり、オンライン サポートにアクセスするため

## ファイル サーバー

ファイル サーバーの必要条件には、別のサーバーで実行される共有 Windows リモート クライアントの必要条件が含まれます。

## ハードウェアの必要条件

- 1 GB 以上の空きディスク容量 (Progress と MFG/PRO を格納)
- 追加する言語ごとに 700MB

## ソフトウェアの必要条件

- オペレーティング システムのパッチ
- Progress 9.1D+ クライアント ネットワーキング
- Progress 9.1D+ クエリー / 結果
- Progress のパッチ

## リモート クライアント

リモートクライアント PC の必要条件は、全共有ファイルが同じファイル サーバー上にあることを前提とします。

### ハードウェアの必要条件

- 10MB 以上のディスク容量
- 600MHz 以上の Intel Pentium（または互換）プロセッサ
- 128MB の RAM
- Super VGA ビデオ
- 1GB 以上のハードドライブ — 将来のデータ保管のため。
- 100Mbps のネットワーク カード

### ソフトウェアの必要条件

- Microsoft Windows 95、98、2000、NT Workstation、XP、または最新の UNIX サーバー ソフトウェア
- MFG/PRO クライアント メディア
- Progress 9.1D+ ソフトウェア :
  - クエリー/結果(1クライアントにつき1人分の Query ライセンスが必要)
  - クライアント ネットワーキング
- オプションで、Web ブラウザ (Netscape もしくは Internet Explorer) - HTML 形式の MFG/UTIL ヘルプ ファイルを表示したり、オンライン サポートにアクセスするため

### ネットワーク

●『Progress Networking Guide』(Progress ネットワーキング ガイド)を参照。

Progress 仕様をサポートするようにネットワークをセットアップしてください。MFG/PRO に関する最小必要条件は次のようになります。

- 10 メガビット (Mb) のイーサネットまたはより高速のネットワーク

## 第3章

# データベース サーバー のインストール

この章では、MFG/PRO eB2 データベース サーバー メディアのロード、MFG/PRO スキーマ ホルダと SQL スクリプトの作成、Oracle データベースの生成、およびシステム データのロードを実行します。

準備手順	28
サーバー ファイルのインストール	34
スキーマ ホルダの作成	40
SQL スクリプトの作成	43
SQL スクリプトの実行	49
MFG/PRO データのロード	52
インデックス SQL スクリプトの実行	55
スキーマ ホルダのコピー	56

## 準備手順

●サーバー インストールについては 15 ページページにまとめられています。

インストールする前に、次の注意事項と必要条件を確認してください。

- 最新のオペレーティング システム パッチをインストールしてください。
- Windows および SunOS 上に多言語をインストールする場合、特定 OS の言語ファイルをロードして多言語の文字を表示できるようにします。その他のオペレーティング システムにも同様の必要条件があるかもしれませんので、お使いのオペレーティング システムの製造元に問い合わせしてください。
- MFG/PRO のインストール時に、\$TERM 変数を vt100 または vt200 のような標準的なターミナル タイプに設定してください。クライアントの起動時に、必要に応じて各言語専用のターミナルに切り替えることができます。
- Oracle および適切なネットワークがインストールされていることを確認してください。
- Oracle 最新パッチをインストールしてください。
- Progress と最新の Progress パッチをインストールしてください。
- Korn シェルに変更してください。
- 次の情報を決定してください。
  - MFG/PRO データベース サーバー ファイルをインストールするディレクトリ (*MFGPROInstallDir* と呼びます)
  - Progress ディレクトリ
  - データベース サーバーのホスト名

## UNIX 上での Progress Probuild の実行

●Probuild の詳細については、『*Progress Oracle DataServer Guide*』を参照。

ほとんどの UNIX プラットフォームでは、デフォルトの Progress の実行形式ファイルが Oracle とは機能しません。機能する実行形式ファイルを作成するには、新しい Progress の実行形式ファイルをコンパイルするためのリンクを作る Probuild を実行してください。

Progress の実行形式ファイルをリンクできるようにする前に、コンパイラがインストールされているようにしてください。UNIX システムの中には、コンパイラがデフォルトでインストールされているものがあります。AIX 4.x の場合、ANSI-C コンパイラをインストールする必要があるかもしれません。

Probuild またはリンク スクリプトの実行中にエラーが発生した場合は、次の URL の Progress knowledgebase を確認してください。

<http://www.progress.com/support/kb/index.htm>

- 1 root としてログオンします。
- 2 \$DLC および \$ORACLE\_HOME を設定し、\$DLC/bin が PATH にあるようにします。
- 3 次の Progress /eucapp ディレクトリに変更します。

```
cd $DLC/probuild/eucapp
```

- 4 次の Probuild を起動します。

```
./probuild
```

```

      PROGRESS End User Configuration
      PROGRESS EUC
Install Link Script Into: _____
      <Continue>    < Exit >

Welcome to Progress Software's End User Configuration System !
This application allows you to generate your own flavor of Progress.

Press PF4 To QUIT.
```

- 5 リンク スクリプトのためのターゲット ディレクトリを入力します。空白のままにされている場合は、現在のディレクトリにリンク スクリプトが作成されます。[Continue] を選択してください。[Product List] メニューが表示されます。

```

      PROGRESS End User Configuration
Installation Directory:
Current Product:

      PRODUCT LIST
      _____
      >PROGRESS CLIENT
      SMALL PROGRESS CLIENT
      PROGRESS DATABASE SERVER
      PROSHUT
      DATABASE UTILITY (PROUTIL)
      REMOTE DATASERVER BROKER
      ORACLE DATASERVER

      <Continue>    < Return >
```

- 6 [Progress Client] を選択し、タブを押して [Continue] に移動してから、Enter を押します。[Link Script/Executable Names] ダイアログが表示されます。

```

      PROGRESS End User Configuration
Installation Directory:
Current Product: PROGRESS CLIENT
      LINK SCRIPT/EXECUTABLE NAMES
Link Script Name: ldpro
Executable Name: _proges
      <Continue> < Return >

```

- 7 デフォルトを使用します。[Continue] を選択してください。[Configurable Elements] ダイアログが表示されます。

```

      PROGRESS End User Configuration
Installation Directory:
Current Product: PROGRESS CLIENT
      CONFIGURABLE ELEMENTS
> ORACLE DATASERVER
> TCP-IP NETWORK PROTOCOL
  HLC application
      <Continue> < Return >

```

- 8 [Oracle Dataserver] および [TCP-IP Network Protocol] の両方を選択し、[Continue] を選択します。リンク スクリプトが生成されます。プロンプトが表示されたら、スペースバーを押してください。
- 9 Probuild は [Product List] メニューに戻ります。Appserver スクリプトのプロセスもほぼ同じです。

```

      PROGRESS End User Configuration
Installation Directory:
Current Product:
      PRODUCT LIST
PROSHUT
DATABASE UTILITY (PROUTIL)
REMOTE DATASERVER BROKER
ORACLE DATASERVER
OPEN INTERFACE DRIVER
>PROGRESS APPSERVER
HLC/ESQL/C Client
      <Continue> < Return >

```

- 10 [Progress Client] を選択し、タブを押して [Continue] に移動してから、Enter を押します。[Link Script/Executable Names] ダイアログが表示されます。

- 11 デフォルトを使用します。[Continue] を選択してください。[Configurable Elements] ダイアログが表示されます。
- 12 [Oracle Dataserver] および [TCP-IP Network Protocol] の両方を選択し、[Continue] を選択します。リンク スクリプトが生成されます。プロンプトが表示されたら、スペースバーを押してください。Probuild は [Product List] メニューに戻ります。
- 13 [Return] を選択します。次に、[Exit] を選択すると、オペレーティング システムに戻ります。
- 14 HP-UX 11 環境では、追加手順を実行してリンク スクリプトを編集する必要があります。各スクリプトの最後から 2 番目の行に `-lpthread \` を追加します。Progress クライアント スクリプト (`ldpro`) では、スクリプトの最後の 3 行は次のようになっている必要があります。

```
-lcl \
```

```
-lpthread \
```

```
$PROLOAD/4gl/libavcall.a \
```

Remote DataServer スクリプト (`ldapsv`) では、最後の 3 行は次のようになっています。

```
-lm \
```

```
-lpthread \
```

```
/usr/lib/libcl.sl \
```

AIX の場合、リンカー (`xlc_r`) が PATH にあるようにしてください。これを確認するには、`xlc_r` を実行してください。AIX 5.1 では、`xlc_r` は `/usr/vac/bin` にあります。AIX 4.x では、`/usr/bin` にあります。

- 15 この 2 つのリンク スクリプト (`ldpro` および `ldapsv`) を実行して、新しい実行形式ファイルを作成します。
- 16 ディレクトリを `$DLC/bin` に変更し、古い Progress 実行形式ファイルのバックアップを取ります。次に、新しい実行形式ファイルを `$DLC/bin` にコピーしてください。

```
cd $DLC/bin
cp _progres _progres.orig
cp _proapsv _proapsv.orig
cp ../probuild/eucapp/_progres .
cp ../probuild/eucapp/_proapsv .
```

- 17 AIX オペレーティング システムの場合は、実行形式ファイルの `setuid` ビットをオフにします。

```
chmod -s _progres
```

## 非西欧言語のセットアップ

非西欧言語をインストールする場合：

- `startup.pf` および `empty.db` ファイルのバックアップを Progress ディレクトリに取ります。
- 適切な Progress 言語コード ディレクトリから、以下のファイルを Progress ディレクトリの最上レベルにコピーします。
  - インストールする言語に対応したパラメータ ファイル（拡張子は `.pf`）
  - 空のデータベース ファイル (`empty.db`) および関連ファイル
- 次の `startup.pf` 値を編集して、基本言語を反映するようにします。

```
-cpinternal ISO8859-1
-cpstream ISO8859-1
-d mdy
-numsep 44
-numdec 46
```

『*Progress Networking Guide*』（Progress ネットワーキング ガイド）を参照。

- MFG/PRO ファイルをサーバーにインストールした後、`MFGPROInstallDir` 内の `mfgutil.ini` のコピーを変更します。

```
Startparms=-d mdy
```

## Windows インストール セットアップ (Windows のみ)

Windows クライアントをインストールする場合は、アプリケーション サーバーとして Windows サーバーをセットアップする必要があります。

- 1 [スタート] から、[設定]、[コントロール パネル] を順に選択します。
- 2 [ネットワークとダイヤルアップ接続] をダブルクリックします。
- 3 [ローカル エリア接続] を右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 4 [Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有] をクリックしてから、[プロパティ] をクリックします。
- 5 [ネットワークアプリケーションのスループットを最大にする] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックします。

## インストール ユーザーおよびグループの作成 (Unix のみ)

UNIX 上に MFG/PRO をインストールする場合、データベース サーバー上に `qad` というグループと、`mfg` というユーザーが必要になります。すべての MFG/PRO インストール プログラムとメンテナンス プログラムには、`mfg` ユーザーの ホーム ディレクトリに関連情報が格納されています。このため、QAD スクリプトはインストールされた製品に関するデータを自動的に検索することができ、ユーザーは `root` としてログオンしなくてもシステムをメンテナンスすることができます。

- UNIX システム管理ユーティリティを使用し、グループ ID (gid) を 65535 として `qad` というグループを作成します。(65535 は MFG/PRO メディアにおけるファイルのユーザー ID です。)
- ユーザー ID を 65535 として `mfg` というユーザーを作成します。
  - Korn shell をこのユーザーに割り当ててください。QAD のメディア内にある全スクリプトは Korn shell (ksh) シンタックスを使用します。
  - `mfg` ユーザーの場合は、`$HOME` 環境変数を、作業ファイルおよび一時ファイルを書き込むことができるユーザー ディレクトリに設定してください。
  - 標準アンマスク「022」を割り当て、アクセス権とセキュリティを設定します。
  - `mfg` ユーザー `.profile` を更新して、`ORACLE_HOME`、`ORACLE_SID`、`DLC`、および `PATH` 変数を含めてください。例：
 

```
ORACLE_HOME=/dr01/oracle/OraHome1;export ORACLE_HOME
ORACLE_SID=eb2ora;export eb2ora
DLC=/dr01/progress/dlc91d;export DLC
PATH=$PATH:$DLC/bin:$ORACLE_HOME/bin;export PATH
```
  - ユーザーの `mfg` のホーム ディレクトリに ディレクトリ `cfg` を作成してください。このディレクトリは、インストールおよび構成に関する情報を保存するために必要不可欠です。`cfg` ディレクトリには、所有者グループなどのための読み出し / 書き込みとアクセス許可 (755) がある必要があります。

**重要** SQL スクリプトの実行のような Oracle 専用のタスクについては、`oracle` 等の Oracle システム管理ユーザーに切り替えてください。

## 各種許可

MFG/PRO をインストールする際には、いくつかのディレクトリが使用され、作成されます。デフォルトのディレクトリを使用する場合、インストール時になればそれらのディレクトリは自動的に作成されます。これは、インストール ユーザー (mfg) の所有権や該当する各種許可についても同様です。しかし、インストール処理外で他のディレクトリを作成し、使用される場合は、これらのディレクトリが mfg によって所有され、割り当てられる mfg のための読み出し / 書き込み許可を持つようにしてください。

## サーバー ファイルのインストール

この一連の手順では、Database Server メディアをマウントし、ファイルをサーバーにコピーします。お受け取りのメディアに適した手順を選択してください。Windows サーバーの場合、CD を挿入してから「データベース サーバーのインストール」(36 ページ)に進んでください。

### CD-ROM のマウント (UNIX のみ)

Windows のインストールでは、CD を CD-ROM ドライブに挿入してください。UNIX のインストールでは、次の指示に従ってください。

- 1 root としてログオンします。
- 2 CD-ROM をマウントします。表 3.1 にコマンドの一例を示します。

**表 3.1**  
UNIX CD ドライブ  
のマウント コマンド

ハードウェア	マウント コマンド
Sun	<code>volcheck cdrom</code>
HP	<code>/etc/mount -F cdifs /dev/dsk/YourCDDevice /cdrom</code>
Digital	<code>mount -r -o noversion -t cdifs /dev/YourCDDevice /cdrom</code>
AIX	<code>smitty mountfs</code>

次に、ファイル システム、ディレクトリ、およびファイル システム タイプ (cdrfs) を選択してください。

## ハードウェア マウント コマンド

Linux	mount /dev/hdb /mnt/cdrom  ここで、/hdb は他の選択肢の中でも hdc または hdd となる可能性があります。
その他	CD-ROM をマウントするための必要条件については、お使いのオペレーティング システムのドキュメンテーションを参照するか、製造供給元に問い合わせてください。正しいコマンドを割り出すには、man mount とタイプしてください。

- 3 「データベース サーバーのインストール」(36 ページ) を続行してください。

## テープ メディアのロード (UNIX のみ)

テープ メディアを一時ディレクトリにロードし、次に、MFG/PRO ファイルをそこから常時使用のインストール ディレクトリに解凍してください。すべての MFG/PRO テープは 5120 バイトのブロック サイズで書き込まれます。

- 1 root としてログオンします。
- 2 一時ディレクトリを作成します。
- 3 テープを適切なサーバードライブにロードします。
- 4 次の一時インストール ディレクトリに変更します。

```
cd TemporaryTapeDir
```

- 5 表 3.2 から適切なロード コマンドを入力します。

ハードウェア	入力するロード コマンド
HP 9000/800 シリーズ、1/4" カートリッジ	tcio -i /dev/rct/YourTapeDevice   cpio -iumvdBc
その他	cpio -iumvdBc < /dev/YourTapeDevice

表 3.2  
UNIX テープ解凍  
コマンド

- 6 テープを取り出し、保管します。

## データベース サーバーのインストール

このセクションでは、MFG/PRO データベース サーバー ファイルをサーバーにインストールします。

- 1 UNIX では、qad グループの mfg ユーザーとしてログオンしてください。Windows では、管理者の権利を持つユーザーとしてログオンしてください。
- 2 CD において、データベース サーバー メディアを含むディレクトリに変更します。これはテープをインストールするための一時テープ ディレクトリです。
- 3 次の install ディレクトリに変更します。

```
cd install
```

- 4 次のディレクトリのデータベース サーバー インストール スクリプトを起動します。

```
./install.ksh
```

Windows の場合、[スタート]メニューの [ファイル名を指定して実行] から install.exe を実行してください。

[Welcome] 画面が表示されます。

```
Welcome to QAD's MFGPRO eB2 Database Server installation.
We are installing MFGPRO eB2 Database Server for hpux.
Press <Enter> to view license agreement. █
```

- 5 MFG/PRO ソフトウェア使用許諾契約書に同意します。

```
-----
IMPORTANT - Please read carefully BEFORE you install, copy or otherwise use the
software products in this package.
-----
```

1. The Software Product bearing the trademark MFG/PRO ("Software") is the property of QAD Inc. It is protected by copyright laws and international copy right treatise as well as other intellectual property law and treatise. The Software is licensed, not sold.
2. You are granted a license to install, copy or otherwise use this Software if and only if
  - (i) you have signed a Software Product License Agreement with QAD Inc (or any of its subsidiaries), or
  - (ii) you have signed an end-user agreement with one of our authorized distributors. The end-user agreement you have signed must contain QAD's Licensing Provisions as an integral part of the agreement. Our distributors are not authorized to amend the terms of the Licensing Provisions. A copy of QAD's Licensing Provisions in English can be found in this package for your reference. (Please see footnote \*)

```
license (0%) [Press space to continue, q to quit, h for help]
```

- 6 デフォルトを使用するか、別のインストール ログ ファイル ロケーションを入力します。後のインストール（言語ファイル、ホスト クライアントなど）の際には、このロケーションがインストール情報として使用されます。別のロケーションを入力する場合は、後のインストールのためにそのロケーションを控えておいてください。

```
Please enter location where the log file should be written.
Default is /users/mfg/instlog
->/oratemp/instlog
```

- 7 Progress インストール ディレクトリ パスを入力するか、デフォルトを採用します。ロケーションおよびバージョンを確認するスクリプトが表示されます。Yes を指定して確認してください。
- 8 MFG/PRO データベース サーバー ファイルをインストールしたいパスとディレクトリ (*MFGPROInstallDir*) を入力します。このディレクトリがない場合は作成されます。

**重要** スペースを含むディレクトリ パスを選択しないでください（例えば、C:\Program Files\mfgpro）。MFG/UTIL によって生成されるデータベース スクリプトは、スペース付きのパスにあるデータベースの場所を探すことができません。

```
Enter PROGRESS installation directory:
Default is /apps/progress/91b
->
Found PROGRESS version 9.1B, need at least version 9.1D
Default is n
->y
Installing MFGPRO eB2 Database Server

Please enter the destination location for this installation
Default is /users/mfg/mfgsvr
->/oratemp/eb2ora
Directory /oratemp/eb2ora does not exist.

Create it?
Default is y
->y
```

- 9 [Is this install for an Oracle dataserver?] というプロンプトには [Yes] と答えます。

🕒 時間 : 00:03:00

- 10 インストール作業のまとめを再検討し、継続するには [Yes] を、設定を変更するには [No] を選択します。[Yes] を選択した場合、インストールが始まります。

```
Platform is hpux.
Product is MFGPRO eB2 Database Server.
Database type is Oracle.
Progress directory is /apps/progress/91b.
Installing from /oratemp/eb2test/db.
Destination location is /oratemp/eb2ora.

Proceed using these values? (y/n)
Default is y
->
```

- 11 入力されたログ ディレクトリの `mfgdbsv.log` にログが書き込まれます。

## 言語ファイルのインストール

以下の手順によって、特定の言語用のメニューおよびメッセージ データ ファイルを含む MFG/PRO 言語ファイルがインストールされます。これは、1 つの言語しかインストールしない場合でも必要な手順です。

最初にインストールした言語が基本言語になります。再インストールしない限り、この設定は変更されません。多言語の MFG/PRO 環境をインストールする場合、言語ごとに言語ファイルのインストール手順を繰り返す必要があります。ダブルバイト言語をインストールする場合は、必ずダブルバイト言語を先にインストールしてください。

購入された言語ごとに、別個のメディアが付いています。言語ごとに次の手順を繰り返してください。

- 1 お使いのメディアのタイプに適した指示に従って、システムに言語メディアをロードします。
  - テープ メディアの場合、「テープ メディアのロード (UNIX のみ)」(35 ページ) を使用してください。
  - CD-ROM の場合、「CD-ROM のマウント (UNIX のみ)」(34 ページ) を使用してください。
- 2 UNIX では、`qad` グループの `mfg` ユーザーとしてログオンしてください。Windows では、管理者の権利を持つユーザーとしてログオンしてください。
- 3 CD において、言語メディアを含むディレクトリに変更します。テープのインストールの場合、これは一時テープ ディレクトリです。
- 4 次の `install` ディレクトリに変更します。

```
cd install
```

- 5 次のディレクトリのデータベース サーバー インストール スクリプトを起動します。

```
./install.ksh
```

Windows の場合、[スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]から `install.exe` を実行してください。

[Welcome] 画面が表示されます。Enter を押して続行してください。

- 6 MFG/PRO ソフトウェア使用許諾契約書に同意します。
- 7 「データベース サーバーのインストール」(36 ページ) の手順 6 からログファイル ロケーションを入力します。デフォルトを使用した場合、ここでもデフォルトを採用してください。
- 8 「データベース サーバーのインストール」(36 ページ) の手順 8 から `MFGPROInstallDir` を入力します。
- 9 言語インストールのまとめを再検討します。続行するには `Yes` を、変更するには `No` を選択してください。`Yes` を選択した場合、インストールが始まります。

●時間 : 00:00:30

複数の MFG/PRO 言語をインストールする場合、手順 1 から 9 を言語ごとに繰り返してください。

## MFG/UTIL クライアントのセットアップ (Windows のみ)

Windows マシンにインストールする場合、ツールや DOS ウィンドウが正しく機能できるように、いくつかの一時的な設定をする必要があります。

- グラフィカル インタフェースは、コンパイルのようないくつかの機能を高画面解像度では実行できません。グラフィック MFG/UTIL を始める前に、画面の解像度を 800 x 600 に設定しなおしてください。
- キャラクタ インタフェースのため、DOS ウィンドウのレイアウトを設定しなおす必要があります。設定が不適切であることは容易にはわかりません。例えば、[Tab] キーを押してメニューを移動したり、ボタンを選択したりした後に、画面が正しくリフレッシュされないことがあります。

この問題を解決し、MFG/UTIL 用に DOS ウィンドウをセットアップするには、次の手順を実行してください。

- 1 [スタート]メニュー アイコンから [character MFG/UTIL] を起動します。
- 2 DOS ウィンドウのタイトル バーを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 3 [レイアウト] タブを選択します。
- 4 [画面バッファのサイズ] の [幅] を 80 に、[高さ] を 25 に設定し、[OK] を選択します。

- 5 プロンプトが表示されたら、[ このウィンドウを起動したショートカットを変更する ] を選択します。
- 6 MFG/UTIL を再起動して、この変更を可能にします。

リモート Windows クライアントでのインストールを終えた後、これらの設定をデフォルト値（幅 80、高さ 300）にリセットして、他のアプリケーションのためにバッファが適切となるようにしてください。

## スキーマ ホルダの作成

以下の手順によって、Progress スキーマ ホルダ データベースが構築され、MFG/PRO スキーマがロードされます。

### スキーマ ホルダの作成

●MFG/UTIL キーボード コマンドの情報については、「MFG/UTIL のキャラクタ インタフェース コマンド」（16 ページ）を参照。

- 1 次のコマンドで *MFGPROInstallDir* から MFG/UTIL を起動します。

```
./mfgutil
```

Windows の場合、[ スタート ] メニューのアイコンから MFG/UTIL を実行してください。

- 2 [Configure] メニューから [MFG/PRO Guided Setup] を選択します。

[MFG/PRO Guided Setup] プログラムには、MFG/PRO 環境をセットアップするためのオペレーションのシーケンスが含まれています。次の図を参照して、[Guided Setup] 画面をよく理解してください。

```

Operation Set: Create Oracle Production Database Set [F4]
Set Information: 0 of 12 operations complete.

```

Operation	Status	Parameter	Value
>CreateSSDB	Not Run	DBName	./db/oraempty
LoadSchema	Not Run	DFName	./db/oraempty.df
		LDBName	
		DBName	./db/oraempty.db
LoadSchema	Not Run	DFName	./db/oadmemory.df
		LDBName	

```

Operation: Create single storage area database.
Parameter: The name of the database to create.
Value: ./db/oraempty

< Run Set >          < Help >          < Close >

```

Enter data or press F4 to end.

オペレーション セットはインストールのためのアクティビティのグループです。1 セットのオペレーションが [Operation]（処理作業）フレームに表示されます。完了すると、ステータスが「Done」に変更されます。エラーが発

生するか、手順を完了する前に処理をキャンセルした場合、ステータスは「Error」になります。[Operation] フレームの下には、オペレーション、キー変数、およびその変数のデフォルト値が表示されます。

- 3 [Operation Set] において [Create Oracle Production Database Set] を選択します。
- 4 [Run Set] のタブを選択し、Enter を押します。
- 5 [Create Database] 画面が表示されます。[New Physical Database Name] フィールドでは、デフォルトを採用するか、スキーマ ホルダに使用したい名前を入力します。このガイドでは、デフォルトの oraempty を使用してスキーマ ホルダを参照します。

デフォルトの [Start with] オプションを採用し、[OK] を選択してから Enter を押します。スキーマ ホルダが作成されました。

●時間 00:00:30

## MFG/PRO スキーマのロード

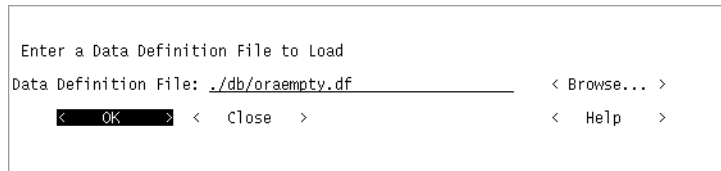
スキーマ ホルダが作成されると、[Connect Database] 画面が表示されます。

- 1 [Physical Database Name] フィールドがスキーマ ホルダへのパスおよびホルダ名を含むことを確認します。他のフィールドは空白のままにします。[OK] を選択すると、スキーマ ホルダに接続されます。

- 2 [Enter a Data Definition File to Load] 画面で、oraempty.df ファイルが [Data Definition File] フィールドに指定されていることを確認します。

●時間 00:20:00

準備が整うと、[OK] を選択して、oraempty.df データ定義ファイルに含まれるメイン MFG/PRO スキーマをロードしてください。



[Load Completed] のプロンプトが表示されたら、[Close] を選択してください。

[Close] ボタンを選択すると、データ定義ロード画面が再び表示されます。Enter を押すと画面が閉じます。

- 3 [Connect Database] 画面が表示されます。デフォルトを採用してください。[OK] を選択すると、スキーマ ホルダに再び接続されます。
- 4 データ定義ロード画面が表示されます。oadmempty.df がデータ定義ファイルであることを確認します。

●時間 00:02:00

準備が整うと、[OK] を選択して、oadmempty.df データ定義ファイルに含まれる MFG/PRO 管理用スキーマをロードしてください。

- 5 [Load Completed] のプロンプトが表示されたら、[Close] を選択してください。[Close] ボタンを選択すると、データ定義ロード画面が再び表示されます。Enter を押すと画面が閉じます。
- 6 [Connect Database] 画面が表示されます。デフォルトを採用してください。[OK] を選択すると、スキーマ ホルダに再び接続されます。

●時間 00:01:00

- 7 データ定義ロード画面が表示されます。ohpempty.df がデータ定義ファイルです。準備が整うと、[OK] を選択して、ohpempty.df データ定義ファイルに含まれる MFG/PRO ヘルプ スキーマをロードしてください。
- 8 データ定義ロード画面が再び表示されます。[Close] (閉じる) を選択してください。

## イメージ前ファイルの切り捨て

ここで、空のデータベース 更新前イメージ (BI) ファイルを切り捨てます。これらのファイルには、データベースに書き込むべきデータが含まれています。切り捨てはデータベースを十分に同期させ、ファイルを最小のサイズに戻します。BI ファイルのサイズを拡大する動作はこの時点ではほとんど行われていませんが、データをロードする前に同期化が必要です。

- 1 [Truncate Database Before Image File] (データベース更新前イメージ ファイルを切り捨て) 画面が表示されます。oraempty へのデフォルトのパスを採用し、[Truncate] を選択してください。

●時間 00:01:30



- 2 処理が完了すると、[Progress] 画面で [Close] を選択します。

## SQL スクリプトの作成

以下の手順では、MFG/PRO on Oracle データベースを構築するために使用する SQL (構造化クエリ言語) を作成します。これらの手順では、既にデータベースのレイアウトが計画され、適切なディレクトリが作成され、テーブルスペースのサイズが設定されていることを前提とします。

●「データベースサーバーのインストール」(11 ページ) を参照。

インスタンス ディレクトリは *MFGPROInstallDir* とは異なるはずです。適切な許可でディレクトリを作成してください。ここでは、次のディレクトリを作成します。

- bdump
- cdump
- create
- pfile
- udump

## SQL スクリプト情報の入力

次の指示に従って SQL スクリプトを作成してください。

- 1 次の図と表を参照して、[Generate Oracle Database Creation SQL Scripts] 画面を完成させます。完了すると、[OK] を選択してください。

Generate Oracle Database Creation SQL Scripts

ORACLE Instance Name:	<u>eb2ora</u>
ORACLE Database Name:	<u>eb2ora</u>
ORACLE Home Directory:	<u>/oracle/product/8.1.7</u>
ORACLE Instance Dir:	<u>/oracle/admin/eb2ora</u>
ORACLE CODE-PAGE:	<u>WE8ISO8859P1</u>
ORACLE NLS LANGUAGE:	<u>AMERICAN</u>
ORACLE NLS TERRITORY:	<u>AMERICA</u>

< OK > < Cancel >

フィールド	入力
Oracle インスタンス名	新しいインスタンス名とデータベース名を入力します。一般に、両方に同じ名前を使用します。これらの名前は、データベース作成スクリプトと MFG/PRO スタートアップ スクリプトにおいて使用されます。
Oracle データベース名	MFG/PRO スキーマ名 (oraempty、oadmempty、ohpempty)、qad、または qaddb は使用しないでください。数字は最初の文字に使用しないでください。
Oracle ホーム ディレクトリ	Oracle のソフトウェアを含むディレクトリを入力します。
Oracle インスタンス ディレクトリ	プライマリ インスタンス ディレクトリを入力します。このディレクトリには、主要ファイル (例えば、init.ora) や、主要サブディレクトリ (例えば、バックグラウンド ディレクトリ、コア ディレクトリ、およびユーザー ダンプ ディレクトリ) があります。このディレクトリ名は、次のセットの Oracle システム ファイル ロケーション プロンプトのデフォルトになります。
Oracle CODE-PAGE	これらの値は、任意の言語のための Oracle データベースを構築するために使用されます。デフォルトは MFG/UTIL を実行するために使用した言語コードに基づいています。必要であれば、デフォルトを変更してください。
Oracle NLS Language	
Oracle NLS Territory	

- 2 [Generate Oracle Parameter File] 画面で、テーブルスペースごとにディスク ロケーションを入力します。完了すると、[OK] を選択してください。

Generate Oracle Parameter File

Location of Control File 1:	/data1/eb2/control
Location of Control File 2:	/data2/eb2/control
Location of Bkgrd Dump Dir:	/oracle/admin/eb2ora/bdump
Location of Core Dump Dir:	/oracle/admin/eb2ora/edump
Location of User Dump Dir:	/oracle/admin/eb2ora/udump

< OK > < Cancel >

- 3 [Generate Oracle DB Create Script] 画面で、追加のディスク ロケーションを入力し、[OK] を選択します。

Generate Oracle DB Create Script

System Datafile Dir:	/data1/eb2/sysdir	Size: 50M
LogFile 1 Directory:	/data1/eb2/sqllog1	Size: 1M
LogFile 2 Directory:	/data1/eb2/sqllog2	Size: 1M

< OK > < Cancel >

- 4 [Size MFG/PRO Tablespaces] 画面で、MFG/PRO on Oracle テーブルスペースのためのディレクトリ パスとサイズを入力してください。

複数の言語をロードする場合は、追加する言語ごとに MFGHELP テーブルとインデックスのデフォルト サイズを拡大させてください。デフォルトのサイズは、MFGHELP が 40MB、MFGHELP\_IDX が 45MB です。

Generate Oracle DB Script - Size MFG/PRO Tablespaces

TableSpace Name	TableSpace Directory	TableSpace Size (in MB)
RBS	/data1/eb2	100
TEMP	/data1/eb2	20
TOOLS	/data1/eb2	15
USER	/data1/eb2	1
MFGHELP	/data1/eb2	40
MFGHELP_IDX	/data1/eb2	45
JGUI	/data1/eb2	8

< Save > < Make SQL Script > < Help > < Close >

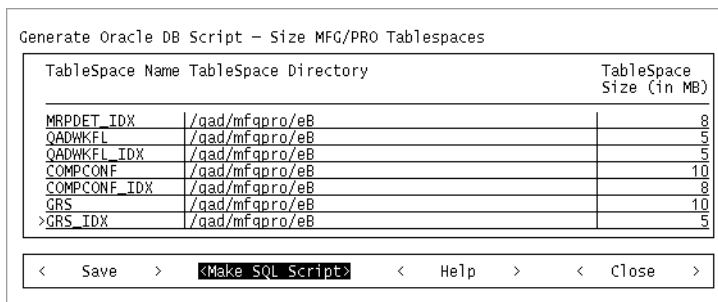
**表 3.3**  
MFG/PRO on  
Oracle テーブルス  
ペース

テーブルスペース	説明
RBS	全引下げセグメント：拡大および縮小するものと考えられる。
TEMP	一時テーブルスペース：ユーザーの判断で使用。
TOOLS	DBA デフォルト テーブルスペース：ユーザーの判断で使用。
USER	ユーザー デフォルト テーブルスペース：ユーザーの判断で使用。
MFGHELP および MFGHELP_IDX	全ヘルプ テーブルとインデックス：このテーブルスペースは静的であると考えられる。
GUI および GUI_IDX	全 MFG/PRO Windows テーブルとインデックス：一覧表示レコードとビュー レコードを含む。
GLRPWRTR および GLRPWRTR_IDX	総勘定元帳 (GL) レポート ライタ モジュールで使用されるテーブルおよびインデックス
INTRASTAT および INTRASTAT_IDX	EU 域内トランザクション (Intrastat) 機能で使用するテーブルおよびインデックス
TRANSACTION および TRANSACTION_IDX	販売オーダのような全トランザクションのテーブルおよびインデックス：数、サイズの大幅な増加が見込まれる。
HISTORY および HISTORY_IDX	全履歴テーブルおよびインデックス：監査を有効にしている場合は数、サイズの大幅な増加が見込まれる。
STATIC および STATIC_IDX	数またはサイズがほとんど増加しないテーブルおよびインデックス。
CONTROL および CONTROL_IDX	コントロール テーブルおよびインデックス：一般に、数またはサイズがほとんど増加しないテーブル当たり 1 つのレコード。
REFERENCE および REFERENCE_IDX	汎用コード、メニュー、およびメッセージのような参照テーブルおよびインデックス：増大はほとんど見込まれない。
WORKFILE および WORKFILE_IDX	作業ファイル テーブルおよびインデックス：拡大してから収縮するものと継続的に拡大するものあり。
GLTDET および GLDET_IDX	総勘定元帳 (GL) トランザクション テーブル (gl_t_det) およびインデックス：でファイルの終わりにデータが追加される。
GLTRHIST および GLHIST_IDX	GL トランザクション履歴テーブル (gltr_hist) およびインデックス：監査を有効にしている場合は、終わりにデータが追加される。
TRHIST および TRHIST_IDX	在庫トランザクション履歴テーブル (tr_hist) およびインデックス：監査を有効にしている場合は、終わりにデータが追加される。

テーブルスペース	説明
TRGLDET および TRGLDET_IDX	在庫トランザクション GL クロスリファレンス テーブル (trgl_det) およびインデックス：でファイルの終わりにデータが追加される。
MRPDET および MRPDET_IDX	資材所要量計画テーブル (mrp_det) およびインデックス
QADWKFL および QADWKFL_IDX	QAD 作業ファイル テーブル (qad_wkf1) およびインデックス：数、サイズの大幅な増加が見込まれる。
GRS および GRS_IDX	グローバル要求システム (GRS) のためのテーブルおよびインデックス

**注意** Oracle テーブルスペースとそれらに割り当てられている MFG/PRO テーブルを相互参照するには、`./db` ディレクトリの `.sql` ファイルを見てください。

- 5 MFG/PRO テーブルスペースのサイズとディレクトリを指定すると、[Make SQL Script] を選択します。



- 6 MFG/UTIL が SQL スクリプトを生成した後、出力画面はそのロケーションを表示します。[Close] (閉じる) を選択してください。

## MFG/UTIL の終了および SQL スクリプトの確認

SQL スクリプトを実行し、Oracle データベースを作成するには、MFG/PRO Guided Setup プログラムを閉じ、MFG/UTIL を終了する必要があります。次の指示に従って、オペレーティング システムに戻り、SQL スクリプトが作成されたことを確認してください。

- 1 [Connect Database] 画面で [Close] を選択します。
- 2 エラー画面で [OK] を選択します。

```

      Message
-----
Error status from /oracmp/eb2ora/xmfgusrc/napload.p .
Quitting operation set.
-----

```

- 3 MFG/PRO Guided Setup では、[Close] を選択します。

```

      Operation Set: Create Oracle Production Database Set [V]
Set Information: 6 of 12 operations complete.

```

Operation	Status	Parameter	Value
LoadSchema	Done	DFName	./db/ohpempty.df
		LDBName	
		DBName	./db/oraempty.db
TruncBI	Done	DBName	./db/oraempty.db
GenOraScripts	Done		
>LoadData	Error	DataDir	./us/mfg

```

      Operation: Load data.
      Parameter: The data directory.
      Value: ./us/mfg

```

< Run Set >      < Help >      < **Close** >

- 4 MFG/UTIL メイン画面で [File] メニューを選択し、[Exit] を選択します。
- 5 次のファイルが *MFGPROInstallDir* に作成されていることを確認します。また、Progress スキーマ ホルダ ファイルが db サブディレクトリに作成されていることを確認してください。

Oracle データベース ファイル	
ファイル	説明
crdb1ORACLE_SID.sql	Oracle データベース ファイルを作成する
crdb2ORACLE_SID.sql	テーブルスペースとデータベース オブジェクトを作成する
config.ORACLE_SID	Oracle 起動パラメータ ファイル
initORACLE_SID.ora	Oracle 起動パラメータ ファイル

スキーマ ホルダ データベース ファイル	
ファイル	説明
/db/oraempty.db	スキーマ ホルダ ファイル admin (管理) (例えば、.df ファイルのロード) を実行するには、このファイルを使用して接続します。
/db/oraempty.b1	スキーマ ホルダ 更新前イメージ ファイル
/db/oraempty.d1	スキーマ ホルダ データ ファイル
/db/oraempty.st	スキーマ ホルダ 構成ファイル

## SQL スクリプトの実行

表 3.4 にある SQL スクリプトは MFG/PRO Oracle データベース、テーブルスペース、およびデータベース オブジェクトを作成します。前のセクションでこれらのスクリプトのいくつかを作成しました。他のスクリプトは QAD が提供します。

スクリプト名	説明
crdb1ORACLE_SID.sql	Oracle データベースのためのデータベースファイルを作成する
crdb2ORACLE_SID.sql	テーブルスペースとデータベース オブジェクトを作成する
oraempty-idx.sql	MFG/PRO 実務用インデックス
oraempty-seq.sql	MFG/PRO 実務用シーケンス
oraempty-tbl.sql	MFG/PRO 実務用テーブル
oadmemory-idx.sql	MFG/PRO 管理用インデックス
oadmemory-seq.sql	MFG/PRO 管理用シーケンス
oadmemory-tbl.sql	MFG/PRO 管理用テーブル
ohpempty-idx.sql	MFG/PRO ヘルプ インデックス
ohpempty-tbl.sql	MFG/PRO ヘルプ テーブル

**表 3.4**  
MFG/PRO SQL  
ファイル

- 1 未作成の場合、Oracle データベース システムに必要なディレクトリを作成します。
- 2 oracle または Oracle データベース管理グループのメンバーであるユーザーとしてログオンします。通常、これは root または mfg を含みません。Oracle データベースとテーブルスペースを作成する SQL コマンドを実行するために、この作業は必要です。

**重要** Oracle データベース管理グループのメンバーとしてログオンする場合、すべての MFG/PRO ディレクトリへの許可を読み、書き、実行したか確認してください。これには、環境とシステム ディレクトリ、および MFG/PRO テーブルスペースとインデックスを作成したいディレクトリが含まれます。

- 3 \$ORACLE\_HOME、\$DLC、および \$ORACLE\_SID 環境変数が正しいロケーションを指していることを確認します。また、\$DLC/bin と \$ORACLE\_HOME/bin が \$PATH 変数にあることを確認してください。
- 4 Oracle インスタンス ディレクトリに変更します。コア、ユーザー、およびバックグラウンド ダンプ ディレクトリがあることを確認してください。なければ、読み出し / 書き込み許可と実行許可を使用して、これらのディレクトリを作成してください。

「SQL スクリプトの作成」(43 ページ) を参照。

- 5 次のファイルと Oracle インスタンス ディレクトリにコピーします。
- `initORACLE_SID.ora`
  - `config.ORACLE_SID`
- 6 次のファイルを Oracle インスタンス / `create` ディレクトリにコピーします。
- `crdb1ORACLE_SID.sql`
  - `oraempty-tbl.sql`
  - `crdb2ORACLE_SID.sql`
  - `oadmempty-idx.sql`
  - `config.ORACLE_SID`
  - `oadmempty-seq.sql`
  - `initORACLE_SID.ora`
  - `oadmempty-tbl.sql`
  - `lvorasp.plb`
  - `ohpempty-idx.sql`
  - `oraempty-idx.sql`
  - `ohpempty-tbl.sql`
  - `oraempty-seq.sql`

- 7 UNIX サーバーの場合、Oracle インスタンス ディレクトリから `$ORACLE_HOME/dbs` への `initORACLE_SID.ora` ファイルのためのシンボリックリンクをコピーまたは作成します。  
このリンクを作成するための UNIX コマンドは次のようになっています。

```
ln -s /dr05/mfgpro/eb2/instance/initORACLE_SID.ora
$ORACLE_HOME/dbs/initinitORACLE_SID.ora
```

- 8 (Windows のみ) DOS ウィンドウで次のコマンドを実行して、Oracle データベースのための Windows サービスを作成します。

```
oradim -new ORACLE_SID -startmode manual -pfile
"C:\oracle\admin\ORACLE_SID\pfile\
initORACLE_SID.ora"
```

- 9 新しいインスタンスのためのデータベース ファイルを作成するには、次のコマンドを使用して `crdb1ORACLE_SID.sql` スクリプトを実行します。

```
svrmgrl < crdb1ORACLE_SID.sql
```

スクリプトが終了すると、Oracle サーバー マネージャは `Statement processed` メッセージを表示し、オペレーティング システム プロンプトに戻ります。

🕒 時間 00:13:30

- 10 テーブルスペース、引下げセグメント、および Oracle ユーザー ID を作成するには、次のコマンドを使用して `crdb2ORACLE_SID.sql` スクリプトを実行します。

```
svrmgrl < crdb2ORACLE_SID.sql
```

**注意** スクリプトの実行中にいくつかのエラー メッセージが表示されることがあります。これは、オブジェクトができる前に作成されたドロップ コマンドを SQL スクリプトが各オブジェクトに対して実行し、それによって破損オブジェクトが作成されないようにするためです。

- 11 (Windows のみ) DOS ウィンドウで次のコマンドを実行して、システムが起動したときにデータベースが自動的に立ち上がるようにします。

```
oradim -edit ORACLE_SID -startmode auto
```

- 12 crdb1ORACLE\_SID.lst と crdb2ORACLE\_SID.lst を見て、予期しないエラーを確認してください。

- 13 表 3.5 の SQL スクリプトを実行して、新しく作成された Oracle テーブルスペースに MFG/PRO スキーマをロードします。次のコマンドを使用し、SQLScript 変数を列挙する各スクリプトに置き換えてください。

```
sqlplus qad/qad < SQLScript
```

**注意** 順序が重要な場合があります。ヘルプ インデックス スクリプト (ohempty-idx.sql) はヘルプ テーブル (ohempty-tbl.sql) スクリプトより後に実行する必要があります。

SQL スクリプト	説明	時間
oadmemory-seq.sql	管理用シーケンス	00:00:00
oadmemory-tbl.sql	管理用テーブル	00:00:30
ohpempty-tbl.sql	ヘルプ テーブル	00:00:00
ohpempty-idx.sql	ヘルプ インデックス	00:00:00
oraempty-seq.sql	実務用シーケンス	00:00:00
oraempty-tbl.sql	実務用テーブル	00:04:30

**表 3.5**  
MFG/PRO スキーマ SQL スクリプト

**重要** この時点では、oraempty-idx.sql と oadmemory-idx.sql スクリプトを実行しないでください。インストールにかかる時間を短縮するには、MFG/PRO デフォルト システム データをロードした後にこれらのスクリプトを実行してください。

- 14 表 3.5 に書かれている SQL スクリプトのログ ファイルを見て、予期しないエラーを確認します。ログ ファイル名は SQL スクリプト名と同じですが、.lst または .log の拡張子が付いています。
- 15 SQL スクリプトを実行するためにユーザーを変更した場合は、ログアウトしてから、グループ qad のユーザー mfg としてログオンしなおします。
- 16 ネットワークを介してデータベースに接続している場合は、tnsnames.ora ファイルおよび listener.ora ファイルを設定します。

● 「インデックス SQL スクリプトの実行」(55 ページ) を参照。

● 詳細については、「SQL スクリプトの検証」(117 ページ) を参照。

## MFG/PRO データのロード

MFG/PRO システム データには、実行するすべての言語のための実務用プログラムと管理用プログラムをサポートするデータが含まれています。システムデータのロードはいくつかの手順で実行されます。実務用プログラムをサポートする言語依存データは、基本言語についてロードされます。その後、実行する追加言語それぞれについて同じデータをロードします。管理用データに関しても同様に処理が続きます。

**重要** MFG/PRO 変換のためにターゲット バージョンのデータベースを構築する場合、システム データをロードしないでください。

ロードを始める前に、以下を確認してください。

- \$DLC のような Progress 変数および \$PATH が設定されている。
- \$ORACLE\_HOME と \$ORACLE\_SID のような Oracle 環境変数が設定されている。
- Oracle MFG/PRO インスタンスが実行中であり、データベースがマウントされている。
- HP-UX 11 システム上でインストールする場合は、正しい Oracle ライブラリにリンクするために `_progres` 実行形式ファイルを作成しなおす必要があります。詳細については、Progress knowledgebase エントリ 19768 を参照してください。

## MFG/UTIL Guided Setup の起動

- 1 グループ `qad` のユーザー `mfg` としてログインしていることを確認します。
- 2 `MFGPROInstallDir` に変更し、MFG/UTIL を起動します。

```
cd /MFGPROInstallDir
./mfgutil
```

Windows の場合、[ スタート ] メニューのアイコンから MFG/UTIL を起動してください。

- 3 [Configure] メニュー、[MFG/PRO Guided Setup] を順に選択します。
- 4 [Operation Set] プルダウン リストから [Create Oracle Production Database Set] を選択します。
- 5 [Run Set] を選択し、Enter を押します。

## システム データのロード

次の指示では、実務用プログラムをサポートするための最初のデータロード言語依存データが記載されています。次に、表 3.6、「データロード値」（55 ページ）を使用して、残りのロードについて同じ指示を適用することができます。

- 1 [Connect Database] 画面が表示されたら、デフォルトを採用します。[OK] を選択すると、Progress スキーマ ホルダに接続されます。

Connect Database

Physical Name: ./db/oraempty.db < Files... >  
 Logical Name: \_\_\_\_\_  
 Database Type: PROGRESS [ ] Multiple Users  
 User ID: \_\_\_\_\_  
 Password: \_\_\_\_\_  
 Trigger Location: \_\_\_\_\_ < Files... >  
 Parameter File: \_\_\_\_\_ < Files... >

Other CONNECT Statement Parameters:  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

<OK> <Cancel>

- 2 Oracle データベースに接続するか質問するプロンプトが表示されたら、[Yes] を選択します。

Question

Database oraempty is a ORACLE Schema Holder.  
 Do you wish to connect to the ORACLE Database?

<Yes> <No>

- 3 [Connect Database] 画面で、[User ID] フィールドに qad/qad を入力します。[OK] を選択して続行してください。クライアント / サーバーのインストールでは、[User ID] に qad/qad@ORACLE\_SID と入力してください。

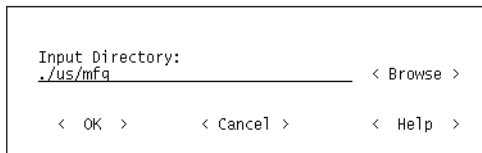
Connect Database

Physical Name: \_\_\_\_\_ < Files... >  
 Logical Name: qaddb  
 Database Type: ORACLE [ ] Multiple Users  
 User ID: qad/qad  
 Password: \_\_\_\_\_  
 Trigger Location: \_\_\_\_\_ < Files... >  
 Parameter File: \_\_\_\_\_ < Files... >

Other CONNECT Statement Parameters:  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

<OK> <Cancel>

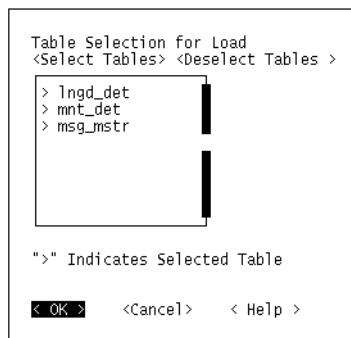
- 4 [Input Directory] 画面で、主な MFG/PRO 言語のための 2 文字からなる MFG/PRO 言語コード ディレクトリの下にある mfg サブディレクトリを指定します (./us/mfg)。言語コード ディレクトリは *MFGPROInstallDir* の下にあります。



完了すると、[OK] を選択し、続行してください。

🕒 時間 00:00:30

- 5 [Table Selection for Load] 画面で [OK] を選択します。特定の言語のためのデフォルト実務用データのロードが始まります。



- 6 ロードが完了すると、スペースバーを押して続行してください。

📖 「Guided Setup」  
(17 ページ) を  
参照。

表 3.6 にあるデータセットごとに、このセクションを繰り返してください。Guided Setup は、入力された正しいロード先ディレクトリによって進みます。テーブルの中で参照される追加言語をロードするには、*wkodbsrv.ini* を編集してください。

**注意** テーブル選択リストでは、./mfg と ./admin のような大きなディレクトリのためのロードに 1 分以上かかることがあります。

表 3.6  
データ ロード値

データ	Physical	ユーザー ID	ロード先 ディレクトリ	時間
実務用、追加言語	oraempty.db	qad/qad <sup>a</sup>	./XX/mfg <sup>b</sup>	00:00:30
実務用、一般データ	oraempty.db	qad/qad	./mfg	00:02:00
管理用、基本言語	oraempty.db	qad/qad	./us/admin <sup>c</sup>	00:00:30
管理用、追加言語	oraempty.db	qad/qad	./XX/admin	00:00:30
管理用、一般データ	oraempty.db	qad/qad	./admin	00:04:00

- a. クライアント / サーバーのインストールの場合、qad/qad@ORACLE\_SID を入力してください。
- b. XX のインスタンスを、実行する言語コードと置き換えてください。
- c. /us の基本言語は一例です。

ロードを終えるごとに、ロード元のディレクトリの .e ファイルにエラーが書き込まれます。例えば、./mfg の co\_ctrl.d ファイルからロードしている時にエラーが発生すると、エラーのある co\_ctrl.e ファイルが ./mfg. に作成されます。

## インデックス SQL スクリプトの実行

ここまででシステム データがロードされたので、データベースのための Oracle インデックスを構築することができます。作業を進める前に、次の事柄を確認してください。

- \$ORACLE\_HOME、\$DLC、および \$ORACLE\_SID 環境変数が正しいロケーションを指している。
  - DLC/bin と ORACLE\_HOME/bin が \$PATH 変数の中にある。
- 1** オペレーティング システムのプロンプトが表示されたら、Oracle データベース管理グループのメンバーとしてログオンします。通常、これには root は含まれていません。
- mfg ユーザーを Oracle システム管理グループのメンバーにした場合は、そのユーザーとしてログインしたままの状態、ユーザー mfg として SQL スクリプトを実行してください。
- 2** 表 3.7 の SQL スクリプトを実行して、MFG/PRO 実務用インデックスと管理用インデックスを有効にします。次のコマンドを使用し、SQLScript 変数を列挙する各スクリプトに置き換えてください。

```
sqlplus qad/qad < SQLScript
```

**表 3.7**  
MFG/PRO スキーマ SQL スクリプト

SQL スクリプト	説明	時間
oraempty-idx.sql	実務用インデックス	00:10:30
oadmempty-idx.sql	管理用インデックス	00:01:30

「SQL スクリプトの検証」(117 ページ) を参照。

- 3 予期しないエラーについては、上の SQL スクリプトのログ ファイルを確認します。ログ ファイル名は SQL スクリプト名と同じですが、.lst または .log の拡張子が付いています。これらは *MFGPROInstallDir* に保管されています。  
エラーが発生した場合、その問題を解決してから、これらのスクリプトを実行してください。
- 4 SQL スクリプトを実行するためにユーザーを変更した場合は、ログアウトしてから、グループ *qad* のユーザー *mfg* としてログオンしなおします。

## スキーマ ホルダのコピー

オリジナルのスキーマ ホルダは、*oraempty* のデフォルト名で作成されています。このデータベースのコピーを新しい名前で作成し、外部データベース参照 (Oracle データベースへのスキーマ ホルダの参照) をデフォルトの *qadddb* から実際の Oracle データベース名に更新してください。

- 1 *mfg* としてログオンします。
- 2 MFG/UTIL. を起動します。  

```
./mfgutil
```

  
Windows の場合、[ スタート ] メニューのアイコンから MFG/UTIL を起動してください。
- 3 MFG/UTIL の [Guided Setup] を起動し、[Run Set] を選択します。
- 4 [Create New Database] 画面で、現在のスキーマ ホルダ、*./db/oraempty* がデフォルトで表示されます。[New Database Name] のもとに、実務用スキーマ ホルダに使用したい名前を入力します。通常はユーザーの Oracle SID を使用します。[OK] を選択してください。  
**注意** 新しいスキーマ ホルダへのパスを入力する必要はありません。新しいスキーマ ホルダは、デフォルトで現在のスキーマ ホルダと同じディレクトリに作成されます。

●時間 00:00:30

Create New Database from oraempty

Original Database: ./db/oraempty.db <Browse... >

New Database Name: ./db/eb2ora

< OK > < Cancel >

- 5 コピーが完了すると、[Close] を選択します。
- 6 [Oracle Database Name] フィールドにおいて、Oracle データベース名が Oracle SID と一致することを確認します。完了すると、[OK] を選択してください。

Current ORACLE\_SID Value: eb2ora

Oracle Database Name: eb2ora

< OK > < Cancel >

- 7 確認プロンプトで名前を確認します。  
スキーマ ホルダの中の外部データベース参照は qadddb から Oracle データベース名（例では eb2ora）に変更されます。
- 8 サーバーのインストールが完了しました。

Operation Set: Create Oracle Production Database Set [V]  
Set Information: 12 of 12 operations complete.

Operation	Status	Parameter	Value
		DBName	./db/oraempty.db
		LDBName	
LoadData	Done	DataDir	./mfghelp
		DBName	./db/oraempty.db
		LDBName	
>CreateOraSH	Done		

Operation: Create schema holder.  
Parameter:  
Value:

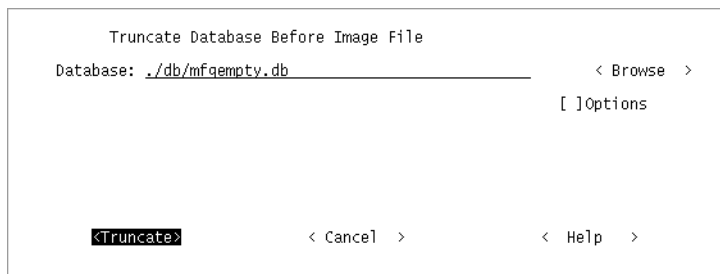
< Run Set > < Help > < Close >

## 更新前イメージ ファイルの切り捨て


ここで、空のデータベース 更新前イメージ (BI) ファイルを切り捨てます。BI ファイルのサイズを拡大する動作はこの時点ではほとんど行われていませんが、データをロードする前に、エラー メッセージを避けるために同期化が必要です。

●時間 : 00:01:30

- 1 [Database] から [Truncate Database] を選択します。 [Truncate Database Before Image File] (データベース更新前イメージ ファイルを切り捨て) 画面で、`eb2ora` へのパスをデフォルトのままにし、 [Truncate] (切り捨て) を選択します。



- 2 この工程が完了したら、表示されたログ ウィンドウを閉じます。
- 3 ログ ウィンドウを閉じてから、MFG/UTIL を終了します。



## 第4章

# ファイルサーバーおよび ホストクライアントの インストール

この章では、UNIX ホストクライアントや、キャラクタ /GUI ファイルサーバーをインストールします。本章の解説は、新規インストールと旧バージョンからの変換の両ケースに対応しています。

*概要*   **60**

*UNIX ホストクライアントのインストール*   **61**

*Windows ファイルサーバーのインストール*   **62**

*Progress スキーマホルダの作成*   **64**

## 概要

この章では、次の構成の 1 つまたはすべてをインストールします。

**表 4.1**  
UNIX および  
Windows クライアント  
の構成

	ホスト マシン	リモート クライアント
UNIX	キャラクタ クライアント	ホストへの telnet
Windows キャラクタ	キャラクタ ファイル サーバー	キャラクタ クライアント
Windows GUI	GUI ファイル サーバー	GUI クライアント

UNIX の場合、ホスト クライアントをまずインストールし、次に他の UNIX 端末から telnet をインストールして、ホスト クライアントのセッションと接続します。

UNIX ホスト クライアントに加えて Windows クライアント (キャラクタまたは GUI) を実行する場合は、キャラクタまたは GUI ファイル サーバーをインストールしてからそれぞれの追加のマシンにリモート クライアントをインストールします。リモート キャラクタ クライアントはキャラクタ ファイル サーバーに接続し、GUI リモート クライアントは GUI ファイル サーバーに接続します。

Windows データベース サーバーへのインストールもほぼ同様ですが、ホスト クライアントがありません。ホスト マシンにクライアントをインストールしたい場合は、キャラクタまたは GUI ファイル サーバーのインストールと同様に行いません。

Desktop 2 の必要条件と導入について詳しくは、『*Installation Guide: QAD Desktop*』を参照。

データベース サーバーの選択は各社の方針によって異なりますが、パフォーマンスの面から GUI よりも Windows キャラクタ ファイル サーバーとリモート クライアントをインストールする会社が多くなっています。キャラクタの導入は Desktop 2 の構成に完全に対応しています。

## UNIX ホスト クライアントのインストール

このインストールでは、ホスト クライアントをデータベース サーバー マシンにインストールすることを前提とします。

- 1 基本言語から順に、特定言語の UNIX キャラクタ クライアント メディアをロードします。テープ メディアの場合、「テープ メディアのロード (UNIX のみ)」(35 ページ)を参照してください。CD の場合、「CD-ROM のマウント (UNIX のみ)」(34 ページ)を参照してください。
- 2 ユーザー `mfg` としてログオンします。
- 3 CD 上のクライアント メディアの入ったディレクトリにアクセスします。テープのインストールの場合、これは一時テープ ディレクトリです。
- 4 次のコマンドを指定して、インストール スクリプトを起動します。  
`./install.ksh`  
 [Welcome] 画面が表示されます。Enter を押して続行してください。
- 5 MFG/PRO ソフトウェア使用許諾契約書を読んで同意します。
- 6 デフォルト表示されない場合は、ログ ファイル ロケーションを指定します。
- 7 `MFGPROInstallDir` を入力します。前のステップでログ ファイルが正しく特定された場合、このディレクトリはデフォルトになります。
- 8 このクライアントのインストール先を入力します。デフォルトのディレクトリは `MFGPROInstallDir/qadchrcl` です。

**重要** スペースを含むディレクトリ パスを選択しないでください (例えば、`C:\Program Files\mfgpro`)。MFG/UTIL によって生成されるデータベース スクリプトは、スペース付きのパスにあるデータベースの場所を探ることができません。

- 9 インストールの概要を確認してから、`y` を押してインストールを開始します。
- 10 複数の言語をインストールする場合、クライアント言語ごとにこれらのインストール手順を繰り返します。各言語サブディレクトリが `MFGPROInstallDir` において同じレベルであるようにしてください。例えば、`/mfgsrv/us` や `/mfgsvr/fr` のようにしてください。
  - a 追加する言語ごとに、前のキャラクタ クライアントのインストールを上書きするかどうかたずねられると、[No] を選択します。
  - b 言語コンポーネントをインストールするかどうかたずねられると、[Yes] を選択します。

🕒 時間 : 00:00:30

- 11 ホスト クライアントのインストールを実行するには、「データベース セットの設定」(70 ページ)に進んでください。

## UNIX クライアントの追加

- 「スクリプトおよびショートカットの生成」(80 ページ)を参照。

他の UNIX クライアントを MFG/PRO サーバーに接続するには、これらのクライアントに有効な起動スクリプト (例えば、`client.Production`) を作成します。

## Windows ファイル サーバーのインストール

次の手順では、キャラクタ ファイル サーバーまたは GUI ファイル サーバーを Windows システムにインストールします。各インストールの手順はほぼ同じですが、使用するメディアとデフォルトのディレクトリが異なります。メディアのラベルには、キャラクタ ファイル サーバーの場合は「キャラクタ クライアント」、GUI ファイル サーバーの場合は「GUI クライアント」を指す記載があります。

### 準備手順

- リモートクライアントのインストール手順を 20 ページにまとめています。

Windows の場合、DOS コマンドのウィンドウ バッファのリセットが済んでいなければ、このリセットを行います。「Windows インストール セットアップ (Windows のみ)」(32 ページ)を参照。

ファイル サーバーをデータベース サーバーとは別のドライブにインストールする場合は、意図したファイル サーバー ドライブからデータベース サーバー ドライブを割り当てているか、TCP/IP ネットワーク接続を作成している必要があります。

### インストール手順

- 1 基本言語から順に、特定言語のキャラクタ クライアントまたは GUI クライアントのメディアをロードします。テープ メディアの場合、「テープ メディアのロード (UNIX のみ)」(35 ページ)を参照してください。CD の場合、「CD-ROM のマウント (UNIX のみ)」(34 ページ)を参照してください。
- 2 CD 上のクライアント メディアの入ったディレクトリにアクセスします。
- 3 インストール スクリプト `install.exe` を起動します。  
[Welcome] 画面が表示されます。Enter を押して続行してください。
- 4 MFG/PRO ソフトウェア使用許諾契約書を読んで同意します。

- 5 インストール ログ ファイルのデフォルトのロケーションをそのまま受け付けるか、データベース サーバーのインストールの際にデフォルト設定を使わなかった場合は正しいロケーションを入力します。
- 6 `MFGPROInstallDir` を入力します。これはデータベース サーバーのディレクトリです。前のステップでログ ファイルが正しく特定された場合、これはデフォルトになります。
- 7 ファイル サーバーのインストール先を入力します。デフォルトのディレクトリは `MFGPROInstallDir` です。可能性のある別のインストールのためのデフォルトのディレクトリは次のとおりです。

Windows キャラクタのデフォルト	Windows GUI のデフォルト
<code>c:\mfgsvr</code>	<code>c:\mfgsvr\guicli</code>

**注意** 旧バージョンでは、キャラクタ サーバー コードはデフォルトで `mfgsvr\us` にインストールされていました。今回のバージョンでは、これはデフォルトで `\mfgsvr` にインストールされます。

**重要** スペースを含むディレクトリ パスを選択しないでください (例えば、`C:\Program Files\mfgpro`)。MFG/UTIL によって生成されるデータベース スクリプトは、スペース付きのパスにあるデータベースの場所を探すことができません。

- 8 MFG/UTIL アイコンのフォルダ名を入力するようプロンプトが表示されます。デフォルト値のままにするか、新しいものを指定します。
- 9 インストールの概要を確認してから、`y` を押してインストールを開始します。
- 10 次のプロンプトに応答します：

🕒 時間 00:10:00

[Subscribe to QAD Supply Visualization?](QAD サプライビジュアライゼーションに入会しますか?)。

サプライビジュアライゼーション (SV) はベンダー管理在庫 (vendor-managed inventory) のための Web ベースのサービスで、MFGx.net という QAD の Web ポータルを通じて提供されます。

MFGx.net のホーム ページで、[Services] タブをクリックしてから [SV] ボタンをクリックすると、SV のホーム ページが表示されます。[trial] または [subscription] のリンクを選択して、入会プロセスを開始してください。

**注意** 複数の言語をインストールする場合は、これらのクライアントのインストール手順を追加の言語ごとに繰り返す必要はありません。各言語ごとのコンパイルは後で行ないます。

- 11 他のファイル サーバー タイプのインストールが必要な場合は、この手順を繰り返します。

## progress.svg の編集

MFGPROInstallDir 中の progress.svg ファイルは正しくない PROPATH を持っているため、MFG/UTIL によって適切に更新されません。ひとつの簡単な変更が必要です。

- 1 progress.svg をエディタで開きます。
- 2 [Startup] セクションの中で PROPATH の行を見つけ、行頭にセミコロンを入力することで、それにコメントアウトします。

```
DLC=c:\dlc91d
PROBUILD=c:\dlc91d\probuild
; PROPATH=c:\mfgsvr\guicli,c:\mfgsvr\guicli\bbi,
c:\mfgsvr\guicli\images.pl
PROMSGS=c:\dlc91d\promsgs
```

- 3 そのファイルを保存します。

## Progress スキーマホルダの作成

MFG/PRO Windows クライアントは、Oracle データベースに接続するためには、Progress スキーマフォルダに対するアクセス権を持っている必要があります。スキーマホルダへのアクセス権を設定するには、次のいずれかの方法が使用できます。

- それぞれの Windows クライアント PC で、サーバー上のスキーマホルダが格納されているディレクトリにネットワークドライブをマッピングします。UNIX のインストールでは、Windows PC が UNIX ディレクトリにアクセスできるようにするためのネットワークソフトウェアが必要となります。  
ご使用の環境でこのオプションを導入できない場合は、このセクションを飛ばして「データベースセットの設定」(70 ページ)にお進みください。
- UNIX サーバー上にある既存のスキーマホルダにアクセスできない場合は、Windows クライアントファイルサーバーにスキーマホルダを作成してください。作成したら、それぞれのクライアント PC でネットワークドライブをマッピングして、スキーマホルダへアクセスできるようにしてください。

## スキーマ ホルダの作成

次の手順でスキーマ ホルダを作成します。これらの手順では、次のことを仮定しています。

- スキーマ ホルダは、ファイル サーバー上に作成される。
- すべての Windows クライアントが、このスキーマ ホルダにドライブをマッピングしてアクセスできる。
- MFG/PRO データ定義ファイルは、ファイル サーバーの Windows クライアント管理ディレクトリの db サブディレクトリにコピーされている。

- 1 MFG/UTIL. を起動します。
- 2 [Database] メニューから [Create Database] を選択します。



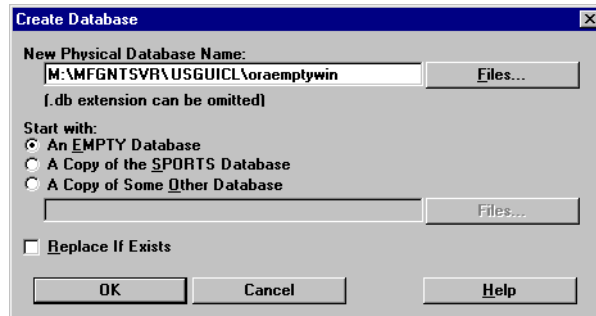
- 3 [New Physical Database Name] フィールドで、スキーマ ホルダに使用したい名前を入力します。このガイドでは、このデータベースを oraemptywin と呼ぶことにします。

ファイル サーバー上にスキーマ ホルダを作成したい場合は、スキーマ ホルダを作成するファイル サーバー上のディレクトリへのパスを指定します。パスの指定は、ネットワークドライブ文字または統一命名規則 (UNC) のいずれでもかまいません。ここでの例では、次のネットワークドライブを使用しています。

```
M:\mfgsvr\guicli\oraemptywin
```

**注意** トレーニング用、開発用、またはその他のデータベースのために Windows クライアントを作成する場合は、この手順でそのデータベースの名前を入力してください。

- 4 [Start With] リストから [An EMPTY Database] を選択します。



時間 00:01:00

- 5 [OK] をクリックすると、スキーマ ホルダが作成されます。

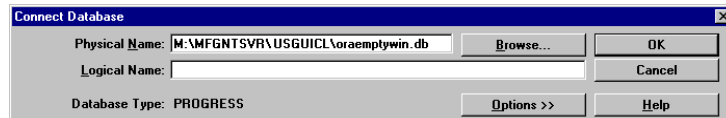
- 6 次のファイルが作成されていることを確認します。

*SchemaHolderName .b1*  
*SchemaHolderName .d1*  
*SchemaHolderName .db*  
*SchemaHolderName .st*

**注意** 前述の例に従えば、スキーマ ホルダのファイルは M:\mfgsvr\guicli ディレクトリに格納されます。

- 7 [Database] メニューから [Load Database Schema (.df) File] を選択します。

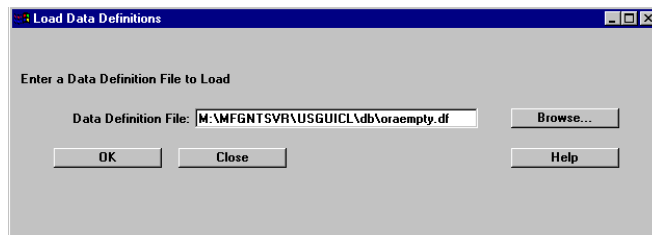
- 8 [Connect Database] ウィンドウで、スキーマ ホルダ データベースのパスと名前を指定します。[Browse] ボタンを使用してデータベースを選択することもできます。準備ができたなら、[OK] をクリックします。



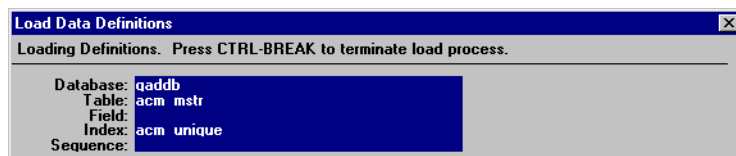
時間 00:03:00

- 9 [Data Definition File] フィールドで、oraempty.df へのパスを指定し、[OK] をクリックします。

**注意** これらの手順では、このファイルは、GUI クライアント インストール ディレクトリの db サブディレクトリにあります。



データ定義ファイルのロード中は、進捗状況を示すウィンドウが表示されます。



- 10 [Load Complete] ダイアログボックスが表示されたら、[OK] をクリックします。
- 11 手順6～10を繰り返して、他の2つのデータ定義ファイルをロードします。

ディレクトリ	データ定義ファイル	時間
qadguicli/us	oadmempty.df	00:00:00
qadguicli/us	ohpempty.df	00:00:00

- 12 追加する言語ごとに、手順 6 ～ 9 を繰り返します。

MFG/PRO スキーマのロードが完了すれば、スキーマ ホルダは使用できます。すべての MFG/PRO Windows クライアントは、Oracle データベースに接続するためには、このスキーマ フォルダにアクセスする必要があります。



## 第 5 章

# データベースのセットアップと アプリケーションのコンパイル

この章では、データベース セットを設定し、クライアント起動スクリプトとショートカットを生成し、アプリケーション コードをコンパイルします。

データベース セットの設定 **70**

アプリケーション コードのコンパイル **74**

スクリプトおよびショートカットの生成 **80**

データベースのバックアップ **83**

リモート クライアントのエクスプレス セットアップ **84**

Progress 初期化ファイル **86**

## データベース セットの設定

MFG/UTIL は、データベース セット の概念によってクライアント起動スクリプトを生成します。標準的な MFG/PRO データベース セットは Progress スキーマホルダと Oracle データベースからなります。このセクションでは、Production データベース セットと Compile データベース セットを設定する方法を説明します。Compile データベース セットには、空の Progress スキーマホルダ (oraempty) があります。Production データベース セットには、Production Progress スキーマホルダ (oraprod) と Oracle Production データベース (mfgora) があります。

### 多言語コンパイル セットの準備

多言語を使用して、異なるデフォルトコード ページを参照する場合 (特にシングルバイト言語とダブルバイト言語の両方を使用する場合)、コード ページを参照しないコンパイル データベースを作成します。これに対してコードをコンパイルすると、コードが言語から独立したものとなります。実務用、トレーニング用、パイロット用のデータベースを起動すると、このコードが参照され、ユーザーのコード ページに適用されます。

- 1 `MFGPROInstallDir` にディレクトリを作成します (compile など)。
- 2 このディレクトリに、空のデータベースをコピーします。

```
$DLC/bin/procopy $MFG/db/mfgempty $MFG/compile/
mfgundef
```

ここで、`$DLC` には使用する Progress ディレクトリ、`$MFG` には `MFGPROInstallDir` を指定します。

各空のデータベースに対して次の作業を実行します。

- `mfgempty` を `mfgundef` にコピーします。
- `admempty` を `admundef` にコピーします。
- `hlpempty` を `hlpundef` にコピーします。

- 3 Progress PROUTIL コマンドで、各空のデータベースを未定義のコード ページに変換します。

```
$DLC/bin/proutil mfgundef -C convchar convert
undefined
```

ここでも、空のデータベースごとに同じ作業を繰り返します。 `admundef`、`hlpundef`。

## データベース セット設定画面

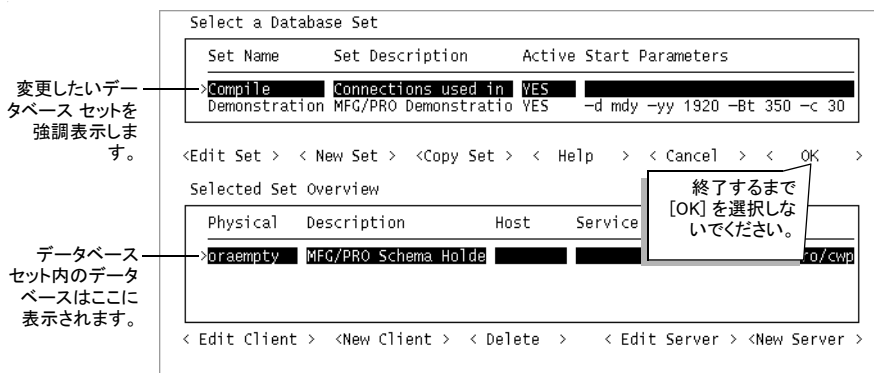
- 1 MFG/UTIL. を起動します。

```
cd /MFGPROInstallDir
```

```
./mfgutil
```

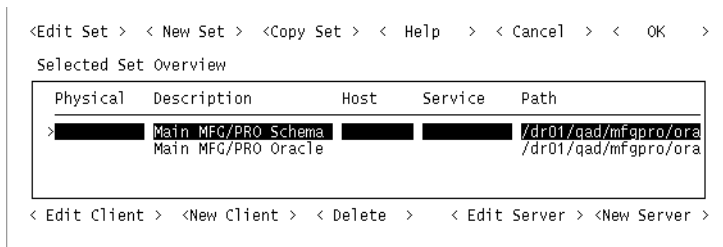
Windows の場合、[スタート]メニューから文字 [MFG/UTIL] アイコンをダブルクリックします。

- 2 [Configure] メニューから [Database Set Maintenance] を選択します。
- 3 データベース セット設定画面が表示されます。次の図を参照して、この画面をよく理解してください。



## Production データベース セットの設定

- 1 1 番上のフレームで Production データベース セットを選択します。
- 2 タブを押して [Selected Set Overview] リストに移動し、スキーマ ホルダを選択します。
- 3 タブを押して [Edit Client] ボタンに移動し、Enter を押します。



- 4 [Client Database Parameters] 画面が表示されたら、次の表と例を参考にしてフィールドを設定します。

```

Client Database Parameters
Physical: eb2ora_____
Logical: _____
Description: Main MFG/PRO Schema Holder_____
Connect Parms: -RO -znotrim -trig triggers_____
Connection Type: Local_____ [V]

Path: /oratem/eb2ora/db_____
< OK > < Cancel > < Help > < New > < Delete >

```

フィールド	入力
Physical	Production スキーマ ホルダの物理名を入力します。
Logical	このフィールドは空白のままにします。
Description	データベースの説明を指定します (省略可)。
Connect Parms	標準的な接続では、このフィールドにデフォルト値を取ります。起動スクリプトにおいてこれらのパラメータを後に変更することができます。詳細については、『 <i>Progress System Administration Guide (Progress システム管理ガイド)</i> 』を参照してください。
Connection Type	ローカル。
Path	スキーマ ホルダを含むディレクトリへのパスを入力するか、採用してください。デフォルトは <i>MFGPROInstallDir/db</i> です。

- 5 [Client Database Parameters] 画面で [OK] を選択します。

- 6 [Selected Set Overview] リストで Oracle データベースを選択し、[Edit Client] を選択して、それを設定します。
- a [Client Database Parameters] 画面が表示されたら、次の表と例を参考にしてフィールドを完成させます。

```

Client Database Parameters
Physical: eb2ora
Logical:
Description: Main MFG/PRO Oracle Database
Connect Parms: -dt ORACLE -U qad -P qad -c 250
Connection Type: Local
Path:
< OK > < Cancel > < Help > < New > < Delete >

```

フィールド	入力
Physical	Oracle データベースの名前を入力します。
Logical	このフィールドは空白のままにします。
Description	データベースの説明を指定します (省略可)。
Connect Parms	クライアント / サーバーを使用するには、-U パラメータは -U qad@ORACLE_SID である必要があります。 標準的な接続では、他のデフォルト値を採用してください。このデータベースに与えたい任意の Progress パラメータを後に入力することができます。詳細については、『Progress System Administration Guide (Progress システム管理ガイド)』を参照してください。
Connection Type	ローカル。
Path	このフィールドの内容を削除し、空白にしてください。

- b [Client Database Parameters] 画面で [OK] を選択します。
- 7 Production データベース セットのための情報を入力すると、[Database Set Configuration] 画面で [OK] を選択します。
- 8 [Database Set Configuration] を終了して、MFG/UTIL メイン メニューに戻ります。

## Compile データベース セットの設定

ここで、Compile データベース セットを設定することができます。

- 1 MFG/UTIL で、[Configure] メニューから [Database Set Maintenance] を選択します。
- 2 1 番上のフレームで Compile データベース セットを選択します。
- 3 [Compile] データベース セットのスタートアップ パラメータは、[Select a Database Set] リストに表示されます。このセットにはデフォルトのパラメータを採用してください。
- 4 [Compile] データベース セットに必要な唯一のデータベースは、`oraempty` という空の Progress スキーマ ホルダです。このデータベースは [Selected Set Overview] フレームに表示されます。このデータベースのデフォルトの設定を受け入れ、[OK] を選択してください。

## アプリケーション コードのコンパイル

MFG/PRO eB2 から、サーバー コードの完全なコンパイルがインストール後に必要になりました。これは、MFG/PRO 環境が全プログラムにかけて、Progress コードと同期されて互換性を持つようにするために旧バージョンでは推奨される手順でした。これはまた、コンパイル済みプログラム (`.r` コード) が今では製品に含まれていないため、MFG/PRO eB2 では必要な作業です。

ソース ファイルをコンパイルすると、同じ名前と `.r` 拡張子を持つオブジェクト ファイルが作成されます。コンパイルされたプログラムは、プログラム名の最初の 2 文字を使ったサブディレクトリに保存されます。このサブディレクトリは、`MFGPROInstallDir` の 2 文字の言語コード ディレクトリの下にあります。例えば、米英語用にコンパイルした `sosomt.p` は、`MFGPROInstallDir/us/so` に配置されます。

**重要** 英語以外の言語のコンパイルの場合、特定の言語用のコンパイル データベース セットを先に作成する必要があります。

次の指示に従うと、MFG/UTIL での UNIX データベース サーバーに MFG/PRO コードがコンパイルされます。また、これらの指示を参照して Windows マシンで Windows クライアント コードをコンパイルすることができます。その場合、ユーザー インタフェースは異なります。

## マルチスレッド コンパイル

コンパイルには数時間かかります。複数のコンパイル リストを使用し、複数のコンパイル セッションを開始することで、コンパイルをマルチスレッドにセットアップすることができます。次の手順は、次のセクションの詳細をまとめたものです。

- 1 [Generate Compile Listing] (コンパイル リスト生成) で、[From] フィールドと [To] フィールドを使用して、作成するファイルの範囲を限定します。一意のファイル名を入力してください。
- 2 次のファイル セットのために、[Generate Compile Listing] (コンパイル リスト生成) をもう一度実行します。  
例えば、すべてのプログラム (7746 ファイル) をコンパイルすることを想定した場合、  
A から FO までの全プログラムを `utcomp01.wrk` (1736 ファイル) に、  
FS から H までの全プログラムを `utcomp02.wrk` (1882 ファイル) に、  
I から RC までの全プログラムを `utcomp03.wrk` (2007 ファイル) に、  
RE から Z までの全プログラムを `utcomp04.wrk` (2120 ファイル) に  
入れることができます。
- 3 次に、コンパイル手順ごとに、並行して実行される別個の MFG/UTIL セッションを開始します。それらをすべて同時に開始してください。4 つのセッションは 50% から 75% の処理時間を節約することができます。

**重要** プロセスが `mfgutil.log` を開くことができないというエラーが、コンパイル セッションごとに表示されます。これは、同じファイルが他の処理で書き込まれている場合に起こります。このファイルは最終的には更新されるので、このエラーはコンパイルには影響しません。

## コンパイル

MFG/UTIL によりコンパイルされるファイルは、`utcompil.wrk` にリストされたものです。デフォルトでは、このファイル リストに MFG/PRO に提供されたファイルが含まれます。`utcompil.wrk` のファイル リストは、コンパイルのセットアップ プロセスで変更することができますが、通常これは、後の段階でカスタム用のコンパイルを作成するときに実行します。

- 1 `MFGPROInstallDir` から、MFG/UTIL を起動します。  

```
./mfgutil
```

  
Windows では、スタートメニューから MFG/UTIL を起動します。
- 2 MFG/UTIL では、[Compile Procedures from the Programs] メニューを選択します。

- 3 画面の例とフィールドの説明を使用して、コンパイル オプションを選択します。画面の左上にある [Compiler Options] (コンパイル オプション) を使用すると、フィールドバック レベルを設定し、コンパイル リストを選択することができます。

Compiler Options		R-code Destination	
<input checked="" type="checkbox"/> Verbose	<input type="checkbox"/> Generate Compile List File	<input checked="" type="checkbox"/> Staggered MFG/PRO Default	<input type="checkbox"/> Flat Destination
<input type="checkbox"/> Silent	<input checked="" type="checkbox"/> Use Existing Compile List		
Compile List File: <u>utcompil.wrk</u> <Browse>			
Compile Propath: _____ <Browse>			
Language Code: <u>us</u> [LV]		Database Set: <u>Compile</u> [LV]	
Destination Directory: _____ <Browse>			
<Compile >		< Help >	
		< Close >	

**[Verbose]**。MFG/UTIL はコンパイル情報を画面に表示し、それを MFG/UTIL ログ ファイル (mfgutil.log) に書き込みます。コンパイルの間、次の情報が表示されます。

- 日付と時間
- コンパイルの完了率
- コンパイル中のプログラムのパスと名前
- 発生したコンパイル エラー数

ログ ファイルは、MFG/UTIL が起動されたディレクトリにあります。

**[Silent]**。MFG/UTIL は mfgutil.log のみに出力を行います。

**[Generate Compile List File]**。コンパイル対象のプログラムをリストにしたファイルを生成または再生成します。このオプションを選択すると、[Generate Compile List] 画面が表示されます。

**[Use Existing Compile List File]**。デフォルトでは、これは MFG/PRO に含まれる utcompil.wrk であり、ファイルの完全なリストを含みます。

**[Staggered MFG/PRO Default]**。コンパイル済みのコードをデフォルト構造に格納します。「アプリケーション コードのコンパイル」(74 ページ) を参照。

**[Flat Destination]**。コンパイル済みのコードを 1 つの宛先ディレクトリに格納するときには、このオプションを選択してください。

**[Compile List File]**。コンパイル リスト ファイルの名前（デフォルトでは `utcompil.wrk`）を指定します。MFG/UTIL が起動されたディレクトリ以外のディレクトリにファイルがある場合、ディレクトリ パスとファイル名を含めてください。

**[Compile Propath]**。コンパイル PROPATH は次を含む必要があります。

- `MFGPROInstallDir`
- プログラムをコンパイルする言語の言語コード ディレクトリの下での `bbi` サブディレクトリ。言語コード ディレクトリは `MFGPROInstallDir` にあります。
- コンパイルするプログラムのためのソース コードを含む特定言語のディレクトリ
- コンパイルするソース コードのためのファイルを含む特定言語のディレクトリ

**[Language Code]**。[Staggered MFG/PRO Default] オプションを選択した場合、コードを保存したい場所に言語コードを入力してください。

**データベース セット**。コンパイルするデータベース セットを指定します。

**[Destination Directory]**。コンパイル済みコードを保存するディレクトリを指定します。一般的にこれは、`MFGPROInstallDir` です。[Staggered MFG/PRO Default]（スタガー形式の MFG/PRO デフォルト）を選択した場合、コンパイル済みコードは、このディレクトリの下にある該当言語ディレクトリの、2 文字のディレクトリに配置されます。例えば、米英語 `sosomt.p` のコンパイル済みコードは次のディレクトリに入ります：

```
./MFGPROInstallDir/us/so/sosomt.r
```

- 4 [Generate Compile List File option] オプションを選択した場合は、次の手順を実行します。[Use Existing Compile List File] を選択した場合は、手順 5 に進んでください。

●「マルチスレッド  
コンパイル」(75  
ページ)を参  
照。

- a [Source Directory] フィールドでは、コンパイルしたいソース プログラムを含むディレクトリへのパスを指定します。デフォルトでは、これは *MFGPROInstallDir/xrc.* となっています。
- b ソース ディレクトリのプログラムのサブセットのみをコンパイルしたい場合は、[File] フィールドと [To] フィールドを使用して、そのサブセットを指定します。これは英数字のコンパイル リストを作成する場合に限られます。
- c [Compile List File field] フィールドで使用するファイル名を指定します。デフォルトファイル名は *utcompil.wrk* です。  
リスト ファイルを特定のディレクトリに作成したい場合は、そのパスを含めてください。パスを指定したくない場合は、MFG/UTIL を起動したディレクトリにコンパイル リスト ファイルが生成されます。
- d [Generate] を選択して、コンパイル リスト ファイルを作成します。
- e [Compiler Options] 画面が表示され、[Use Existing Compile List] オプションが選択されています。正確なコンパイル リスト名を指定してください。

5 準備が整うと、[Compile] を選択します。

●時間 01:10:00

6 コンパイル確認画面では、コンパイル情報を確認します。設定が正しければ、[Continue] を選択してください。設定が正しくなければ、[Back] を選択して変更してください。

**注意** 非西欧言語のコードをコンパイルする場合、コンパイル用にコード ページ値を変更しなければいけない場合があります。コンパイル コード ページ値は、Progress ディレクトリの *startup.pf* ファイルの値がデフォルトとして使用されます。

```

Please Verify the Following Information,

Compiler Option: Verbose
R-code Destination: Staggered MFG/PRO Default
Destination Directory: /users/mfg/db060702/us
Compile List File: utcompil.wrk

Compile Propath: /users/mfg/db060702/xrc

Database Set: Compile
Code Page Values

CPINTERNAL: ISO8859-1          CPCOLL: Basic
CPRCODEOUT: ISO8859-1        CPSTREAM: ISO8859-1

<Continue>          < Back >

```

- 7 [Verbose] を選択した場合、[Installation Log] 画面が表示されます。コンパイルが終わると、[Print] または [Close] を選択してください。
- 8 コンパイルが完了すると、MFG/UTIL ログ ファイルにエラーがないか確認します。

コンパイルのエラーは、主に次のような原因で発生します。

- 使用している PROPATH が正しくない。
- PROPATH に /src または /xrc ディレクトリが存在しない。
- Progress データベースのバージョンがコードのバージョンと一致しない。

**注意** MFG/UTIL は [QAD Compiler] 画面に入力された設定を保存するので、それらの設定を次のコンパイルの際に再使用または変更することができます。

## 追加言語のコンパイル

追加の言語を導入する場合は、ここでそれらの最初の言語の翻訳ラベルをロードし、リコンパイルすることができます。次の手順に従ってください。

- 1 基本言語でコンパイルします。
- 2 次の言語の翻訳ラベルをロードします。
- 3 次の言語のコードをコンパイルします。
- 4 追加する言語ごとに、手順 2 および手順 3 を繰り返します。

●「翻訳ラベルのロード」(18 ページ)を参照。

## スクリプトおよびショートカットの生成

次の手順では、各アクティブ データベース セットに対して起動 / シャットダウン スクリプトやショートカットを作成します。これらのスクリプトおよびアイコンは、必要に応じて作成後に編集を加えることができます。

3 種類のスクリプト / アイコンがあります。

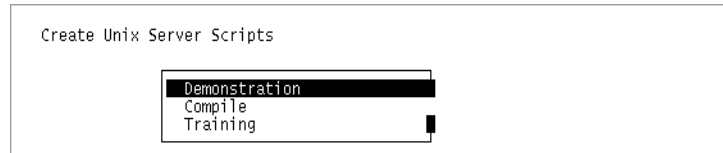
- UNIX スクリプト
- Windows キャラクタ セッション アイコン
- Windows GUI セッション アイコン

次の手順は 3 種類の方法すべてに適用できます。

### ヒント

この章での画面は、UNIX スクリプト作成手順から引用したものです。

- 1 Guided Setup を使用した場合、[Database Sets] 画面で [OK] を選択すると [Create Scripts/Shortcuts] 画面がデフォルトで表示されます。



- 2 スペースバーを押すか、またはクリックして (Windows) サーバー スクリプトを生成する全データベース セットを選択してから、[OK] または [次へ] を選びます。
- 3 Windows のショートカットを作成する場合には、ショートカットの保存先のプログラム フォルダを選びます。
- 4 Windows では確認画面が現れます。[次へ] をクリックし、ショートカットを作成します。

**注意** Windows のアイコンの作成は `makeicon.exe` プログラムによって実行されます。このプログラムは `PROPATH` になければなりません。これはデフォルトでは `MFGPROInstallDir` にあります。

- 5 UNIX システムの場合、MFG/UTIL により、各データベース セットに対して表 5.1 にリストされたスクリプトが作成されます。すべてのスタートアップとシャットダウン プロセスに、これらのスクリプト、もしくはこれらのコピーが使用されます。スクリプトは、`MFGPROInstallDir` に作成されます。

スクリプト	説明
<code>start.DBsetName</code>	このスクリプトはセット内のデータベース用サーバーを起動します。 <code>start.Production</code> が Oracle データベースとスキーマ ホルダのためのサーバーを起動します。
<code>stop.DBsetName</code>	このスクリプトはセット内の全データベース用サーバーを閉じます。
<code>client.DBsetName</code>	このスクリプトは Progress スキーマ ホルダを起動し、正しい Oracle インスタンスに接続し、MFG/PRO を起動します。このスクリプトは、キャラクタ クライアントをインストールした後このみ機能します。
<code>qma.DBsetName</code>	このスクリプトは Unix サーバーのためにのみ生成され、MFG/PRO QAD Desktop クライアントによって使用されます。  Desktop では、いくつかの MFG/PRO メンテナンス プログラムが telnet 環境で機能します。このスクリプトはデータベース セットの接続パラメータを指定し、MFG/PRO telnet プログラムを起動します。『 <i>Installation Guide:QAD Desktop</i> 』を参照してください。

**表 5.1**  
MFG/UTIL によって生成されるスクリプト

Windows のショートカットは、データベースのセットごとに起動およびシャットダウンのショートカットが作成されます。

- 6 スクリプトまたはショートカットの生成が終わったら、[Installation Log] (インストール ログ) 画面の [Close] (閉じる) を選択します。
- 7 ログファイル `mfgutil.log` にエラーがないかどうかを確認します。

## UNIX スクリプトの編集

- 1 別の言語でセッションを起動するスクリプトを作成するには、先ほど作成したスクリプトを新しいファイル名でコピーし、それを編集します。例えば、`client.Production` を `frclient.Production` にコピーします。それから次のように変更を加えます。
  - a PROMSGS= の設定を、特定言語の Progress メッセージ ファイル (`promsgs.LanguageCode`) を使用するように変更します。このファイルは、Progress ディレクトリの `prolang` ディレクトリの下にある 3 文字の Progress 言語コード サブディレクトリにあります。下の例は、フランス語の起動スクリプト用のものです。

```
PROMSGS=$DLC/prolang/fre/promsgs.fre; export PROMSGS
```

- b PROPATh= の設定を、特定言語の bbi サブディレクトリを使用するように変更します。このサブディレクトリは、MFG/PRO キャラクタクライアントをインストールした 2 文字の MFG/PRO 言語コード ディレクトリの下にあります。一般的に、キャラクタ クライアントは *MFGPROInstallDir* にインストールされています。下の例は、フランス語の起動スクリプト用のものです。

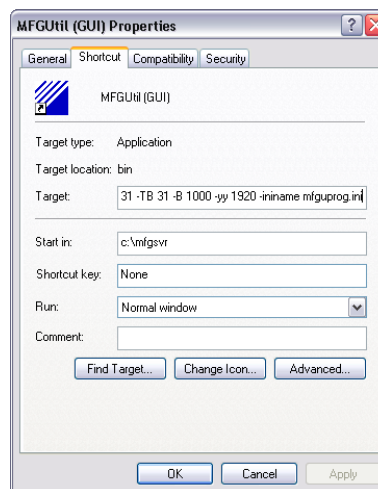
```
PROPATh=${PROPATh:-./MFGPROInstallDir,  
/MFGPROInstallDir/fr};export PROPATh
```

**注意** Progress と MFG/PRO 言語コードは必ずしも同じではありません。

## 特定言語の Windows ショートカットの作成

クライアント セットアップを実行してクライアント起動用ショートカットを作成したら、次の変更を行って特定言語の起動用ショートカットを作成します。クライアント セットアップ プログラムの実行手順と初期のクライアント起動用ショートカットの作成手順については、「スクリプトおよびショートカットの生成」(80 ページ)を参照してください。

- 1 初期化ファイルを、新しい名前を付けてコピーします。  
リモート クライアント初期化ファイルの名前は、データベース セットの名前に *.svg* または *.vga* の拡張子が付いたものになります (例えば *production.svg*)。クライアントが使用する初期化ファイルは、Shortcut Properties ダイアログ画面の [Target] フィールドで *-ininame* パラメータにチェックを付けることで決定できます。
- 2 ショートカットのアイコンを右クリックし、ショートカットのプロパティを確認します。



## Windows 起動パラメータの変更

初期化ファイルの変更が終わったら、これを参照するようにショートカットアイコンのパラメータを変更する必要があります。

- 1 MFG/PRO ショートカット アイコンを右クリックし、[Properties] を選択します。
- 2 [Target] フィールドを下にスクロールして、`-ininame` パラメータを探します。これが、`.svg` 拡張子をもつパスとファイルへの参照です。
- 3 新しいファイル名を入力し、[OK] をクリックします。

## クライアント環境のテスト

リモート クライアント環境をテストする前に、目的のデータベース セットのデータベース サーバーが起動されていることを確認します。

- 1 データベース サーバーを起動するには、データベース サーバー上の `MFGPROInstallDir` にアクセスし、そのディレクトリから `DBSetName.start` スクリプトを起動します。
- 2 MFG/PRO リモート クライアントで、[スタート] | [プログラム] | [MFG/PRO GUI Client] (MFG/PRO GUI クライアント) を開きます。適当なデータベース セットに対する GUI クライアントのショートカットをクリックします。
- 3 [MFG/PRO Sign-On] 画面が表示されたら、[OK] または [Exit] をクリックします。

## データベースのバックアップ

この時点で、データベースとディレクトリ構造の全体の完全なバックアップを作成する必要があります。

## リモート クライアントのエクスプレス セットアップ

- 詳しい手順については、「アプリケーション コードのコンパイル」(74 ページ)を参照。

エクスプレス セットアップ方法で追加のリモート クライアントをインストールする前に、アプリケーション コードをコンパイルします。

ファイル サーバーにクライアント ファイルをインストールした後は、各クライアントのマシンを設定する必要があります。設定の目的は、クライアントのマシンに必要なファイルをコピーし、クライアントのスタートアップ ショートカットを生成することです。スタートアップ ショートカットを生成するには、データベース セットを設定する必要があります。

最初のクライアントに対してデータベース セットを設定したら、MFG/UTIL では、設定をファイル サーバーに保存して、次のクライアントのインストールに使用することができます。この機能は、エクスプレス セットアップと呼ばれるものです。

**注意** この手順では、該当する (GUI またはキャラクタ) クライアント ファイルをファイル サーバー (各クライアントのマシンではなく) にロードしていることを想定しています。

### リモート クライアントのセットアップ条件

リモート クライアントをセットアップする前に、次の条件が整っていることを確認します。

- 24 ページを参照。

- 9 ページを参照。

- リモート クライアントのシステム要件に適合していること。
- データベース サーバーを、クライアント/サーバー接続を使用するように設定しているか、このクライアントを Windows のサーバー マシンにインストールしていること。
- ネットワークが機能していること。
- 各クライアントの PC に Progress クライアント ソフトウェアをインストールし、ネットワークのファイル サーバーからアクセスできること。
- ファイル サーバーにインストールされた、MFG/PRO クライアント ファイルや Progress ソフトウェアなどのすべてのコンポーネントに対して、各リモートクライアントのネットワークドライブのマッピングを行っていること。
- 最初のクライアント PC が Windows のファイル サーバーのインストール ディレクトリに書き込み権をもっていること。エクスプレス セットアップ機能を使用するには、書き込み権が必要です。

## エクスプレス セットアップの使用

エクスプレス セットアップは、各クライアントでデータベース セットを設定することなく Windows クライアントを実装します。最初のクライアントのセットアップの設定をファイル サーバーに保存しておけば、追加の Windows クライアントにこれらの設定をダウンロードできます。

- 1 最初のクライアントのセットアップが終わったら、MFG/UTIL メイン画面で、ファイル | デフォルト mfgutil.ini の保存を選択します。
- 2 確認ダイアログボックスで [Yes] をクリックします。
- 3 各 Windows クライアントに対して、「Windows ファイル サーバーのインストール」(62 ページ) の手順を繰り返します。
- 4 クライアント セットアップ プロセスの最後で、MFG/UTIL を起動します。
- 5 MFG/UTIL メイン画面から、File|Load default mfgutil.ini を選択します。
- 6 確認ダイアログボックスで [Yes] をクリックします。
- 7 ダイアログボックスの設定がロードされたら、Scripts|Generate Scripts を選択します。「スクリプトおよびショートカットの生成」(80 ページ) の手順に従って、クライアント起動用ショートカットを作成します。

## エクスプレス セットアップ設定の変更

必要に応じてエクスプレス セットアップの設定を変更できます。

- 1 いずれかの Windows クライアントから MFG/UTIL ショートカットをダブルクリックして MFG/UTIL を起動します。
- 2 Configure|Database Set Maintenance を開きます。
- 3 [Database Set Configuration] で変更を行い、[OK] をクリックします。
- 4 MFG/UTIL メイン ウィンドウで、File|Save Default mfgutil.ini を選択します。変更した設定は、現在のマシンに保存されるほか、ファイル サーバーの Windows クライアント管理ディレクトリにも保存されます。今すぐこれらの設定を使用して追加のクライアントをセットアップできます。

## ロケールの作成

eB2 から、日付および数値の書式を設定するロケールがユーザーごとに定義されるようになっています。locale.dat ファイルに利用できるロケールが入っています。デフォルトのファイルには、MFG/PRO が翻訳されている言語および国が含まれています。例えば、フランス語のエントリは次のようになっています。

```
FR,fr,FR,,dmy,European
```

エントリには、MFG/PRO 言語コード、ISO 言語コード、ISO 国コード、オプションの異形（現在不使用）、日付の書式、および Progress の数値の書式があります。

エントリは、ユーザーを設定する国ごとに必要です。locale.dat ファイルにない国で MFG/PRO を導入する場合は、そのファイルをエディタで開き、必要な国を追加してください。ファイルはルートでの *MFGPROInstallDir* にあります。

## Progress 初期化ファイル

Progress 初期化ファイルは、MFG/PRO リモート クライアントのインストール時に作成されます。MFG/PRO を起動すると、システムはこのファイルを使用して、初期化時に変数の値を決定します。

このファイルの拡張子は、.vga または .svg です (progress.vga または progress.svg)。いずれの拡張子になるかは、コンピュータのディスプレイ解像度で決まります。このファイルは、メモ帳やワードパッドなどのテキスト エディタを使って編集できます。以下に Progress 初期化ファイルの抜粋を示します。

```
;mfgprod.svg

[Startup]
;SCCS:@(#)progress.svg 1.2 05/17/02 16:21:31> v6Display=
no
;ImmediateDisplay=yes
;MultitaskingInterval=100

*****
;* UTDEVCOMP.P parameter
workdir=h:\pdt91
*****

;SVGA - low-resolution (800 x 600)
CharWidth=8
DefaultFont=MS Sans Serif, size 8 bold
DefaultFixedFont=Courier New, bold, size=8
```

```

;* New frame spacing parameter from Progress -
;* required for legacy code
FrameSpacing=1
Use3D-Size=no

DLC=p:/dlc91d
CONVMAP=v:\dlc91a
PROMSGS=v:\dlc91a\promsgs
PROBUILD=p:/dlc91d/PROBUILD
PROPATH=.,c:/QADGUICL/images.pl,r:/MFGNTSVR/QADGUICL,r:/
MFGNTSVR/QADGUICL/US

[Applications]
;* Enable Spinning MFG/PRO Globe
spin=no

;* Enable Graphs with the Browse
graph=yes
GRAFPATH=\stageobj\grafsman

;* Specifies executable to run when you select edit image
paint=pbrush.exe

```

## 初期化ファイルのエントリ

以下に示す Progress 初期化ファイルのエントリは、MFG/PRO に対して直接影響を与えます。

**CharWidth。**これらのフォント設定は変更できますが、使用するフォントは同じメトリックスのものでなければなりません。

**Frame Spacing。**この設定はそのままにしてください。これは MFG/PRO 内のレガシー コードをサポートするために必要です。

**Use-3D-Size。**この設定は、MFG/PRO 内のフィールドの 3 次元を決定します。このままにしてください。

**PROBUILD と PROPATH。**このままにしてください。

**Spin。**この設定は、MFG/PRO サインオン画面の地球儀を回転できるようにするかどうかを決定します。

[Yes] に設定した場合、地球儀をクリックするとそれが回転します。ダブルクリックすると回転が止まります。

**Graph。**この設定は、グラフ化と Graftsman ディレクトリへのポイントの参照をサポートします。Graftsman は MFG/PRO とともに提供されています。

この機能の使い方  
の詳細は、『User Guide  
Volume 1:  
Introduction』  
(ユーザーガイド  
Vol.1：はじめ  
に)を参照してく  
ださい。

**Paint** この設定は、フィールドに関連付けられているグラフィックを編集するとき使用する画像処理プログラムを決定します。デフォルト設定は Microsoft ペイントブラシです。作成・編集した画像は、作業ディレクトリに保管されます。

**注意** Windows のバージョンによっては、ペイントブラシではなく Microsoft ペイントが提供されています。コンピュータでこのようなバージョンの Windows を使用している場合は、テキスト エディタを使って、この設定を `paint=mspaint.exe` に変更してください。

**Fonts。** このセクションには、MFG/PRO で使用できるフォントのリスト（各フォントの名前とそのコード番号）が書かれています。このリストのフォントは、いっさい変更しないで下さい。


フォント セクションの最後に、80 桁（縦向き）レポートおよび 132 桁（横向き）レポートのための Windows 印刷デバイスで使用されるフォントのコード番号が書かれています。

`80ColumnReportFont=21`

`132ColumnReportFont=22`

これらの変数のデフォルト値はフォント コード 21 および 22 です。フォントを再割り当てするには、これらのコードをフォントリストの対応の値に変更してください。

フォントを Progress 初期化ファイルで使用できるようにするための方法は、『*Progress System Administration Guide*』（Progress システム管理ガイド）の「ユーザー環境の保守」に関する章を参照してください。



## 第 6 章

# MFG/PRO のセットアップ

この章では、アプリケーションの登録、最初のユーザーの設定によって MFG/PRO をセットアップします。

起動および登録 MFG/PRO 90

最初のユーザーの設定 92

オンライン ヘルプのロード 95

## 起動および登録 MFG/PRO

次の手順で、起動スクリプトのテストを行うことができます。これらの手順を定期的に行うことで、MFG/PRO サーバーとキャラクタ クライアントを起動することができます。

- 1 **UNIX のみ:** `MFGPROInstallDir` に変更して、サーバー スクリプトを起動します。

```
./start.DBSetName
```

- 2 次に、マルチユーザー セッションを開始します。

```
./client.DBSetName
```

Windows では、スタートメニューから MFG/PRO を起動します。

MFG/PRO が開始されます。

ユーザー ライセンスの詳細については、『*User Guide Volume 9, Manager Functions*』（ユーザーガイド Vol 9：管理者機能）を参照。

最初にログインしたとき、次の手順に従って MFG/PRO のライセンスを登録してください。ここでは、リリース メディアに含まれたライセンスコードシートが必要になります。

- 1 [MFG/PRO Sign On] 画面で、Enter を押します。
- 2 [License Details] 画面で、[Register] を選択します。

```

          * * * * W E L C O M E * * * *
          License Details
          Product: MFG/PRO
          License Code _____
          Product Not Registered
          Status _____
          <Register> < Ok >

          User ID: cwp
          Password:
  
```

- 3 [Registered Products] 画面で、[Add] を選択します。

```
***** W E L C O M E *****
Registered Products
Products:
  Name      Description
  >
  < Add >  < Edit >  < Remove >
                                     < Ok >  < Cancel >
User ID: cwp
Password:
```

- 4 [Add Product] 画面で、[License Code] フィールドを埋めます。リリースメディアに含まれるライセンスコードシートからコードを入力してください。[OK] を選択してください。
- 5 [Registered Products] 画面が再び表示されたら、[OK] を選択します。ライセンスコードと詳細が [License Details] 画面に表示されます。
- 6 [License Details] 画面で [OK] を選択します。オペレーティングシステムに戻ります。セッションを始めるには、MFG/PRO を再起動し、ログインします。

**ヒント**  
ライセンスコードを修正する必要がある場合は、[License Registration] (36.16.10) を使用してください。

## 最初のユーザーの設定

ログインするための最初のユーザーの ID (mfg) は、開始するときにシステムで唯一有効な ID です。追加のユーザーを設定するには、以下を実行する必要があります。

- 国コードの設定
- 時間帯のロード
- アクセスするロケーションのための汎用コードの作成 (ライセンス タイプ次第)
- システム管理ユーザーの設定

### 国コードの設定

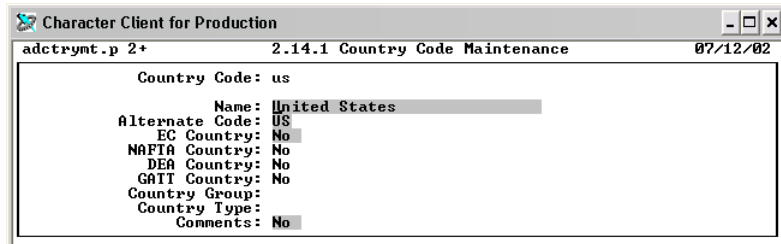
国コードおよび代替国コードが、定義される全ユーザーに必要です。

#### ヒント

キャラクタクライアントでのキーボードコマンドは次のようになっています。

Go = F1  
Help = F2  
End = F4

- 1 [国コード登録 / 変更] (2.14.1) に進み、ユーザーの所在地である国を設定します。
- 2 システムの国コードごとに、有効な ISO 代替コードを選択します。利用できる代替コードを参照するには Help を押してください。入力する国が汎用コードの中になければ、[汎用コード登録 / 変更] (36.2.13) のフィールド `ctry_code1` にその国を追加するか、他の選択肢を選択してください。

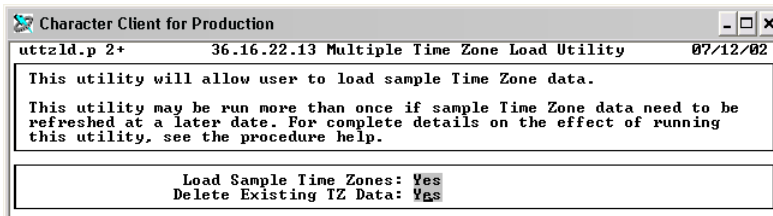


- 3 Go を押すと、その記録が保存されます。
- 4 End を押して、プログラムを終了します。

## 時間帯のロード

時間帯は、定義される全ユーザーに必要です。

- 1 [複数時間帯ロード ユーティリティ] (36.16.22.13) に進み、両方のフィールドを [Yes] に設定します。Go を押すと、そのユーティリティが実行されます。



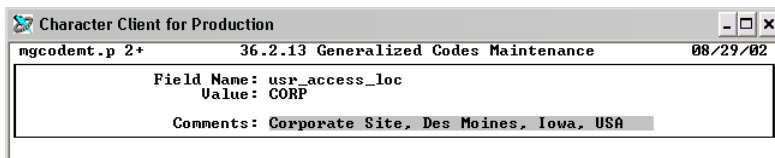
- 2 ロードが完了すると、End を押します。

## アクセス ロケーション コードの設定

ほとんどのライセンス条件にあてはまるデフォルトのアクセス ロケーションがデータベースに含まれています。しかし、ロケーションごとにライセンスを必要とするモジュールがある場合は、アクセス ロケーションが必要です。アクセス ロケーションを [国コード登録 / 変更] で設定してから、[ユーザー登録 / 変更] でそのロケーションを該当するユーザーのために入力してください。

●『User Guide  
Volume 9:  
Manager  
Functions』  
(ユーザーガイド  
Vol 9 : 管理者  
機能) を参照。

- 1 [汎用コード登録 / 変更] (36.2.13) に進み、[Access Location] フィールド名 (usr\_access\_loc) を入力してから Enter を押します。
- 2 有効な値を入力します。Enter を押します。
- 3 必要なコメントを入力します。Enter を押すと、その記録が保存されます。



- 4 ロケーションごとに手順を繰り返します。
- 5 有効な全ロケーションを入力したら、End を押して終了します。

## ユーザーの定義

初回のログイン時の唯一の有効なユーザーは mfg です。管理ユーザーはすぐに設定できるはずですが、管理ユーザーとしてこの作業のためにログインすることができます。次に、必要な場合は、追加のユーザーのためのアカウントを設定してください。

- 1 [ユーザー登録 / 変更] (36.3.18) に進み、ユーザー ID とユーザー名を入力します。

The screenshot shows a window titled "Character Client for Production" with the following information:

Character Client for Production		
ngurmt.p 2+	36.3.18 User Maintenance	08/29/02
User ID: acc	User Name: Andrew Claridge	
Language: us	Country Code: us	Variant:
Password:	Date Last Changed: 07/11/02	Restricted: No
User Type: Employee	Access Location: CORP	
Time Zone: GMT-7		
E-Mail:		
Address:		
Definition:		
Interface Preferences:		
Menu Style: A < A - Icons B - Tear Off C - Character >		
WinHelp?: No		
Menu Substitution: No		
Groups: ACCT01, PLANNING		

- 2 このユーザーのための言語コードを入力します。
- 3 [国コード登録 / 変更] から有効な国コードを入力し、有効な時間帯も入力します。このユーザーが GUI クライアントで作業する場合は、[WinHelp] を [Yes] に設定して Windows ヘルプ データベースを有効にすることができます。
- 4 アクセス ロケーションを入力します。これは必須フィールドです。値は汎用コードの中になければなりません。
- 5 Go を押すと、その記録が保存されます。[Application List] フレームは、このユーザーがライセンスを保有している QAD 製品を示します。

The screenshot shows the same window as above, but with the "Application List" table visible:

Character Client for Production			
ngurmt.p 2+	36.3.18 User Maintenance	07/12/02	
User ID: acc	User Name: Andrew Claridge		
Application List			
Application	Description	Active	Date
MFG/PRO		yes	07/11/02

- 6 End を押すと画面が閉じます。すべての情報が正しいことを確認してください。
- 7 もう一度 End を押して [ユーザー登録 / 変更] を閉じます。
- 8 ユーザーごとに手順を繰り返します。

「オンライン ヘルプのロード」(95 ページ) を参照。

## オンライン ヘルプのロード

Oracle データベースを作成した後は、いつでもオンライン ヘルプ データをロードすることができます。Oracle データベースごとにヘルプ データをロードする必要があります。

- 1 [MFG/PRO Main Menu] から、[フィールド ヘルプ ロード] (36.4.19) を開きます。
- 2 [Language] フィールドで、ヘルプをロードする言語の MFG/PRO 言語コードを入力します。次に、[Enter] を押してください。
- 3 [Field Help Load File] に進み、他のすべてのフィールドを空白のままにします。[Field Help Load File] では、2 文字の言語コードディレクトリに続けてヘルプ ファイル名を入力してください。ヘルプ ファイル名は常に fieldhlp.fhd です。例えば、米英語の場合、us/fieldhlp.fhd と入力します。

```

mgflld.p e+          36.4.19 Field Help Load          04/04/00
-----
Language: us  english (U.S.)
  Field:
    To:
Procedure:
  Status:
Text Type:
  To:
  To:
  To:
Field Help
Load File: us/fieldhlp.fhd
-----
Skip loading help with lower status: yes

```

- 4 他のすべてのフィールドではデフォルト値を取ります。
- 5 Go を押して、ロード処理を始めます。

🕒 時間 00:55:00

ロードが進むにつれ、読み込まれ、ロードされたレコード数が画面の下部に表示されます。

```

mgflld.p e+          36.4.19 Field Help Load          04/04/00
-----
Language: us  english (U.S.)
  Field:
    To:
Procedure:
  Status:
Text Type:
  To:
  To:
  To:
Field Help
Load File: us/fieldhlp.fhd
-----
Skip loading help with lower status: yes
-----
Loaded flhm_mst   : 40          Loaded flhd_det   : 2,400
Read flhm_mst    : 40          Read flhd_det    : 2,400
Expected flhm_mst: 0          Expected flhd_det: 0

```

- 適切な言語コードとヘルプ ファイルを使用して、お使いの環境に他の言語のヘルプをロードします。

## 言語のインストール状態のテスト

MFG/PRO ユーザーを特定言語に関連付けたら、次の手順でセットアップした各言語のテストを行います。

- 特定言語のスクリプトまたはショートカットを使用して、MFG/PRO セッションを起動します。
- MFG/PRO ログイン画面で、テストする言語に関連付けられた MFG/PRO ユーザー ID を指定します。
- メニュー項目 1.4.1 ([品目マスタ登録 / 変更]) を開き、フィールド ラベルが翻訳されていることを確認します。
- Help を押して、最初のフィールド (品目番号) に関連付けられた一覧表示を開き、一覧のラベルが翻訳されていることを確認します。
- もう一度 [Help] を押して、最初のフィールド (品目番号) のフィールド ヘルプを開き、ヘルプが翻訳されていることを確認します。
- 最初のフィールドに数値を入力し、Go を押します。データベースに新しいレコードを追加中 (英語では「Adding new record」) というメッセージが該当言語で表示されます。
- Go を押して、2 番目のフィールド 1.4.1 (英語では「UM」) を開きます。テスト項目で Delete を押して、最初のフィールドに戻ります。項目の削除を確認するプロンプトが該当言語で表示されます (英語では「Please confirm delete」)。キャンセルするには [No] を、削除するには [Yes] を選択します。

この手順で、テストする言語が正しく表示されない場合、次のようなエラーの原因がないか確認してください。これらの原因に対処しても問題が発生する場合、QAD Web サイトのサポート ページをご覧くださいか、QAD サポートまでご連絡ください。

- [ユーザー登録 / 変更] (36.3.18) で、ログインしようとしている MFG/PRO ユーザー ID が存在すること、また、該当言語が関連付けられていることを確認します。
- [ラベル コントロール] (36.4.17.24) の [フレームを翻訳] が [Yes] に設定されていることを確認します。
- 特定言語のシステム データ (翻訳されたメニュー、メッセージ、管理データ、ヘルプ) をメインと管理データベースにロードしていることを確認します。

☛ 「MFG/PRO データのロード」 (52 ページ) を参照。

- `MFGPROInstallDir` の中に 2 文字の言語サブディレクトリと 2 文字のコンパイル済みコードのサブディレクトリが作成されていることを確認します。
- クライアント `PROPATH` のディレクトリに、複数のコンパイル済みコードファイルがコピーされているかどうか確認します。テストに使用しているクライアントのタイプによっては、`PROPATH` が別の場所に存在します。
  - キャラクタクライアントの場合、`PROPATH` は `client.Production` など、クライアントの起動スクリプトにリストされます。
  - GUI クライアントの場合、GUI クライアント ディレクトリの GUI クライアント初期化ファイルにリストされます。初期化ファイルは、データベース名に `.svg` または `.vga` 拡張子がついたものです (`production.svg` など)。
- クライアント `PROPATH` に 正しい特定言語の `bbi` サブディレクトリがあることを確認します。`bbi` サブディレクトリは、2 文字の言語サブディレクトリの中にあります。
- MFG/PRO は、Progress `promsgs` ファイルを使って、削除確認メッセージに対する [Yes] と [No] などの簡単なメッセージを処理します。このファイルを使用するプログラムの場合、クライアントのスタートアップまたはショートカットで適切な `promsgs` ファイルを参照しない限り、プロンプトが正しく表示されません。

## MFG/PRO の終了

- 1 MFG/PRO を終了するには、メインメニューで [End] を押します。
- 2 次のコマンドで、データベース セット内のデータベース サーバーをシャットダウンします。

```
./stop.DBSetName
```

Windows では、スタートメニューから [Shut Down データベース セット名] (データベースのシャットダウン) を選択します。



## 第7章

# 追加データベースのインストール

この章では、トレーニング、デモ、テスト環境用に追加の MFG/PRO Oracle データベースをセットアップします。

まとめ	100
スキーマホルダの作成	103
データベース所有者の変更	104
SQL スクリプトの変更	105
SQL スクリプトの実行	109
MFG/PRO データのロード	109
インデックス SQL スクリプトの実行	109
データベースセットの設定	110
起動スクリプトの生成	110
Windows クライアントのセットアップ	110

## まとめ

インストール作業のこの時点までに、1つのOracle実務用データベースを新しいOracleインスタンスでセットアップしました。実務用データベースに加え、特定のアクティビティ用にデータベースが作成されます。例えば、トレーニングクラスでは一人一人に自分のデータベースが必要となります。また、新しいMFG/PROおよびユーザー定義機能を実務環境で使用する前にそれを試すために、デモ用データベースおよびテスト用データベースをセットアップすることができます。

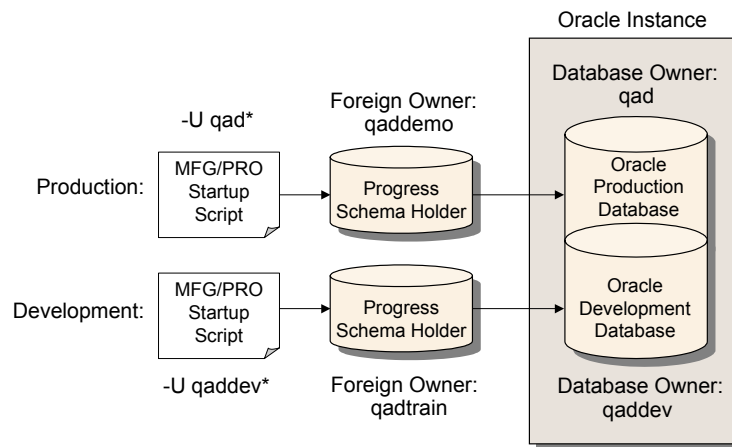
- 追加データベースインストールのまとめについては、21ページを参照。

この章では、MFG/PRO実務用データベースを既に持っているインスタンスにMFG/PROトレーニング用データベースを追加する方法を説明します。必要なトレーニング用データベースや、テスト用、デモ用などのデータベースごとに、この手順を繰り返してください。

## 推奨する構成

複数のデータベース用にお勧めする構成は、データベース所有者が複数ある1つのインスタンス、つまり、MFG/PROデータベースごとに1つのインスタンスです。図7.1に示すように、各MFG/PROデータベースにはそれ自体のスキーマホルダ、Oracleデータベース所有者、およびMFG/PRO起動スクリプトまたはショートカットが必要です。

図 7.1  
複数データベースの概要



\*For simplicity, the user and owner are identical.

スキーマホルダと起動スクリプトは、正しいデータベース所有者を参照しなければなりません。起動スクリプトでは、-U (ユーザー) パラメータが、データベース所有者にアクセスする権利を持つユーザーを指定します。簡単にするため、このセクションの例では、ユーザーがデータベース所有者と同じ名前を持つと仮定します。スキーマホルダでは、データベース所有者は FOREIGN\_OWNER スキーマ要素によって指定されます。

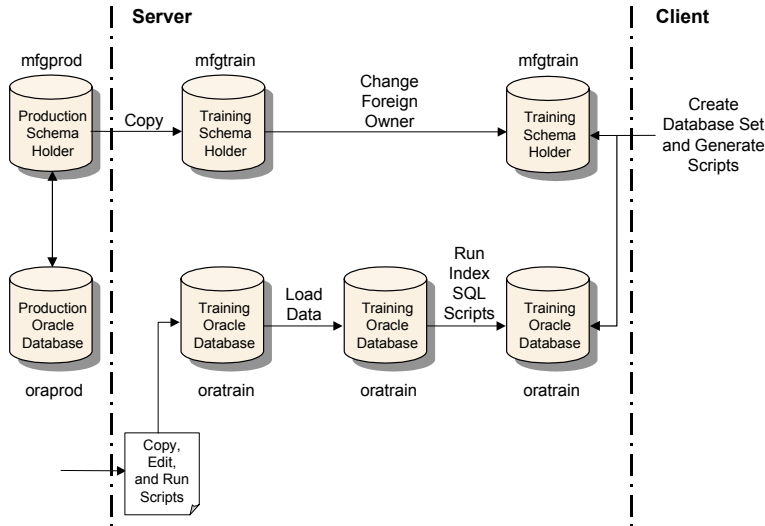


図 7.2  
新しいデータベース作成処理

## 追加構成

異なるビジネス アクティビティのためにそれぞれ別の独立したデータベースを作成することがお勧めされるものであり、このガイドではその構成を前提としています。しかし、異なる実務用スキーマを持つ複数のデータベースが同じ管理用スキーマとヘルプスキーマを共有する複数データベース環境を構成することもできます。スキーマは、MFG/PRO の各論理領域のテーブルスペース、インデックス、およびシーケンスを参照します。

例えば、シカゴおよびニューヨークにオフィスがある場合、それぞれに実務用スキーマ、管理用スキーマ、およびヘルプスキーマがある別々のデータベースを作成する代わりに、2セットの実務用スキーマを作成してから、1セットの管理用スキーマおよびヘルプスキーマを共有させることができます。

このガイドではこの構成について詳しくは触れません。しかし、この構成には一般に次のタスクが必要となります。

- MFG/UTIL の [Create Database] 機能を使用して、スキーマ ホルダを作成します。
- 作成する Oracle スキーマの所有者に FOREIGN\_OWNER 参照を変更することによって、デフォルトの MFG/PRO データ定義ファイル (.df) を変更します。例えば、chicago が所有する新しい実務用スキーマを作成したい場合、oraempty.df の FOREIGN\_OWNER 参照を chicago に変更します。
- SQL スクリプトを変更、実行して、必要な新しい Oracle スキーマを作成します。例えば、SQL スクリプトを変更して、Oracle インスタンスの chicago によって所有される新しい実務用スキーマを作成します。
- すべての MFG/PRO .df ファイルをスキーマ ホルダにロードします。  
例えば、既存の管理用スキーマおよびヘルプ スキーマを共有し、シカゴ用の新しい実務用スキーマを使用するには、変更済みの oraempty.df と、デフォルトの oadmempty.df および ohpempty.df をそのスキーマ ホルダにロードします。
- 新しいスキーマ ホルダおよび Oracle インスタンスを参照する MFG/PRO データベース セットを作成します。
- クライアント起動スクリプトおよびショートカットを生成します。
- 複数のセットの実務用スキーマが同じ管理用スキーマを共有するようにさせるには、MFGPROInstallDir の oraseqsyn.sql スクリプトを実行する必要があります。

このスクリプトの詳細については、「シーケンス シノニム スクリプトの使用」(115 ページ) 参照。

## スキーマ ホルダの作成

次の手順に従って、新しい Oracle データベース所有者を参照するスキーマホルダを作成してください。

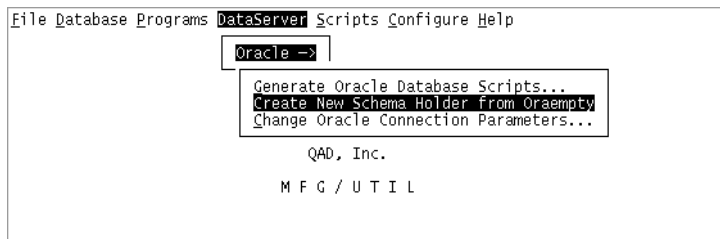
### 空のスキーマ ホルダのコピー

**注意** これらの手順では、Progress 4GL または ProVISION がお手元にあることを前提とします。

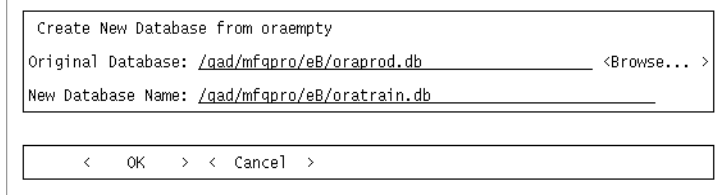
- 1 次の MFG/PRO データベース サーバー管理ディレクトリから、MFG/UTIL を起動します。

```
cd /DBAdminDir
./mfgutil
```

- 2 MFG/UTIL の [DataServer] メニューから [Oraclee]、[Create New Schema Holder from Oraempty] を順に選択します。



- 3 [Original Database] フィールドで、実務用スキーマホルダのパスおよび名前を指定します。[New Database Name] フィールドで、新しいスキーマホルダに使用したいディレクトリロケーションと名前を指定します。



- 4 [OK] を選択すると、新しいスキーマホルダが作成されます。この処理が終わると、[Copy Progress] 画面で [Close] を選択してください。
- 5 次の画面では、デフォルトの ORACLE\_SID およびデータベース値を使用します。

🕒 時間 00:01:00

Current ORACLE_SID Value: mfgora Oracle Database Name: <u>mfgora</u>
<input type="button" value="OK"/> < <input type="button" value="Cancel"/> >

- 6 Oracle データベース名を確認するかたずねるプロンプトが表示されたら、[Yes] を選択します。

Question Is the New Oracle Database Name Correct? mfgora
<input type="button" value="Yes"/> < <input type="button" value="No"/> < <input type="button" value="Cancel"/> >

- 7 MFG/UTIL の [File] メニューから、[Exit] を選択します。

## データベース所有者の変更

- 1 コマンド ラインから、次のコマンドを実行すると、Progress Procedure Editor が起動され、新しいスキーマ ホルダに接続されます。

```
pro SchemaHolder.db
例：pro oratrain.db
```

- 2 Progress Procedure Editor において、次のプログラムを入力することによって、スキーマホルダの FOREIGN\_OWNER 参照を qad から新しいデータベース所有者名に変更します。

```
for each _file
  where _file-number > 0 and _file-number < 32768:
    assign _frozen = no.
end.
pause 0 before-hide.
hide all no-pause.

for each _file
  where _for-owner = 'QAD':
    assign _for-owner = 'NewDatabaseOwner'.
end.

for each _sequence:
  assign _seq-misc[2] = 'NewDatabaseOwner'.
end.

for each _file
  where _file-number > 0 and _file-number < 32768:
    assign _frozen = yes.
end.
pause 0 before-hide.
hide all no-pause.
```

例 図 7.3 は、FOREIGN\_OWNER 参照を QADTRAIN に変更するプログラムの例です。

```
File Edit Search Buffer Compile Tools Help
for each _file where _file-number > 0 and _file-number < 32768:
  assign _frozen = no.
end.
pause 0 before-hide.
hide all no-pause.

for each _file where _for-owner = 'QAD':
  assign _for-owner = 'QADTRAIN'.
end.

for each _sequence:
  assign _seq-misc[2] = 'QADTRAIN'.
end.

for each _file where _file-number > 0 and _file-number < 32768:
  assign _frozen = yes.
end.
pause 0 before-hide.
File: /users/cwp/4n_owner.p
```

図 7.3  
スキーマ ホルダ参照変更

- 3 [Compile] メニューから [Run] を選択して、このコードを実行します。
- 4 [File] から [Exit] を選択すると、Progress Editor が終了します。

🕒 時間 00:00:00

## SQL スクリプトの変更

SQL スクリプトを変更するには、サブディレクトリを作成し、データベース サーバーからファイルをコピーし、テーブルおよびインデックス スクリプトを変更することが必要です。

### MFG/PRO スキーマ スクリプトの変更

次の手順に従って、MFG/PRO データベース スキーマ SQL スクリプトを変更してください。

- 1 SQL スクリプトを含むサブディレクトリを作成します。
  - a 新しいデータベースのための SQL ファイルを格納するようにサブディレクトリを作成します。
 

```
mkdir traindb
```
  - b データベース サーバー管理ディレクトリから新しいサブディレクトリに次の SQL ファイルをコピーします。
    - oadmempty-idx.sql
    - oadempty-seq.sql
    - oadmempty-tbl.sql
    - ohpempty-idx.sql

- lvorasp.plb
  - ohpempty-tbl.sql
  - oraempty-idx.sql
  - oraempty-seq.sql
  - oraempty-tbl.sql
- c** SQL ファイルの名前を変更します。例えば、トレーニング用データベースの場合は `troradmempty-idx.sql` のようにします。
- 2** SQL ファイルを変更します。
- a** サブディレクトリで、admin テーブルの SQL スクリプトを開きます。
- ```
cd traindb
vi troadmempty-tbl.sql
```
- b** テキスト エディタにおいて、新しいデータベースのための他と重複しないテーブルスペースを示すように、`create tablespace` ステートメントをすべて変更します。テーブルスペース名は最大 30 文字です。
- SQL ファイルの `TABLESPACE` を見て、`create tablespace` ステートメントを探します。`TABLESPACE` に続く値がテーブルスペース名です。その値がデータベースにとって他と重ならないようにします。
- 次の例は、この検索置換を vi テキスト エディタで実行するコマンドです。
- ```
:g/ TABLESPACE /s// TABLESPACE tr/
```
- 使用するテキスト エディタによってはコマンドが異なる場合があります。このコマンドを実行した後、このファイル中の各テーブルスペースには、トレーニング用データベースであることを示すように `tr` のプレフィックスが付いています。
- c** 変更を保存して、ファイルを閉じます。
- d** ヘルプ テーブルのための SQL スクリプトをテキスト エディタで開きます。次に、同じコマンドを繰り返して、テーブルスペース名を変更してください。
- ```
vi trohpempty-tbl.sql
:g/ TABLESPACE /s// TABLESPACE tr/
```
- e** 変更を保存して、ファイルを閉じます。

- f** メイン テーブルのための SQL スクリプトをテキスト エディタで開きます。次に、同じコマンドを繰り返して、テーブルスペース名を変更してください。

```
vi troraempty-tbl.sql
:g/ TABLESPACE /s// TABLESPACE tr/
```

- g** 変更を保存して、ファイルを閉じます。

- 3** 手順 2 を繰り返して、インデックス データベース オブジェクトの SQL を変更します。
- troadmempty-idx.sql
  - trohpempty-idx.sql
  - troraempty-idx.sql

## MFG/PRO データベース ビルド スクリプトの変更

次の手順に従って、MFG/PRO データベース ビルド スクリプト、`crdb2ORACLE_SID.sql` を変更してください。

- 1** 各種ディレクトリを次のデータベース サーバー管理ディレクトリに変更します。

```
cd ..
```

- 2** 変更を始める前に、もとの `crdb2ORACLE_SID.sql` スクリプトの名前を変えます。

```
cp crdb2mfgora.sql orgcrdb2mfgora.sql
```

- 3** `crdb2ORACLE_SID.sql` をテキスト エディタで開きます。

```
vi crdb2mfgora.sql
```

- 4** `connect internal` コマンドと、`## * Create tablespaces for MFG/PRO` コメントとの間の複数の行を削除します。

- 5** MFG/PRO テーブルスペースのそれぞれについて、テーブルスペースのサイズと、テーブルスペースを格納したいディレクトリを指定します。

テーブルスペースのサイズおよびロケーションを指定する際には、以下を考慮してください。

- RBS、TEMP、TOOLS、および USERS のテーブルスペースは、定義しないでください。これらのテーブルスペースは Oracle インスタンスによって使用され、そのインスタンスのテーブルスペースによって共有されます。これらのテーブルスペースは、実務用データベースを作成したときに定義されています。

MFG/PRO テーブルスペースのそれぞれの説明については、表 3.3、「MFG/PRO on Oracle テーブルスペース」(46 ページ)を参照。

- 各データベースのテーブルスペースを異なるディレクトリに格納する必要があります。
- デフォルトのトレーニング用データおよびデモ用データについては、デフォルトのテーブルスペース サイズを受け入れます。新しいデータベースに追加のデータを加えたい場合は、デフォルトのテーブルスペース サイズを大きくする必要があるかもしれません。
- MFGHELP テーブルスペースおよびインデックスのデフォルトのサイズを大きくする必要があるかもしれません。複数の言語をロードする計画がある場合は、追加する言語分だけデフォルト サイズを大きくしてください。

6 ## \* Create rollback segments コメントと、create user qad identified by qad; コマンドとの間の複数の行を削除します。

7 user qad identified by qad への参照を新しいデータベース名に変更します。指定した新しいデータベース名が、スキーマ ホルダの FOREIGN\_OWNER 参照 (qadtrain) と一致するようにしてください。

**例** 次のスクリプト行はトレーニング用データベースのデータベース所有者を追加するものです。

```
create user qadtrain identified by qadtrain;
grant dba to qadtrain;
alter user qadtrain default tablespace tools
temporary tablespace temp;
```

8 SQL スクリプトの末尾から次の行を削除します。

```
connect qad/qad@ORACLE_HOME/rdbms
/admin/catdbsyn.sql
```

9 新しいデータベースのための他と重複しないテーブルスペースを示すように、create tablespace ステートメントをすべて変更します。テーブルスペース名は最大 30 文字です。

create tablespace ステートメントは、SQL ファイルの create tablespace を見るとわかります。このステートメントに続く値がテーブルスペース名です。この値を、新しいデータベース用の他と重複しないものに変更してください。

この vi 検索置換の例では、ファイルの各テーブルスペースに tr のプレフィックスが付けられます。使用するテキスト エディタによってはコマンドが異なる場合があります。

```
:g/create tablespace /s//create tablespace tr/
```

10 変更を保存して、スクリプトを閉じます。

## SQL スクリプトの実行

これらの手順はもとのデータベースについて実行した手順とほぼ同じですが、ファイル名を変更することになります。

●「SQL スクリプトの実行」(49 ページ)を参照。

## MFG/PRO データのロード

このデータロード手順は、一部を除き、もとのデータベースについて実行した手順と同じです。

●「MFG/PRO データのロード」(52 ページ)を参照。

例外：MFG/PRO はトレーニング環境およびデモ環境のためにデータを提供します。/mfg ディレクトリからデータをロードするのではなく、作成するデータベース次第では表 7.1 のディレクトリからロードします。

## データベース専用データ

| サブディレクトリ                            | 説明                                                                               |
|-------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| ./mfgtrain                          | MFG/PRO トレーニング用データを格納します。                                                        |
| ./mfgdemo                           | MFG/PRO デモ用データを格納します。                                                            |
| ./mfg                               | 標準的な MFG/PRO デフォルトのデータを格納します。実務環境を再現するテスト用データベースを作成するには、このディレクトリからデータをロードしてください。 |
| ./tritrain                          | ユーロ通貨のための MFG/PRO 間接為替レート換算トレーニング用データを格納します。                                     |
| ./seattle<br>./newyork<br>./chicago | マルチサイトトレーニング用データを格納します。これらのそれぞれを別々のデータベース所有者にロードしてください。                          |

表 7.1  
データベース専用データ

## インデックス SQL スクリプトの実行

これらの手順はもとのデータベースについて実行した手順とほぼ同じですが、ファイル名を変更することになります。

## データベース セットの設定

- 「データベース セットの設定」 (70 ページ) を参照。

データベース セットの設定には、標準的な手順とは異なる点が 1 つあります。Oracle データベースの [Edit Client] (クライアント編集) 画面の接続パラメータは次の形式になります。

```
-U NewDBName@ORACLE_SID  
-P NewDBPassword
```

## 起動スクリプトの生成

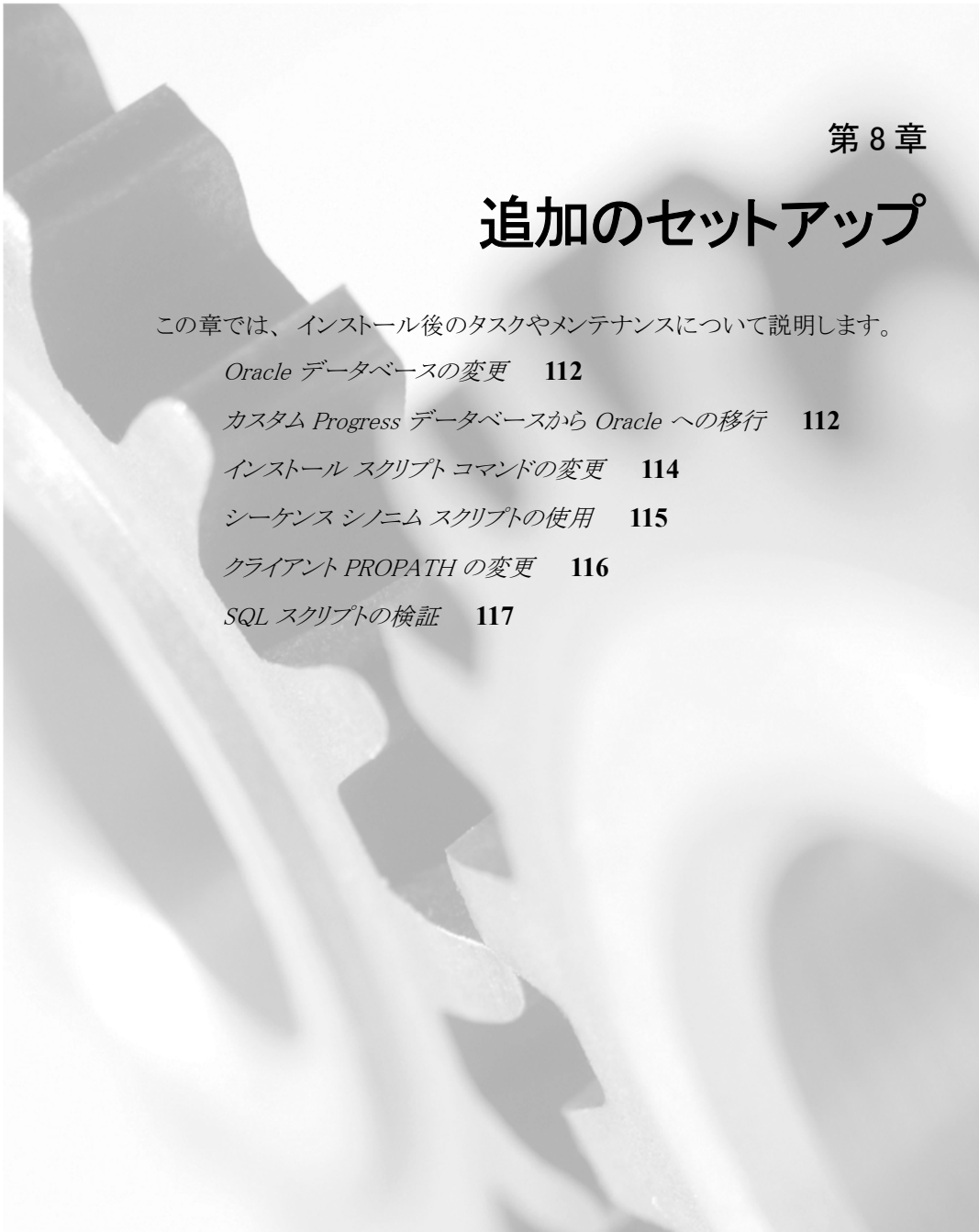
- 「スクリプトおよびショートカットの生成」 (80 ページ) を参照。

元のデータベースと同じ手順で、起動スクリプトを生成します。

## Windows クライアントのセットアップ

- 第 4 章 「Windows ファイル サーバーのインストール」 (62 ページ) を参照。

元のクライアントと同じ手順で、追加データベースの Windows クライアントをセットアップします。



## 第 8 章

# 追加のセットアップ

この章では、インストール後のタスクやメンテナンスについて説明します。

*Oracle* データベースの変更 **112**

カスタム *Progress* データベースから *Oracle* への移行 **112**

インストール スクリプト コマンドの変更 **114**

シーケンス シノニム スクリプトの使用 **115**

クライアント *PROPATH* の変更 **116**

*SQL* スクリプトの検証 **117**

## Oracle データベースの変更

カスタム プログラムを新規に作成する場合は、Oracle データベースにテーブルやテーブルスペースを追加しなければならない場合があります。ただし、標準の MFG/PRO テーブルは変更してはいけません。

Oracle データベースを変更する場合は、DataServer ユーティリティ、Update/Add Oracle Table Definitions を使用して、Progress スキーマ ホルダを変更する必要があります。このユーティリティが Oracle スキーマ内のオブジェクトを使用してスキーマ ホルダを作成します。スキーマ ホルダが作成されたら、この新しいスキーマ ホルダに対してご自分のカスタム プログラムをコンパイルできます。

## カスタム Progress データベースから Oracle への移行

補助的な Progress データベースを Oracle データベースに移行する必要がある場合は、DataServer ユーティリティ `protoora.p` を使用してください。このユーティリティの使用は、データベースを正しく変換するのに必要ないくつかの手順の最初に相当します。

Protoora (Progress-to-Oracle) が採用している規則のなかにはご使用の Oracle データベースに合わないものがあります。初回の実行時に、Protoora は、すべてのスキーマ オブジェクトおよびデータについて1つのデータ テーブルスペースと1つのインデックス テーブルスペースしか持たないデータベースを作成します。また、文字カラムの一部が小さ過ぎることになるかもしれません。これは Protoora がデータ ディレクトリのフォーマット値を基本サイズ値として使用していることによるものです。

これらの問題を解決するには、SQL スクリプトに変更を加え、それを再実行して正しい Oracle データベースを作成してください。

**警告** MFG/PRO on Progress 環境から MFG/PRO on Oracle に移行する場合は、これらの手順を使用しないでください。この変換を行う場合は、『*MFG/PRO eB2 Conversion Guide*』を参照してください。

● 詳細については、『*Progress DataServer Guide (Progress DataServer ガイド)*』を参照。

- 1 `protoora.p` を実行します。
- 2 Protoora ユーティリティは、Oracle データベースと、それにマッチした Progress スキーマ ホルダをセットアップします。  
ユーティリティの前半では、補助的な Progress データベースを検査し、SQL スクリプトを生成して Oracle データベースを作成します。これらのデータベース オブジェクトは正しくないので、置換する必要があります。  
後半では、Oracle データベースからスキーマ情報を取り出して、Progress スキーマ ホルダ データベースを作成します。

3 Protoora が作成した SQL スクリプトのうちで、次のものに関しては変更が必要となる場合があります。

- a テーブルスペースを作成し、そのサイズを、カスタム補助データベース内のレコード数に合わせて変更します。標準の Oracle テーブルスペース サイズ変更アルゴリズムを使用してください。
- b 作成した新規のテーブルスペースに合わせて、テーブルスペースのパラメータを変更します。
- c カスタム補助データベースを開発したときのアプリケーション要件に合わせて、カラム サイズを調整します。

**注意** カラム (すなわちフィールド) のラベルは、Oracle データベース内ではなく、Progress スキーマ ホルダ内に保存されます。

4 変更した SQL スクリプトを Oracle サーバー マネージャの入力として使用して、正しい Oracle データベース オブジェクト (テーブルスペース、テーブルなど) を作成します。

```
svrmgr1 < YourSQLScriptName
```

5 Protoora が最初に作成した不適切な Oracle データベース オブジェクトを削除します。

6 新しいスキーマ ホルダに接続しているときに、Data Dictionary を開き、Admin メニューを選択し、Dump Data Definitions オプションを選択します。データ定義ファイル (拡張子は .df ) が作成されます。

7 テキスト エディタを使用して、このデータ定義ファイルを開きます。各 ADD TABLE コマンドに対して、FOREIGN-OWNER ステートメントが次の例のように空白になっているようにしてください。

```
FOREIGN-OWNER " "
```

**注意** データ定義にシーケンスを追加する場合は、FOREIGN OWNER を定義する必要があります。

8 これらの新しいデータ定義ステートメントを、メインの MFG/PRO データベース定義ファイルの最後に追加します。

9 更新した MFG/PRO スキーマに対して、カスタム プログラムをコンパイルします。

10 Oracle データベースのセットアップが終わったら、Progress データをデータファイル (拡張子は .d) にダンプし、これらを Oracle データベースにロードします。

11 カスタム ソフトウェアをテストします。

☛『Progress DataServer Guide (Progress DataServer ガイド)』を参照。

## インストール スクリプト コマンドの変更

MFG/PRO インストール スクリプトは、次の UNIX システム用として設計されています。

- HP-UX 11.0
- Sun Solaris SPARC 2.6 および 2.7
- IBM AIX 4.2.1 および 4.3

これら以外の UNIX システムに MFG/PRO をインストールすることは可能ですが、スクリプトで使用されている OS 依存のコマンドは、すべての環境で正しく機能するとは限りません。

インストール スクリプトが正しく機能しない場合は、次の手順に従って、インストール スクリプトを一時的なディレクトリにコピーし、このスクリプトで使用されているコマンドをご自分のシステムに合わせて変更してから、インストールを行ってください。

**1** MFG/PRO 媒体が入っているディレクトリにアクセスします。

- テープ媒体の場合：  

```
cd /TemporaryTapeDir
```
- CD-ROM 媒体の場合：  

```
cd /cdrom
```

**2** `install` スクリプトと、`lib` および `bin` ディレクトリを、自分のシステムの適切なディレクトリにコピーします。以下の手順は、このディレクトリを `tempinstall` と呼ぶことにします。

```
cp install /tempinstall
cp -r bin /tempinstall
cp -r lib /tempinstall
```

**3** `install` スクリプトと `lib` ディレクトリ内のコマンドを、ご使用のオペレーティング システムに合わせて変更します。

**4** 自分のシステム上にあるディレクトリからこのスクリプトを実行するには、コマンド文内で次のパラメータのいずれかまたは両方を使用します。

| パラメータ | 説明                                                                                                                                        |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| -s    | このパラメータを使用して MFG/PRO メディアが格納されているディレクトリを指定します。これがソース ディレクトリとなり、インストール スクリプトはここからファイルをターゲット インストール ディレクトリにコピーします。ディレクトリへのパスは完全パスを使用してください。 |
| -w    | このパラメータを使用してインストール スクリプトが格納されているディレクトリを指定します。ディレクトリへのパスは完全パスを使用してください。                                                                    |

**例** これらの手順で指定したディレクトリの場合、次のコマンドは `tempinstall` ディレクトリからインストール スクリプトを実行します。

```
./install -s /cdrom
```

## シーケンス シノニム スクリプトの使用

複数の所有者の間で同じ管理スキーマを共有するには、データベース サーバー管理ディレクトリに格納されている `oraseqsyn.sql` スクリプトを実行します。

- 共有したい管理スキーマが QAD によって所有されている場合は、手順 3 に進んで `oraseqsyn.sql` を実行してください。
- 共有したい管理スキーマがその他の所有者もっている場合は、以下の手順に従って `oraseqsyn.sql` を編集してください。

- MFG/PRO データベース サーバー管理ディレクトリの場合は、テキスト エディタで `oraseqsyn.sql` を開きます。

```
vi oraseqsyn.sql
```

- このスクリプトで、QAD という値を、この管理スキーマの所有者の名前に変更します。

例えば、Chicago が所有している管理スキーマを共有するには、`oraseqsyn.sql` スクリプト内の QAD を Chicago に置き換えます。このスクリプトは、大文字 / 小文字を区別しません。

```
CREATE SYNONYM edc_sq01 FOR Chicago.edc_sq01
CREATE SYNONYM edc_sq02 FOR Chicago.edc_sq02
CREATE SYNONYM edmfs_sq01 FOR Chicago.edmfs_sq01
CREATE SYNONYM edxf_ssq01 FOR Chicago.edxf_ssq01
```

- 3 この管理スキーマを共有する各所有者ごとに、`oraseqsyn.sql` スクリプトを実行します。次の例では、このスクリプトは 2 回実行されます（New York 所有者によって 1 回、Seattle 所有者によって 1 回）。

このコマンドでは、`Password` は実務用テーブルスペースの所有者のパスワードを意味します。`ORACLE_SID` は、Oracle システム識別子を意味します。

```
sqlplus newyork/Password@ORACLE_SID < oraseqsyn.sql
sqlplus seattle/Password@ORACLE_SID < oraseqsyn.sql
```

## クライアント PROPATH の変更

インストール後に MFG/PRO Windows クライアントの PROPATH 設定を変更するには、Windows クライアント初期化ファイルにアクセスし、その PROPATH エントリを変更してください。

- 1 クライアントのショートカット アイコンを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 2 プロパティ画面で、[Shortcut] タブを選択します。
- 3 [Target] フィールドで、`-ininame` パラメータを使ってクライアントの初期化ファイル（例えば `progress.svg`）の場所を指定します。
- 4 この初期化ファイルをテキスト エディタで開きます。
- 5 このファイルの [Startup] セクション内の PROPATH 設定を変更します。

●「Progress 初期化ファイル」(86 ページ) を参照。

これ以外の Windows クライアント環境の要素も、このファイルを使って制御できます。

## SQL スクリプトの検証

MFG/PRO Oracle データベースを作成するために、いくつかの SQL スクリプトを実行します。これらのスクリプトを実行すると、ログ ファイルが作成されます。このログ ファイルには、各ステートメントの実行、その成否、ステートメント実行時に発生したエラーなどのプロセス情報が書き込まれています。ログ ファイル名は SQL ファイルの名前に `.lst` 拡張子が付いたもの（例えば `oraempty-tbl.lst`）になります。

SQL スクリプトの実行中にいくつかのエラーが発生することがあります。ほとんどのエラーは、Oracle データベース オブジェクトのためのスクリプト内にある `drop` ステートメントがスクリプトの実行時に存在しないことが原因のもので、これらは無視してもかまいません。これ以外のエラーは、解決してからでないといインストール プロセスを続行することができません。

以降のセクションの説明に従って、予期しないエラーが発生したかどうかを調べ、必要に応じて解決してください。

### 予期しないエラーの特定

次の手順に従って、スクリプトの実行時に予期しないエラーが発生したかどうかを調べてください。

- 1 スクリプトのログ ファイルをテキスト エディタで開きます。SQL ログ ファイル名は SQL ファイルの名前に `.lst` 拡張子が付いたもの（例えば `oraempty-tbl.lst`）になります。

```
vi oraempty-tbl.lst
```

- 2 テキスト エディタで、`^ORA` で始まる行のうちで、エラー番号の 2289、942、143、4043 を含まない行を検索します。これらの番号は、SQL ファイル内の `drop` ステートメントに関する、予期されたエラーです。

vi テキスト エディタでこの検索を行うコマンドの例を次に示します。使用するテキスト エディタによってはコマンドが異なる場合があります。次のコマンドで、`FileName.lst` は、SQL スクリプトを実行したときに生成されたログ ファイルを意味します。

```
grep "^ORA" FileName.lst | egrep -v "2289|942|143|4043"
```

- 3 このコマンドの出力を見れば、予期しないエラーとその原因となったステートメントを特定できます。

## Oracle エラー ORA-12805 の解決方法

### 説明

Oracle データベース インデックス スクリプト (oraempty-idx.sql、oradmempty-idx.sql、および ohpempty-idx.sql) には、複数のプロセッサがスクリプト内のステートメントを実行できるようにするためのパラレルオプションが含まれています。一部のオペレーティング システムでは、このオプションが ORA-12805 エラーの原因となります。Oracle はこのエラーに対して次のような情報を提示します。

```
A parallel server query died unexpectedly. (パラレル サーバー クエリは予期しない原因により停止しました)
```

### 解決方法

次の手順に従って、ORA-12805 エラーを引き起こした各 create index ステートメントから、parallel オプションを削除してください。

- 1 ORA-12805 エラーを引き起こした各 create index ステートメントを特定します。このステートメントは、SQL ログ ファイル (*FileName.lst*) のなかのエラーの上に記述されています。
- 2 各ステートメントを、新しい SQL ファイル (例えば new-idx.sql) にコピーします。
- 3 new-idx.sql ファイルの最初の行として、spool コマンドを追加し、出力ファイル (例えば new-idx.lst) を指定します。

```
spool new-idx.lst
```
- 4 このファイルの最後の行として、spool off コマンドを追加します。

```
spool off
```
- 5 new-idx.sql ファイル内の各 create index ステートメントから、parallel キーワードを削除します。
- 6 new-idx.sql ファイルを保存します。
- 7 次のコマンドを使って new-idx.sql を実行します。

```
sqlplus qad/qad < new-idx.sql
```
- 8 spool コマンドで指定した SQL ログ ファイル (new-idx.lst) をチェックして、エラーがないか調べます。

# 用語集

**クライアント マシン。**クライアント/サーバー構成におけるマシンのなかで、クライアントセッションを実行するもの（一般的には PC）。

**クライアント セッション。**データベースを実行しているサーバーにアクセスするアプリケーションを実行している実行形式ファイル。

**クライアント作業用ディレクトリ。**MFG/PRO クライアント セットアップ時に指定されたターゲット ディレクトリ。このディレクトリには、MFG/PRO クライアントセッションの実行に必要なファイルが格納されています。

**クライアント / サーバー。**クライアントセッションがデータベース サーバー プロセスから別のマシン上で実行するようなコンピュータ構成。MFG/PRO Windows クライアントは、クライアント / サーバー構成の中で稼働します。

**クライアント / サーバー接続。**クライアントセッションがデータベース サーバー プロセスから別のマシン上で実行するような接続。MFG/PRO Windows クライアントはクライアント / サーバー接続を必要とします。

**コードページ。**あるコードページで表現されるデータを別のコードページにマッピングするために使用されているキャラクタセット。コードページは使用しているハードウェアまたはオペレーティングシステムに固有のもので、Progress は複数のコードページ間でデータを変換します。クライアントのコードページがデータベースのコードページと異なる場合、Progress はこれらのコードページ間の変換を処理します。

MFG/PRO on Oracle 環境では、Progress DataServer for Oracle は Oracle スキーマホルダと同じコードページを使用する必要があります。した

がって、Oracle データベースのためのデータベース定義をロードするときは、あらかじめコードページを変更する必要が生じる場合があります。

**カラム。**Oracle 用語。テーブル内で 1 つのタイプの情報（例えばアドレスなど）を保持するために使われるエレメント。Progress では、フィールドという用語を使用しています。

**接続パラメータ。**Progress のパラメータ。クライアントセッションからデータベースへどのように接続するかを制御するためのもの。

**変換。**MFG/PRO 8.6 から MFG/PRO eB2 への移行のように、あるリリースから次のリリースへ移行すること。変換作業では、プログラムファイルのほかに、主要なスキーマの変更も必要となる場合があります。

**データ定義ファイル。**MFG/PRO スキーマを構成する、データベースのテーブル、フィールド、インデックスの定義を記述したファイル。データ定義ファイルの拡張子は、.df です。

**データベース。**「Oracle データベース」を参照。

**データベース サーバー。**データベースが格納されているマシン。

**データベース セット。**1 つの論理グループを形成する一連のデータベース。MFG/UTIL は、データベース セットの概念によってクライアント起動スクリプトとアイコンを作成します。標準的な MFG/PRO データベース セットは、1 つのスキーマホルダと Oracle データベースから成ります。

**DataServer for Oracle。**Progress の製品。Progress のアプリケーションが Oracle データベースに対して情報を読み書きできるようにするためのもの。

**デフォルト システム データ。**メニュー、メッセージ、プリンタ、言語コード、およびその他のデフォルトデータ ファイルを最初に設定するためのデータ。

**フィールド。**Progress 用語。テーブル内で 1 つのタイプの情報（例えばアドレスなど）を保持するために使われるエレメント。Oracle では、*カラム*という用語を使用しています。

**ファイル サーバー。**複数のクライアント マシンが共通のファイルやディレクトリを共有できるようにするためのサーバー。QAD では、MFG/PRO リモート Windows クライアント プログラムをファイル サーバーに格納しておくことを推奨しています。こうすることで、プログラムやクライアントの設定を一元管理できます。

**外部データベース参照。**MFG/PRO のプログラムが Oracle データベースに接続するために使用する論理データベース名。標準名は qadddb です。

**インスタンス。**Oracle データベースにアクセスしたり管理したりするための機構。これは、1 つの共有メモリ領域と一連のプロセスで構成されます。

**インスタンス ディレクトリ。**「Oracle インスタンス ディレクトリ」を参照。

**ローカル クライアント。**データベース プロセスと同じマシン上で実行するクライアント プロセス。こうすることで、クライアント セッションはネットワークを介さないでデータベースと直接データのやりとりができるようになります。この種の接続では、システムパフォーマンスが大幅に向上します。デフォルトでは、MFG/PRO のキャラクタ クライアントはローカルクライアントです。

**ログ ファイル。**MFG/UTIL が一連のタスクを完了するたびに作成されるファイル。ログ ファイルは、テキスト エディタで見れます。

**MFG/PRO インストール ディレクトリ。**MFG/PRO データベース サーバー メディアのインストール時に指定されたターゲット ディレクトリ。このディレクトリはデータベース サーバー マシン上に置かれ、MFG/PRO 環境のためのすべてのデータベース関連ファイルが格納されています。

**Net8。**Oracle のネットワークソフトウェア。これにより Progress データサーバーは、各クライアント上でローカルに実行したり、リモート マシン上の Oracle データベースとデータをやりとりしたりできるようになります。

**Oracle データベース。**このマニュアルでは、特定の Oracle ユーザーが所有している一連のスキーマ オブジェクトの論理的な集合を意味します。

**Oracle インスタンス ディレクトリ。**主要ファイル（例えば `init.ora` など）や主要サブディレクトリ（例えば `back`、`core`、`user` など）が格納されているプライマリ インスタンス ディレクトリ。

**ORACLE\_SID。**Oracle データベースのシステム ID を定義する環境変数。ほとんどの場合は、実際の Oracle データベース名と同じにしてください。

**パラメータ ファイル。**MFG/PRO Windows クライアント セッションの起動パラメータが記述されているファイル。これらのパラメータには、Progress と MFG/PRO の両方のデータベースの詳細が含まれています。このファイルは、各クライアント マシンのクライアント作業用ディレクトリに置かれ、次の命名規則に従っています。  
`DatabaseSetName . pf.`

**R コード。**MFG/PRO のコンパイル済みプログラムを意味する用語。ファイル拡張子が `.r` であることからきています。

**スキーマ。**データベースの定義です。これには、データベースのファイル、ファイルのフィールド、インデックス、ビューなどが定義されています。データベース定義のほか、MFG/PRO スキーマには評価式やメッセージなどのアイテムも含まれています。

**スキーマ ホルダ。**MFG/PRO スキーマが格納されているデータベース ファイル。このファイルは MFG/PRO on Oracle 環境で使用され、MFG/PRO、Progress DataServer for Oracle、および Oracle データベース間でデータのやりとりが行えるようにします。

**サーバー。**クライアントが共有リソースに接続できるようにするためのマシン。

**シングルユーザー モード。**一人のユーザーだけがデータベースへの接続を許可されるクライアント接続モード。クライアント起動スクリプトまたはパラメータファイルで -1 起動パラメータを使用していると、シングルユーザー モードで起動されます。

**起動パラメータ。**データベースに対してクライアント接続を行うときに使用される Progress パラメータ。

**構造化問合せ言語 (SQL)。**データベースに対して情報の取得や更新を行うための Oracle プログラミング言語。

**テーブルスペース。**Oracle データベースの最大の物理的な単位。テーブルスペースは、データベース オブジェクト (例えばインデックス、テーブル、データなど) の格納場所を管理します。

**統一命名規則 (UNC)。**共有ファイルを識別するための 1 つの方法。この方法では、ファイルが置かれている記憶装置を指定する必要がありません。



# 索引

## 記号

\$ORACLE\_HOME 29

## B

bdump 43

## C

CD

インストール 34

言語 13

内容 14

マウント コマンド 34

cdump 43

cfg ディレクトリ 33

chicago データベース 22, 102

Compile データベース

設定 74

## D

DataServer ユーティリティ 112

## E

empty.db 32

## F

FOREIGN\_OWNER 101

## G

Guided Setup 17

使用 40

データのロード 52

GUI クライアント

PROPATH、変更 116

## H

HOME 環境変数 33

## L

locale.dat 86

## M

MFG/PRO

言語コード 13

ディレクトリのインストール 37

テーブルスペース 46

MFG/PRO の登録 90

MFG/UTIL 16

キーボード コマンド 16

コンパイル 75

多言語の編集 17

mfgdemo 22

mfgprod 22

mfgtrain 22

mfg ユーザー 33

## N

new york データベース 22

## O

Oracle インデックス 55

Oracle エラー ORA-12805 118

Oracle データベース

作成 49, 109

oraseqsyn.sql 115

## P

PATH 環境変数 33

pfile 43

Probuild 28

Production データベース セット

設定 71

## Progress

- Oracle への移行 112
- Probuild 28
- インストール 15
- クライアント ネットワーキング 25
- 初期化ファイル 86
- スキーマ ホルダ 40
  - リモート クライアント 64
- 多言語セットアップ 32
- ディレクトリ 28
- バージョン 25
- ライセンス 25
- progress.svg 86
- progress.vga 86
- PROPATH
  - コンパイル 77
  - 変更 116
- protoora.p 112

## Q

- Q/LinQ
  - インストール ガイド 3
- QAD Desktop 2
  - インストール ガイド 3
- qad グループ 33
- QAD グローバル サポート 3, 5

## S

- seattle データベース 22
- SQL
  - スクリプトの作成 44
  - スクリプトの実行 49, 109
- SQL スクリプト
  - 検証 117
- startup.pf 32

## T

- tritrain 22

## U

- udump 43

## W

- Web サイト
  - QAD サポート 3
- Web ブラウザ
  - 必要条件 25
- Windows エクスプレス セットアップ 85
- Windows クライアント
  - セットアップ 32

- Windows セッションの起動 83

- Windows の起動 83

- wkodsbrv.ini 17

## ア

- アクセス ロケーション 93
- アンマスク設定 33

## イ

- インストール
  - CD メディア 34
  - Progress 15
  - 概要 11, 21
  - キャラクタ クライアント 89
  - 計画 7, 8
  - 言語 8, 13
  - スクリプト 36
  - 追加データベース 99
  - データベース リスト 8
  - テープ メディア 35
  - 必要条件 15
  - まとめ 8
- インデックス、 Oracle 55

## エ

- エクस्प्रेस セットアップ 85
- エラー
  - Oracle エラー ORA-12805 118

## オ

- オンライン ヘルプのロード 95

## カ

- 会議室パイロット 22
- 環境変数
  - DLC 33
  - PATH 33
  - PROPATH 33
- 間接為替レート換算モジュール 22

## キ

- 起動スクリプト 12
- 基本言語 14
- キャラクタ クライアント 59
  - インストール 89
  - コードのコンパイル 74
  - スクリプトの生成 80
  - データベース セットの設定 70

**ク**

- 国コード 92
- 国コード登録 / 変更 92
- クライアント
  - キャラクタ
    - インストール 59
  - キャラクタのインストール 89
  - ホスト インストールのまとめ 19
  - リモート インストールのまとめ 20
  - リモートの設定 84

**ケ**

- 言語
  - インストール 8
  - 基本 14
  - 言語コード 13
  - ダブルバイト 14
  - 非西欧 13
  - 必要なディスク容量 24
  - 複数 13

**コ**

- 更新前イメージファイル
  - 切り捨て 43
- 更新前イメージファイルの切り捨て 43
- 項目番号
  - ドキュメント 3
- コードページ
  - 未定義 14
  - 矛盾 14
- コンパイル
  - アプリケーション コード 74
  - 多言語 70
  - マルチスレッド 75

**サ**

- サーバー
  - インストール作業のまとめ 15
  - 必要条件 24
  - ファイルのインストール 34
- サービス パック 8
  - インストール 8

**シ**

- シーケンス シノニム スクリプト 115
- 時間
  - ベースライン 4
- 時間帯 93

- システム データのロード 52, 109
- システムの必要条件
  - ネットワーク 26
- 実務用データベース 22
- シノニム スクリプト 115
- 使用許諾契約書 36
- 初期化ファイル
  - Progress 86

**ス**

- スキーマ
  - ロード 41
- スキーマ ホルダ
  - 新しい名前にコピー 56
  - コピー 56
  - 作成 40
  - データベース セット パラメータ 71
  - テーブルスペース 46
  - リモート クライアント 64
  - ロード 41
- スクリプト
  - SQL
    - 作成 43
    - 実行 49
  - 起動 12
  - キャラクタ クライアントの生成 80
  - 検証 117
  - コマンドの変更 114
  - シーケンス シノニム 115
  - リンク 29
- スクリプトのインストール
  - 変更 114

**ソ**

- ソフトウェアの必要条件 25

**タ**

- ターミナル タイプ 28
- 多言語
  - Progress セットアップ 32
  - インストール計画 13
  - インストールのテスト 96
  - クライアント ショートカット 82
  - コンパイル 70, 79
  - サーバー ファイルのインストール 39
  - 翻訳ラベル 18
  - ロケール 86
- ダブルバイト言語 14

**テ**

- ディスク容量 24, 25
- ディレクトリ
  - cfg 33
  - MFG/PRO 37
  - Progress 28
  - インストール 28
- データ
  - データベース専用 109
  - ロード 52
- データベース
  - Progress から Oracle への移行 112
  - インストール 8
  - 実務用 22
  - 所有者、変更 104
  - 多言語 13
  - 追加 99
  - 追加のインストール 21
  - データベース セット 12
  - トレーニング 100
  - 変更 112
  - 補助テーブル 8
- データベース セットの設定 70
- データベース サーバー
  - インストールの概要 9
- データベース サーバー セットアップ 27
  - SQL スクリプトの作成 43
  - SQL スクリプトの実行 49
  - インデックスの構築 55
  - 更新前イメージ ファイルの切り捨て 43
  - システム データのロード 52
  - スキーマのロード 41
  - スキーマ ホルダのコピー 56
  - スキーマ ホルダの作成 40
  - ファイルのインストール 34
- データベース セット 12
  - 概要 20
  - 設定 70
- テーブルのインストール 35
- テーブルスペース、Oracle 46

**ト**

- 導入
  - UNIX 10
  - Windows 10
- ドキュメント
  - 関連の 3
  - 項目番号 3
- トレーニング
  - データベース 100
  - マルチサイト 22

**ネ**

- ネットワーク
  - 必要条件 26
  - レイアウト 9

**ハ**

- ハードウェアの必要条件 24
  - ネットワーク 26
  - ファイル サーバー 25

**ヒ**

- 必要条件
  - Web ブラウザ 25
  - 言語 24
  - サーバー 24
  - サーバー ハードウェア 24
  - ディスク容量 25
  - ネットワーク 26
  - ファイル サーバー 9, 25
  - ファイル ハンドル 24
  - リモート クライアント 25
- 表記規則 4

**フ**

- ファイル サーバー
  - インストール 62
  - インストールの概要 9
  - 必要条件 25
- ファイル ハンドル 24
- 複数時間帯ロード ユーティリティ 93
- 複数のデータベース
  - インストール 100

**ヘ**

- ヘルプ
  - 概要 20
  - データ ロード 95
- 変換、計画 8

**ホ**

- 補助テーブル 8
- ホスト クライアント
  - インストール作業のまとめ 19

**マ**

- マウント コマンド 34
- マルチサイト トレーニング 22
- マルチスレッド コンパイル 75

## ≡

未定義のコードページ 14

## メ

メニューおよびメッセージ データ 38

## ユ

ユーザー

アクセス ロケーション 93

言語 13

時間帯 93

設定 92

ロケール 86

国コード 92

ユーザー登録 / 変更 13

## ラ

ライセンス登録 90

ラベル

翻訳のロード 18

## リ

リモートクライアント

Progress スキーマ ホルダ 64

9

インストール作業のまとめ 20

エクスプレス セットアップ 85

設定 84

必要条件 25

## ロ

ロケーション、アクセス 93

